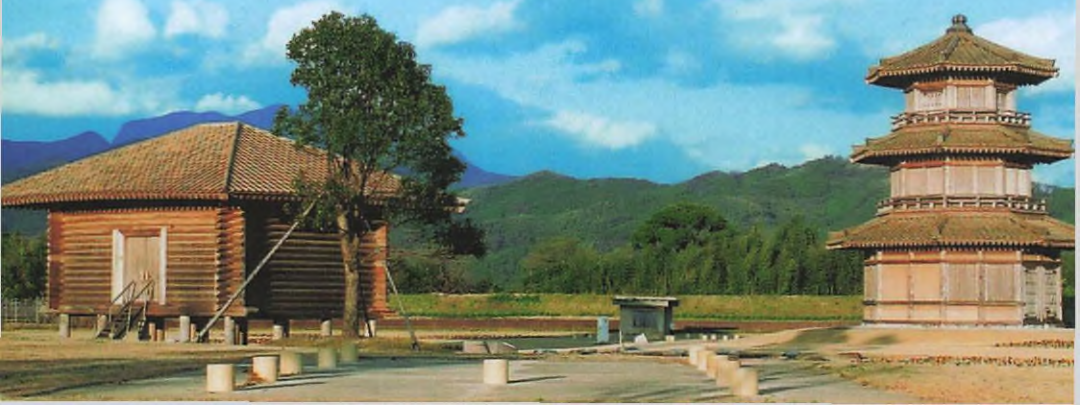
●鞠智城東京シンポジウム報告書――●

古代山城 鞠智城を考える



口絵 1　百済系菩薩立像

正面（左）、側面（中央）、裏面（右）

平成 20（2008）年 10 月 23 日、貯水池跡の池尻部（池の端）で出土。
白村江での敗戦後、百済の「達率」（2 番目の位階）の高級貴族の指導で山城を築城、
との『日本書紀』の記述を裏付ける貴重な遺物であるとともに、
鞠智城の築城の年代や背景を物語る重要な遺物となった。

口絵 2　温故創生館と主な展示物

温故創生館　古代山城「鞠智城」のガイダンス施設。平成 14（2002）年に開館。
今でも年間 11 万人以上の来館者でに賑わいを見せている。
「温故」に調査を、「創生」に保存活用を意味づけて名づけられた。
館内では説明パネルや出土遺物、各種の模型などで鞠智城を紹介。

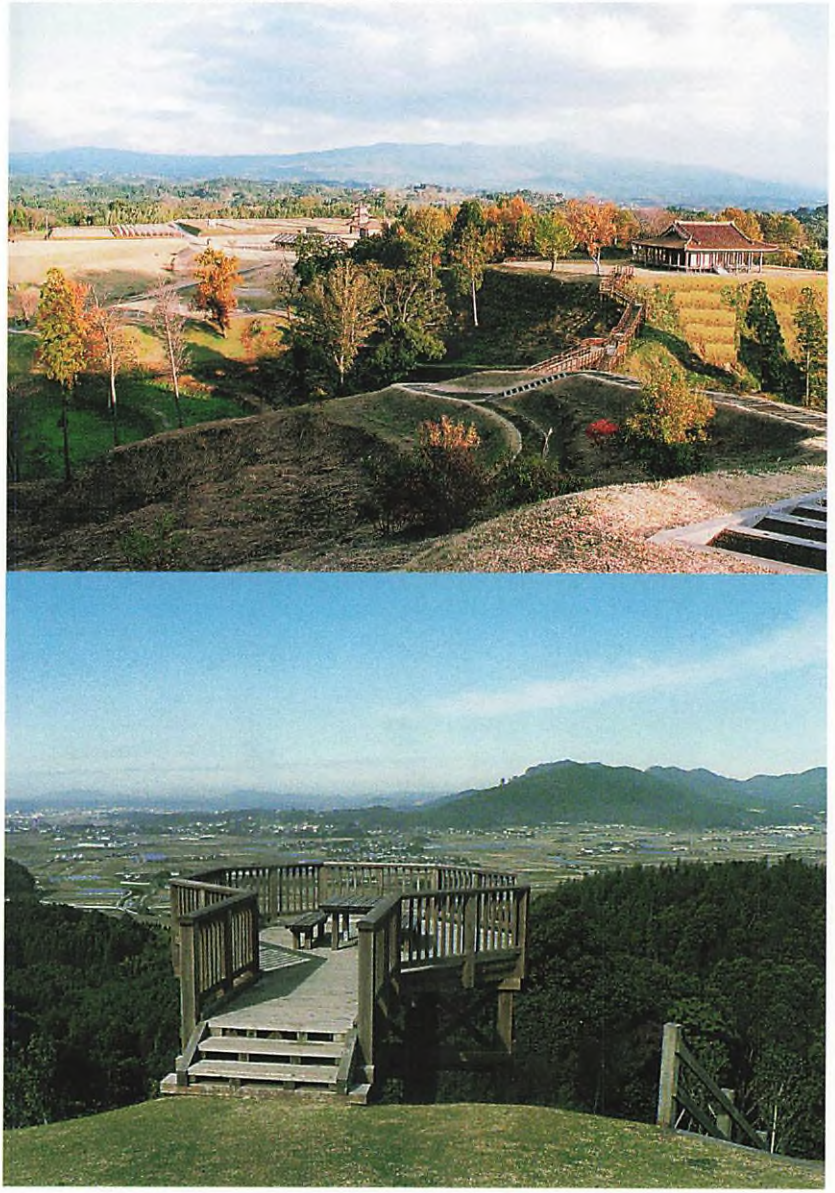
上：木簡　「秦人忍□斗」の文字が
　　墨書されている。
右：百済様式の「単弁八葉蓮華文」
　　軒丸瓦　百済系菩薩立像とともに百済との係わりを直接示す。

口絵 3　温故創生之碑

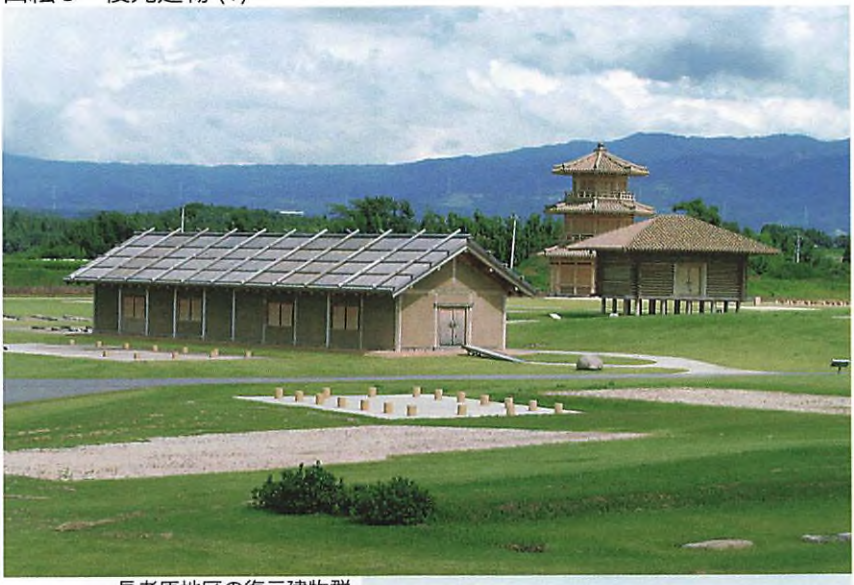
歴史公園鞠智城のモニュメント広場に立つ「温故創生之碑」

平成 8（1996）年、歴史公園鞠智城の整備はここから始まった。
中央の一段高いところに防人、その前面には防人の妻（左）とその子（右）
西側には指を指して鞠智城の築城を指導する百済貴族（憶礼福留）
東側に八方ケ岳に祈りを捧げる巫女
北側には一対の鳳凰
台座には、万葉集からの防人の歌（3 首）と城の歴史を解説した 6 枚のレリーフ

口絵４　灰塚から歴史公園内（上）・西側（下）を望む



口絵 5　復元建物 (1)



長者原地区の復元建物群

八角形鼓楼

口絵 6　復元建物 (2)

↑米倉

↓兵舎

口絵 7　復元建物 (3)

↑板倉（復元建物）　　↓長者山展望所 (復元風建物：鞠智城跡の宮殿風建物)

口絵８　国史跡鞠智城の活用

↑ゴールデンウィークでのスケッチ大会　　↓国際ロードレースのスタート会場

目次

ご挨拶「鞠智城東京シンポジウム　古代山城　鞠智城を考える」……1
一　熊本県知事　蒲島　郁夫……3
二　熊本県文化財保護協会会長　古閑　三博……5
シンポジウム　第Ⅰ部　基調講演……7
「鞠智城と古代の西海道」　笹山　晴生（東京大学名誉教授）
講演者プロフィール……8
はじめに……9
一　鞠智城の地理的位置……10
二　七世紀の日本と鞠智城の設置……15
三　西海道の行政・軍事と鞠智城……19
おわりに……25
シンポジウム　第Ⅱ部　発　表……29
発表者プロフィール……30
「鞠智城の調査と整備」　大田　幸博（熊本県立装飾古墳館長）
一　概要……31

二　発掘調査の経緯と成果……34
三　鞠智城の整備……37

「古代山城としての鞠智城」　岡田　茂弘（国立歴史民俗博物館名誉館長）
一　「城」とは何か……40
二　日本古代の城……41
三　神籠石系山城と朝鮮式山城……43
四　古代山城としての鞠智城……45
五　鞠智城と古代官道……48

「古代史からみた鞠智城」　佐藤　信（東京大学大学院教授）
はじめに……54
一　白村江の敗戦と律令国家の形成……54
二　白村江の敗戦後の防衛対策……56
三　鞠智城の立地の歴史的意義……60
おわりに……66

「朝鮮古代史からみた鞠智城」　濱田　耕策（九州大学大学院教授）
はじめに……68
一　鞠智城の造営……68
二　鞠智城の築城者……76
三　八世紀の鞠智城……79

四　九世紀の菊池城院……83
おわりに……89
シンポジウム　第Ⅲ部　パネルディスカッション……91
関係資料集……123
古代山城関係史料・鞠智城関係年表凡例……124
一　古代山城関係史料……125
二　鞠智城関係年表……133
三　鞠智城関係図表集……141

ご挨拶「鞠智城東京シンポジウム　古代山城　鞠智城を考える」

一　熊本県知事　蒲島　郁夫

二　熊本県文化財保護協会会長　古閑　三博

ご挨拶

本日は、御多用中にもかかわらず、鞠智城東京シンポジウム「古代山城・鞠智城を考える」に、多数の皆様に御参加いただき、誠にありがとうございます。

また、大韓民国大使館、並びに文化庁からも関係の方々の御臨席を賜り、心より厚く御礼申し上げます。

さて、現在、熊本県では「くまもとの夢4カ年戦略」の取組を進めております。その一つとして、本県の優れた文化や歴史などを再認識するために、「誇りに満ちた魅力あふれる地域社会の創造」を目指す「品格あるくまもと」の実現に向け、鞠智城をはじめとする貴重な文化的資産を地域の宝として磨きあげ、そして活かしていく取組を行っているところです。

なかでも鞠智城跡のある菊池川流域は、古来より菊池川の豊かな恵みに育まれ、全国一の数を誇る装飾古墳をはじめ、古代文化が花開いた地域です。そのような地域にあって、激動する東アジア情勢のもとで、我が国が、律令国家の建設を目指した七世紀後半、大和朝廷によって、古代山城「鞠智城」が築かれました。「六国史」に記載された古代山城は、西日本地方に十一城あり、鞠智城はその中の一城に数えられる、貴重な、全国有数の重要遺跡として高く評価されています。

本県では、昭和四十二年から発掘調査を開始し、これまでに国内初となる八角形建物跡、貯水池跡、貯木場跡、木簡など貴重な遺構や遺物が数多く見つかりました。特に、昨年の十月には、貯水池跡池尻部から百済製の菩薩立像が発見され、朝鮮式山城の築城に亡命した百済の達率がかかわったとする

『日本書紀』の記述を裏付ける貴重な資料として、日本国内だけでなく韓国においても大きな注目を集めました。

この歴史的に重要な鞠智城を、くまもとの宝、さらには日本の宝としてしっかりと護り伝え、活かしていくことは、私ども今を生きる者にとって大変意義深いものであると同時に、重要な責務であると考えます。これまで県では、講座やシンポジウムなど、あらゆる機会を通じて、鞠智城の歴史的・学術的な価値について、広く周知されるよう努力して参りました。本日のシンポジウムは、その集大成とでもいうべきものであり、歴史学研究の一大拠点「東京」での開催で、「鞠智城」をキーワードに、日本古代史並びに朝鮮古代史など各分野の研究における第一人者の先生方から、鞠智城跡の歴史的意義と課題を考えるうえで貴重なお話がお聞きできるものと期待しております。本日のシンポジウムの成果によって、全国に鞠智城の歴史的な価値をさらに周知していくことができるものと大いに期待しており、そして鞠智城跡の特別史跡指定がより確実なものになると確信しています。

最後に、本日御参加の皆様の御健勝、御活躍をお祈りいたしまして、挨拶といたします。

平成二十一年七月二十五日

熊本県知事　蒲島郁夫

御挨拶

本日は、実に多くの方々に御来場いただきました。そのお礼を兼ねて、我々、関係者の長年の夢でありました「鞠智城東京シンポジウム」の開催にあたり、一言、御挨拶を申しあげます。

熊本県の鞠智城は、県北の山鹿市を中心に、一部が菊池市にかかる中心標高一四五ｍの丘陵地に築かれています。この地は、『隋書』俀国伝に記載された阿蘇の外輪山に源を発する菊池川中流域でもあります。高山に築かれた他の古代山城と異なるために、城域が確定出来たのは平成二年を待たねばなりませんでした。その上、東京ドーム一二個分の五五㌶の城内には、集落が営まれ、営農地もたくさんありましたので、国指定も平成一六年二月と、大きく出遅れたのであります。

それでも、熊本県では文化庁や鞠智城跡保存整備検討委員会の指導を受けながら、粛々と、発掘調査や整備事業を進めてまいりました。調査も昭和四二年以来、今年度で三一次を数え、この間、我が国の古代山城では、初めての発見が相次ぎました。国営歴史公園としての下地も出来ました。西日本地方に所在する三〇城近い古代山城の中では、最も調査と整備が進んでいると自負しております。

一方、既に特別史跡の大野城・金田城・基肄城に比べると、今一つ、知名度が劣るとの指摘がなされてきたのも事実であります。その理由は、冒頭申し上げた通りであります。そこで、熊本県では、県民、一丸となって、文化庁へ「大野城・金田城・基肄城と同等の対応をお願いする」との要望を行ってきました。

そして、このような熊本県民の願いに応じるかのように、昨年一〇月に貯水池跡の池尻から百済系

菩薩立像が出土するという大発見がありました。関係者の一人としてこれほど、うれしい事はありませんでした。この仏像は、鞠智城の築城を指導した百済の亡命高官が持ち込んだものと確信しております。『日本書紀』の記述を補完する出土遺物として高く評価されるものであります。鞠智城の歴史的な価値をさらに高めるものでありました。

どうか皆さん、本日は、この「鞠智城東京シンポジウム」を通じて、熊本県の鞠智城を十二分に御理解をいただきたく存じます。そして、熊本県民の願いであります「鞠智城の特別史跡指定と国営歴史公園」が早期に実現しますように熱い応援を賜りたく存じます。熊本県では、我が国の古代山城の情報発信基地として、今後も努力を重ねていく所存であります。最後に、皆さまの御健勝をお祈り致しまして、御挨拶といたします。

平成二十一年七月二十五日

熊本県文化財保護協会会長　古閑三博

シンポジウム　第Ⅰ部　基調講演

「鞠智城と古代の西海道」

笹山　晴生（東京大学名誉教授）

講演者プロフィール

笹山 晴生（ささやま はるお）

東京大学文学部国史学科卒業。東京大学大学院人文科学研究科修了。名古屋大学講師、名古屋大学助教授、東京大学教養学部助教授、東京大学文学部助教授を経て、東京大学文学部教授となる。一九九三年、定年退官後、学習院大学文学部史学科教授も務める。東京大学名誉教授。専門は、日本古代史。文学博士。

主な著書に、『古代国家と軍隊〜皇軍と私兵の系譜〜』講談社学術文庫二〇〇四（中公新書としては一九七五）、『日本古代史講義』東京大学出版会一九七七、『日本古代衛府制度の研究』東京大学出版会一九九五など、著書・論文多数。

鞠智城と古代の西海道

笹山晴生

はじめに

鞠智城は七世紀につくられた朝鮮式山城で、福岡県の大野城、佐賀県の基肄城、対馬の金田城などと並ぶ存在である。設置の時期は明らかでないが、文武天皇二（六九八）年条の『続日本紀』に、大宰府に命じて大野・基肄・鞠智三城を修繕させるとあるのが文献上の初見である。その後平安時代の初め、天安二（八五八）年条の『日本文徳天皇実録』に、大宰府からの報告として、五月に肥後国で暴風雨があり、菊池城院の兵庫（武器庫）の鼓がひとりでに鳴り、同城の不動倉（穀を貯えておく倉）十一宇も火災にあったということが見えている。このほか九世紀の史料に「肥後国菊池郡城院兵庫」（日本三代実録元慶三年三月十六日条）、「菊池郡倉舎」（同貞観十七年六月二十日条）などと見えるのも、みな同じ兵庫や不動倉を指すものと思われる。

図1　講演中の笹山晴生氏

鞠智城の跡は熊本県の北部、菊池市・山鹿市にあり、平成十六（二〇〇四）年、「鞠智城跡」として史跡に指定された。近年の発掘調査によって土塁や石垣、城門・倉庫・官衙施設などの遺構が次々に発見され、全体の構造が明らかにされ、整備も進められつつある。その結果、今まで数少ない文献によってしか推測しえなかった鞠智城の性格がしだいに明らかとなり、その存在意義についてもあらためて問題が提起されることとなった。

鞠智城の歴史的な意義を正しく捉えるためには、鞠智城が設置された当時の歴史的な状況について、九州＝西海道全体の広い視野から見てみる必要がある。

一　鞠智城の地理的位置

菊池の地は古代律令制のもとでは肥後国菊池郡に属し、古くは「くくち」と訓まれたらしい。鞠智城の跡に立って望むと、東には阿蘇の山並みが連なり、南から西にかけては広大な熊本平野が広がる。西は遙か、有明海を隔てて雲仙を望むことができる。

谷を刻んで西に流れるのが菊池川で、玉名で有明海に注ぐ。この菊池川は、古代における朝鮮・中国からの文化輸入の一つの経路であった。玉名郡の江田船山古墳出土の大刀の銘には、五世紀後半の倭王武（雄略天皇）と推定される「獲加多支鹵大王」（わかたけるのおおきみ）の名が見え、倭の五王時代にこの地の豪族が倭政権と関わりをもっていったことを物語っている。この地域にはまた、山鹿市のチブサン古墳など多くの装飾古墳も見られ、独自の文化の様相を示している。

玉名から菊池にかけての地域は、九州の北部から中部・南部へと至る陸上交通の要地でもあっ

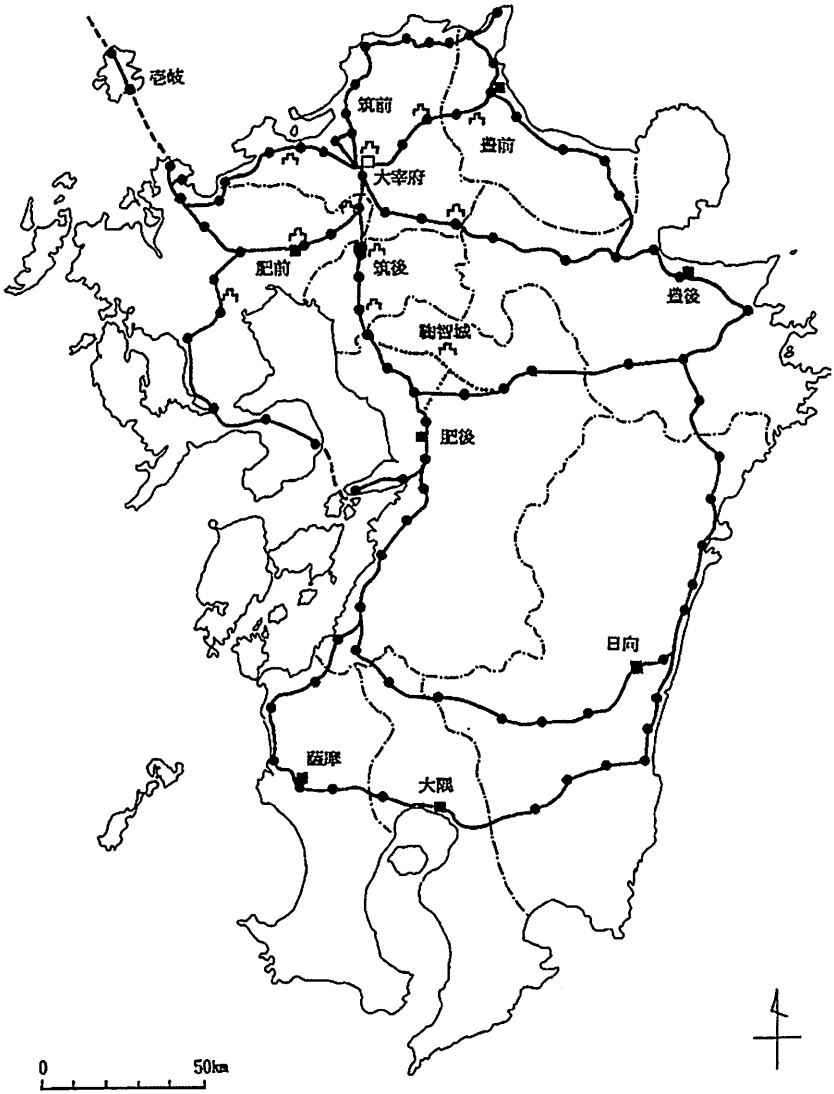


図２　西海道

た。律令時代の官道である駅路は、大宰府から筑後国を経てこの地に至り、熊本平野に入って、東方、阿蘇を経て豊後国に至る道、西方、有明海を渡って肥前国に至る道を分け、さらに南下して葦北・球磨などを経て薩摩・日向へと向かっていた（第〇参照）。阿蘇には阿蘇山を神として祀る阿蘇国造がおり、葦北の地には有明海を通じて海外とも交渉を行っていた火葦北国造がいて、ともに律令制成立以前には、在地に大きな勢力を有していた。火葦北国造阿利斯登（ありしと）の子日羅は百済の王朝に仕えて達率という高位を得た人であり（日本書記敏達十二年是歳条）、また推古十七（六〇九）年には百済の僧俗八十五人を乗せた船が葦北津に漂着していて、葦北の地が大陸との文化的な交渉の上で重要な意味をもった地であることがわかる。鞠智城の地は、これら肥後の諸地域を押さえる重要な役割をもつ地であった。

七世紀後半から八世紀にかけて律令国家が成立すると、九州南部の日向・大隅・薩摩から多禰・屋久・奄美など薩南諸島へと律令制的支配を進めていくことが国家の大きな課題となった。肥後国はこうした政略を進めていく上での基点としての役割を果たしたものと思われる。薩摩国や日向国の郷名に合志・飽田・宇土・山鹿・八代など肥後国の郡名を冠したものの多いことは、肥後国から多くの人々がこれらの地に移住したことを示すものであろう。

鞠智城は七世紀後半の朝鮮式山城で、大野城や基肄城と同様、唐・新羅の進攻に備えるための防衛施設であった。それらの中でもっとも南に位置する鞠智城は、おそらく有明海沿岸からの進攻に備えて造られたものであろう。しかし鞠智城はまた、九州中部・南部への交通の要衝に位置する城であり、ことに八世紀以降には、肥後国の政治・軍事を支え、九州南部への律令制支配の拡大を進めるという

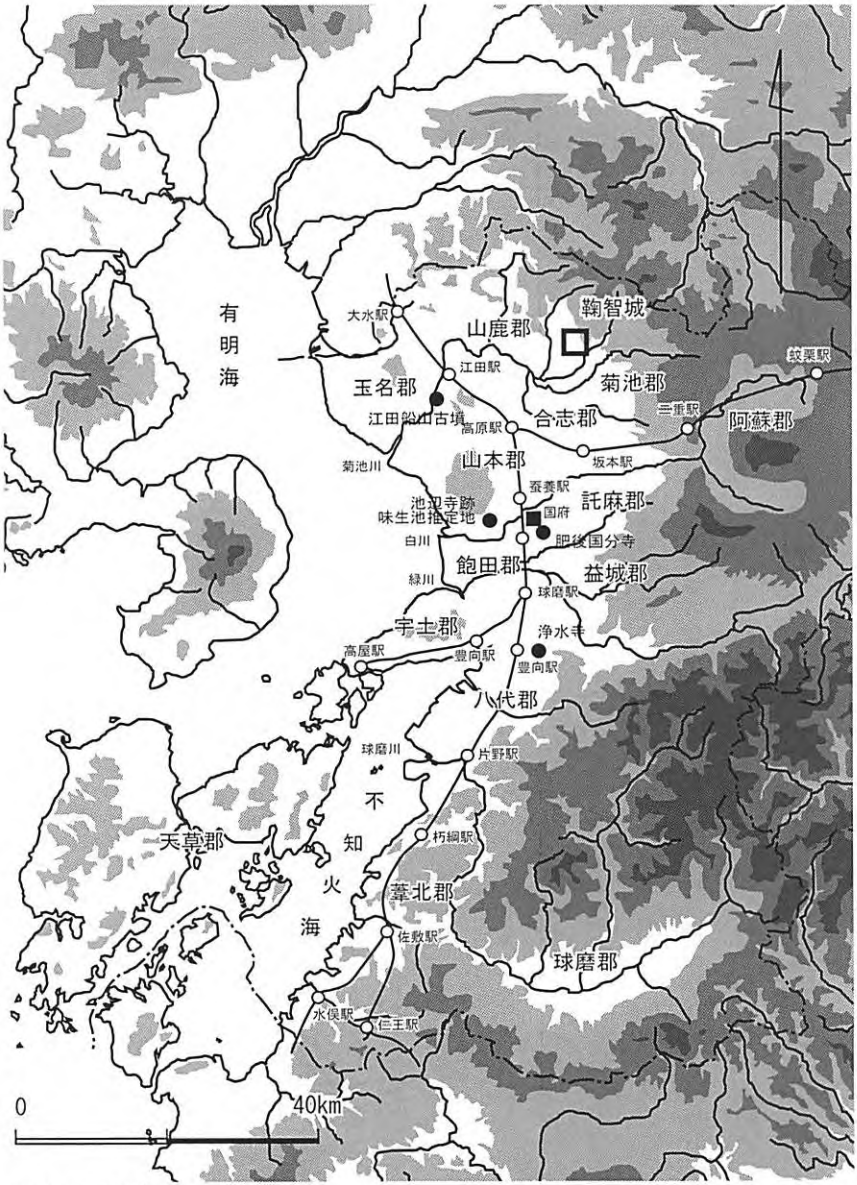

有明海
大水駅
山鹿郡
鞠智城
玉名郡
江田駅
菊池郡
玖珠駅
江田船山古墳
合志郡
三重駅
阿蘇郡
高原駅
山本郡
坂本駅
菊池川
蚕養駅
託麻郡
池辺寺跡
味生池推定地
国府
白川
肥後国分寺
飽田郡
益城郡
緑川
球磨駅
宇土郡
浄水寺
高屋駅
豊向駅
豊向駅
八代郡
球磨川
片野駅
不知火海
天草郡
朽網駅
葦北郡
佐敷駅
球磨郡
水俣駅
三王駅
0
40km

図３　古代肥後の駅路

役割を担う存在にもなっていた。そのことが八～九世紀を通じて鞠智城が存在し、軍事施設としての役割を果たし続けた理由であろうと思われる。

《葦北出土の駅制関連木簡9》

平成十九（二〇〇七）年十二月、熊本県葦北郡芦北町の花岡木崎遺跡から古代の木簡二点が出土した。熊本県教育庁文化課の調査によるもので、南九州西回り自動車道芦北インターチェンジ建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査中、井戸の底から出土し、その年代は共伴する土器から八世紀末～九世紀初頭と推定されるという。『木簡研究』三一号に載せる宮崎敬士の報告書によれば、その釈文は左の通りである。

（一号木簡）「×□於佐色□□□□」

（二号木簡）「×発向路次駅□等×」

文中の「佐色」は肥後国の駅名である。延長五（九二七）年奏進の『延喜式』兵部式に肥後国「佐敷（佐色）」駅があり、駅馬五疋・伝馬五疋を置くと定めている。所在地は現在の芦北町佐敷と推定されており、木簡の出土地点に近く、この遺跡は佐敷駅家と関連する遺跡である可能性が高い。西海道（西海道西路）はこの駅の南で、水俣を経由して薩摩国府に至る道と、大隅・日向方面に向かう支路の二手に分かれると推定されており、ここが九州自動車道と南九州西回り自動車道との分岐点に当たっていることと符合して興味深い。「路次駅」の文言からすると、目的地に至る路次の各駅にあて、官人への供給を要請するために官人に携行させた文書木簡であろうかと思われる。

二　七世紀の日本と鞠智城の設置

古代山城としての鞠智城の設置は、七世紀の東アジア・日本（倭国）の情勢と深く関係している。ここではその歴史的な動きについて見てみることとしよう。

七世紀の東アジアは、大きな動乱の時代を迎えていた。中国では六世紀末の隋によって南北両朝が

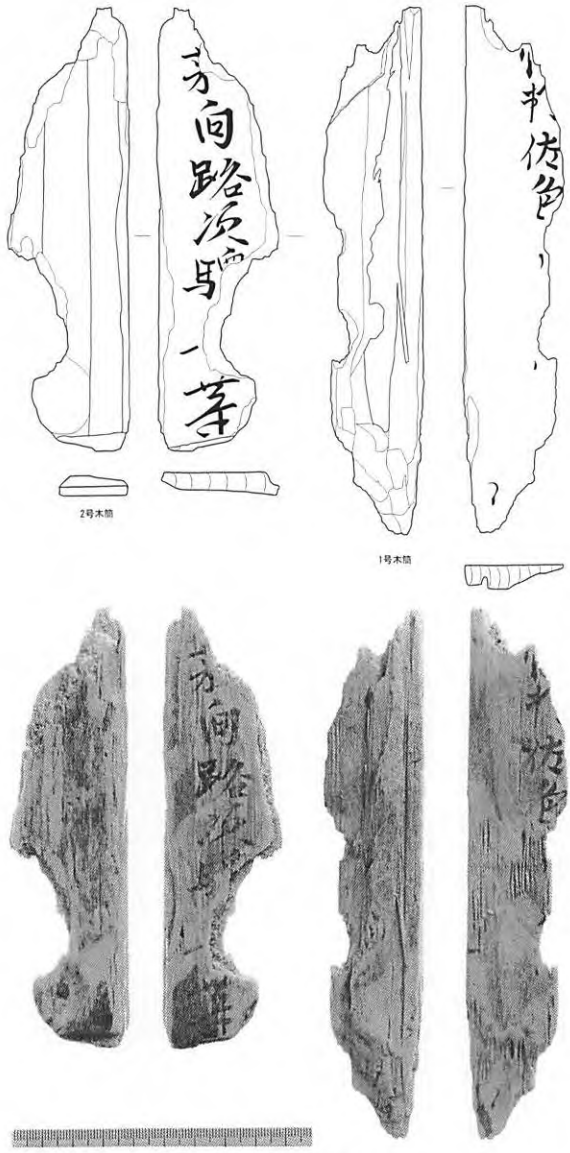


図４　熊本県花岡木崎遺跡出土木簡

再統一され、七世紀には隋のあとを受けた唐の帝国がめざましい発展を遂げて、周辺諸国に大きな威圧を与えた。それに対して、朝鮮半島では高句麗・百済・新羅の三国がそれぞれに権力の強化をはかり、相互に激しく対立した。

高句麗・百済による侵略に苦しんだ新羅は唐と連携し、斉明六（六六〇）年、将軍蘇定方の率いる水陸十万の唐軍は、新羅軍と連合して百済を攻撃した。百済の王都泗沘城は陥落し、義慈王は逃れて旧都熊津城に拠ったがここも陥落し、国王・太子らは捕らえられて唐に送られ、百済は滅亡した。

しかし百済の故地では、その後も鬼室福信らの遺臣が任存山城などに拠って唐軍に抵抗した。福信は倭国に軍事援助を求めるとともに、倭にあった王子扶余豊（豊璋）を迎えて国王とすることを乞うた。朝廷は遺臣の反乱を援助することに決し、斉明天皇・皇太子中大兄皇子らは九州に赴き、天智元（六六二）年には阿曇比羅夫・阿部比羅夫らを将とする大軍を朝鮮に送り、軍需品を援助した。しかし天智二（六六三）年八月、倭の水軍は劉仁軌らの率いる唐の水軍と白村江に決戦し、兵船四〇〇艘を焼かれる決定的な敗北を喫した。倭軍は百済の王族・貴族らを伴って帰還し、朝鮮の動乱への軍事的な介入は完全に失敗に帰した。

白村江の敗戦後、天智天皇の朝廷は、唐・新羅の侵攻に備え、西辺の防備を強化するための施策を次々に実施した。天智三（六六四）年以降、朝廷は最前線にあたる対馬・壱岐に防人と烽とを置いて敵襲に備え、大宰府の前面には防御施設としての水城を築いた。大宰府に近接する大野・基肄二城のほか、対馬の金田城、長門、讃岐の屋島、大和・河内国境の高安城など、大和に達する行路の要衝にも城を築いた。これら西日本の城は、大野城・基肄城などの遺跡によって知られるように、山頂の周囲に土

塁をめぐらし、谷間を石垣で埋め、水門を設け、内部には倉庫などの礎石建物を配置した朝鮮式の山城であった。九州北部を中心に分布する、山腹や丘陵に数キロメートルにわたって切石の列をめぐらすいわゆる神籠石も、やはりこの時期に造られた防衛施設であろう。

これらの防衛施設の築造を指導したのは、白村江の戦いののち倭国に亡命してきた、兵法に詳しい百済の王族・貴族であった。天智四（六六五）年、大野城・基肄城を造るために筑紫に派遣されたのは憶礼福留・四比福夫という二人の百済人であったが、このうち憶礼福留については、『日本書紀』天智十年正月条に、「兵法に閑へ

図5　水城（中央）と大野城（背後）
九州歴史資料館編 2009『水城跡』 より転載

図 6　福岡県御所ケ谷神籠石
行橋市教育委員会 2006『史跡　御所ヶ谷神籠石 I』 より転載

り」と記されている。百済の王族・貴族は、これらのほかにも、集団的な用兵や戦闘の指揮など、各方面にその能力を発揮し、天智朝の軍事的諸施策を指導したと思われる。

大野城や基肄城の場合とは異なり、鞠智城については『日本書紀』に築城に関する記述が見られない。しかし発掘調査によれば、鞠智城はまさしく大野城・基肄城などと共通する朝鮮式山城としての特徴を備えている。平成二十（二〇〇八）年度の発掘調査で、貯水池跡から7世紀後半と推定される青銅製の百済系菩薩立像が出土したことは、鞠智城の築造にも百済人の技術者が関わっていたことを示唆するものではあるまいか。

三　西海道の行政・軍事と鞠智城

鞠智城の築造は、七世紀後半の東アジアの緊迫した情勢の中で行われたと考えられるが、その後東アジアの情勢は、唐・新羅・日本の関係としてしだいに安定の方向へと向かった。国内では六七二年の壬申の大乱後、乱に勝利した天武天皇によって中央集権国家の建設が強力に推進され、大宝元（七〇一）年には国家制度の基本を定めた大宝律令が制定された。

律令制のもとで、九州＝西海道の行政は大宰府によって統括された。西海道では他の諸道とは異なり、大宰府による強力な権力集中のシステムが構築されたのである。大宰府は外交・軍事にも携わり、財政の面でも、西海道諸国の調庸はすべて大宰府に集積され、その一部が都に貢上されることになっていた。

西海道には、大宰府を中心とする交通・通信のネットワークが形成されていた。西海道の駅路は大

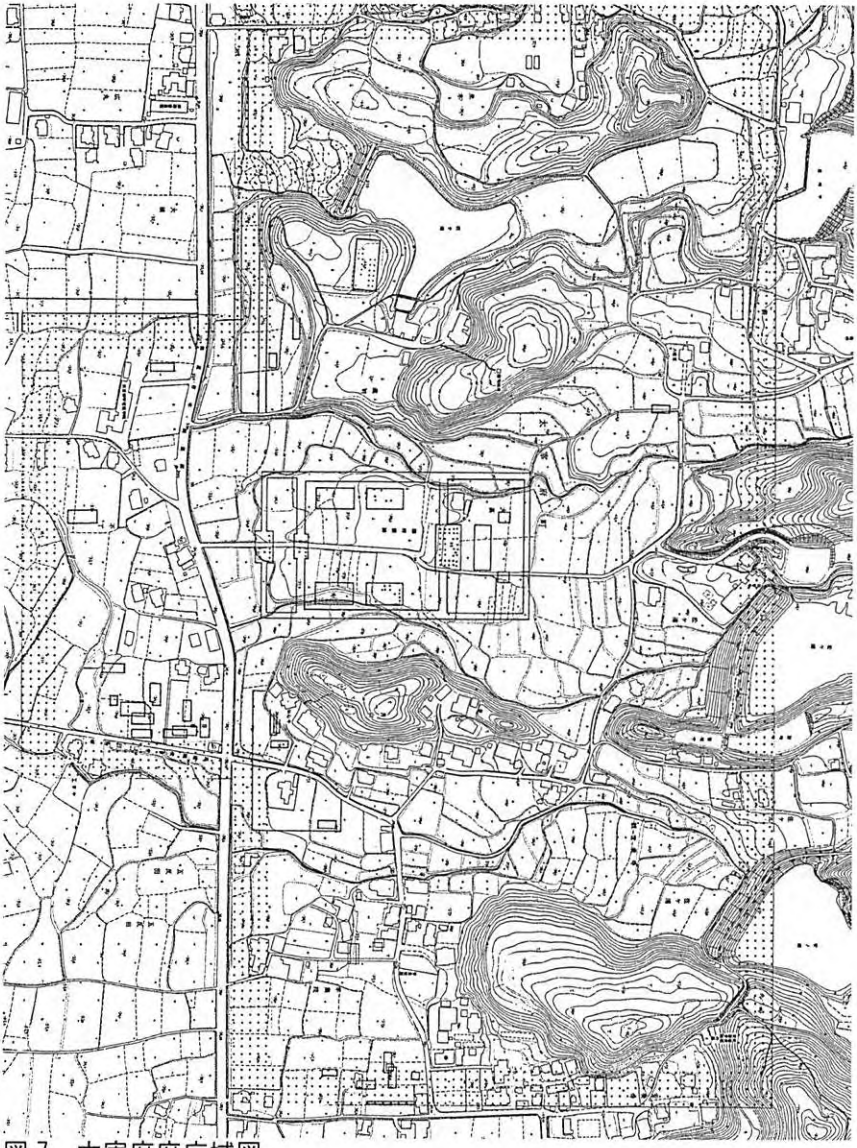


図 7　大宰府府庁域図

石松好雄 1983「大宰府庁域考」『九州歴史資料館開館十周年記念
大宰府古文化論叢　上巻』吉川弘文館　より転載

宰府を中心に諸方面に向かう形で形成され、駅路に沿って駅家のほか、郡家や諸官衙施設が計画的に配置されていたことが推測される。

情報伝達の手段としては、烽が各所に設置された。烽は敵の襲来や外国使臣の到着などの情報を速達するための通信システムで、天智天皇三（六六四）年、防人とともに対馬・壱岐・筑紫に設置された。律令制では四十里（約十八キロ）ごとに設置され、昼は煙、夜は火を上げて合図を送った。『続日本紀』によれば、天平十二（七四〇）年の大宰小弐藤原広嗣の乱にあたり、広嗣は烽火を挙げて国内の兵を集めたという。大宰府管内の烽は、諸国の烽が延暦十八（七九九）年に停廃された後もなお存続した。

烽は見晴らしのきく山頂などに設置される。また「火の山」「日の隈山」などの遺称が存在することから、その所在地を推定することが可能である。天平五（七三三）年編纂の『出雲国風土記』には、各郡に設置された烽の名称とその位置とが記載されており、豊後・肥前二国の『風土記』にも、烽の総数と郡ごとの数とが記載されている。肥前国（佐賀県・長崎県）では、現地調査や地名の研究によって、烽の所在地や国府・基肄城に至る情報伝達のルートの推測がなされている。鞠智城においても付近に「火の岡山」があり、やはり情報伝達のシステムの中に組入れられていたことが推測される。

西海道防衛のための軍事力としては、まず防人が挙げられる。防人は白村江の戦いの直後、天智天皇三（六六四）年に対馬・壱岐・筑紫に設置された。律令制のもとでの防人は諸国軍団兵士の中から選抜され、三年交替で筑紫に派遣された。その数は二〇〇〇人から三〇〇〇人に及んだと推測される。

八世紀を通じ、防人のほとんどは東国＝中部・関東地方出身の兵士であった。東国の兵士はその勇敢さを買われ、鎮兵として東北の戦乱の鎮圧にも動員されたから、その負担は大きく、八世紀の後半

には防人制の維持はしだいに困難になった。天平宝字元（七五七）年、東国防人は停止され、西海道七国の兵士一〇〇〇人が替わって辺防の任に当たることとなった。その後も東国防人は大宰府の数度の要請にもかかわらず復活されず、大宰官内に残留している防人を徴発するなどの対応が行われたのみであった。延暦十四（七九五）年、壱岐・対馬を除いて防人は廃止され、同二十三（八〇四）年には壱岐の防人も廃止されている。

防人がどこに配置されたかについては、詳しくは分からない。サキモリは「前守」「崎守」の意味であり、最前線の海岸を守衛するのが本来の任務であって、それは天智三（六六四）年に対馬・壱岐に最初に設置されたことからも窺われる。防人が最後まで配置されていたのも対馬であった。佐賀県唐津市の中原遺跡から近年出土した木簡に「甲斐国〔津〕戍〔人〕」とあるのは、甲斐国出身の防人が肥前国の港湾の守衛に当たっていたことを示すものと考えられ、防人配置の具体例を示すものとして貴重である。

鞠智城に防人が配備されていたかどうか。七世紀後半の築城当時には配備されていた可能性もあるが、本来の防人の任務から見て、また防人制の維持がしだいに困難になっていった情勢から考えて、八世紀以降の鞠智城守備の武力の主体は防人ではなく、西海道出身の軍団兵士と見るのが妥当なように思われる。

軍団の兵士は律令制国家の武力の主体であった。二十歳以上の男子を一戸から三人に一人の割合で兵士に徴発し、近くの軍団に勤務させるもので、一軍団には普通一〇〇〇人の兵士が所属していた。

西海道については、『類聚三代格』所載の弘仁四（八一三）年八月九日の太政官符によって、当時

筑前・筑後・豊前・豊後・肥前・肥後計六国に十八の軍団があり、一万七一〇〇人の兵士が所属していたことが分かる。軍団兵士の定数は奈良時代の養老三（七一九）年に削減されているから、おそらく軍団数十八、兵士一万八〇〇〇人というのが西海道の本来の姿であろう。天平十二（七四〇）年の藤原広嗣の乱にあたり、朝廷は東海・東山・山陰・山陽・南海五道の兵一万七〇〇〇人を徴発しているが、これは広嗣が動員するであろう大宰管内の兵士の数を考慮してのものであったかと思われる。

西海道の具体的な軍団名としては、遠賀（筑前）・御笠（同）・基肄（肥前）・益城（肥後）各団の名が諸史料によって知られる。福岡県太宰府市からは「遠賀団印」「御笠団印」の印面をもつ印が出土した。また肥後国益城団の名は、昭和五十九（一九八四）年に平城宮跡から出土した「肥後国第三益城軍団養老七年兵士歴名帳」と書かれた木簡（題籤軸）によって知られるものである。

鞠智城と軍団との関係についてはどのように考えられるのか。筑前国の御笠団については大野城、肥前国の基肄団については基肄城との関係がそれぞれ考えられる。これら山城付近の軍団に所属する兵士は、日ごろ軍団で訓練を積むとともに、番を作って城の警衛に当たったのであろう。それから類推すれば、鞠智城の場合にも、付近に軍団が存在した可能性がある。前掲の弘仁十一年太政官符によれば肥後国の軍団数は四であり、平城宮跡出土木簡には「肥後国第三益城軍団」とあるのであるから、肥後国北部の玉名・山鹿・菊池三郡のどこかに、少なくとも一つの軍団はあったのではないかと思われる。

これらの軍団は、兵士を率いて交替で鞠智城に勤務し、その守衛に当たったほか、国司のもとでさまざまな任務に従ったものと考えられる。『日本紀略』弘仁四（八一三）年三月辛未条で、肥前国基

肄団の校尉が五島に来着した新羅人を捕らえる仕事に当たっているのは、その一つの例であろう。

《平城宮跡出土の肥後国軍団関係の木簡》

昭和五十九（一九八四）年、平城宮跡から「肥後国第三益城軍団養老七年兵士歴名帳」と書かれた木簡が出土した。これはいわゆる題籤軸で、巻物の巻軸の端にその文書の内容を記したものである。養老七（七二三）年に肥後国益城軍団に所属した全兵士の名簿で、肥後国から中央の兵部省に報告され、保管されていたものが、年が経って廃棄され、紙は反故として再利用され、巻軸のみが廃棄されたものであろう。

軍防令には、兵士以上については歴名簿二通を作り、どこに勤務しているか、貧富の程度は上中下いずれかを明記して、一通はその国に留め、一通は毎年朝集使に付して兵部省に送るようにと定めていた。征討などの場合には、国司はこの名簿によって兵士を動員する。天平六（七三四）年八月に作成された出雲国計会帳によれば、同五年十月二十一日、「兵士簿目録一巻・兵士歴名簿四巻」が朝集使に付して都に進上されている。当時の政府が兵士一人ひとりの名まで把握していたことを示すものである。

この木簡では「肥後第三益城軍団」と、軍団に番号を付して呼んでいる。個々の軍団に番号を記した例は他にはない。岩手県胆沢城跡出土の第四三・四四・四五号漆紙文書は陸奥国柴田郡関係の兵士歴名簿の断簡と推定されるが（平川南「胆沢城跡第四五次調査出土漆紙文書」）、ここでは「高椅郷廿五戸主刑部人長戸口」というように、諸郷の各戸にそれぞれ番号を付している。軍団に番号を付し、郷

内各戸に「戸番」を付すという、これらがいずれも軍団・兵士関係の史料であることは注目すべきで、迅速・的確に兵士を徴発する便宜として、広く行われていたことかと推測される。

おわりに

西海道は日本と東アジア世界との接点として、八世紀から九世紀にかけてもいくどか緊張した事態に見舞われた。日本と朝鮮の新羅との間にはしばしば衝突がおこり、天平宝字三（七五九）年から同六年にかけては、安史の乱による唐朝の混乱に乗じて新羅に軍を送る計画が藤原仲麻呂（恵美押勝）によってなされ、兵士や水手・船舶の大規模な動員が行われた。九世紀に入ると国家の統制力が衰え、朝鮮・中国との間の人や物資の交流が盛んになるが、飢饉や内乱による新羅国内の動揺から、九州沿岸には海賊がしばしば襲来し、沿岸の警備が大きな課題となった。寛平五（八九三）年には新羅の海賊が肥後国飽田郡を襲い、民家を焼く事件を起こしている。

しかし東アジア全体の視点から見ると、唐を中心とする東アジアの政治的秩序は九世紀に入って崩壊し、諸国家はそれぞれ内部で動揺を抱え、国家間の激しい抗争は起こらなくなった。それに対応して日本でも、八世紀末には軍団兵士制が辺要を除いて廃止され、防人制も九世紀に入って衰退した。鞠智城は九世紀に入っても古代山城としての機能を保持したが、土塁や石垣で防備を固めた朝鮮式山城の存在意義は、しだいに失われていったものと思われる。

鞠智城に関する九世紀の史料の多くは、武器庫の鼓や戸がひとりでに鳴ったり、火災が起きたり、屋根に葺いた草を烏が喰いちぎったりというような、怪異に関することである。そのことは当時の鞠

智城やその倉庫群が、肥後国にとって一つの象徴的存在となっていたことを示している。

八世紀末以降、東北地方や関東地方ではいわゆる正倉神火事件が頻発し、政府はそれへの対応の一環として、旧来の倉庫群とは別の地に新たに倉庫群を建設する政策をとった。東北地方には三十三間堂官衙遺跡（宮城県亘理郡）・東山官衙遺跡（宮城県加美郡）など、丘陵上に郡庁院・倉庫群を配する平安時代前半の官衙遺跡がしばしば見られる。この時期、肥後国においては、軍事施設としての鞠智城の庁舎や倉庫群が、菊池郡家の政庁や正倉としての機能をあわせ持つようになっていたのではあるまいか。文献に鞠智城のことを「菊池郡城院」、その倉庫を「菊池郡倉」と称していることは、九世紀の鞠智城がこの地域の行政の中心としての役割をも果たす存在になっていたことを示しているように思われる。

〔参考文献〕

『北九州瀬戸内の古代山城』（『日本城郭史研究叢書』一〇）　小田富士雄編　一九八三年　名著出版
『西日本古代山城の研究』（同一三）　小田富士雄編　一九八五年　名著出版
『烽（とぶひ）の道』　シンポジウム「古代国家とのろし」　宇都宮市実行委員会他編　一九九七年　青木書店
『古代日本の交通路』Ⅳ　藤原謙二郎編　一九七九年　大明堂
「西日本の古代山城」　磯村幸男　『古代国家の形成』（『史跡で読む日本の歴史』3）所収　森公章編　二〇一〇年　吉川弘文館

『熊本県史　総説編』　原田敏明他監修　一九六五年　熊本県
『熊本県の歴史』（県史シリーズ四三）　山川出版社
『熊本県の歴史散歩』（全国歴史散歩シリーズ四三）　山川出版社
『九州古代中世史論集』　志方正和　一九六七年　志方正和遺稿集刊行会

シンポジウム　第Ⅱ部　発　表

「鞠智城の調査と整備」
大田　幸博（熊本県立装飾古墳館長）

「古代山城としての鞠智城」
岡田　茂弘（国立歴史民俗博物館名誉館長）

「古代史からみた鞠智城」
佐藤　信（東京大学大学院教授）

「朝鮮古代史からみた鞠智城」
濱田　耕策（九州大学大学院教授）

岡田 茂弘（おかだ しげひろ）

千葉大学文理学部地学科卒業。同志社大学大学院文学研究科修士課程修了。奈良国立文化財研究所技官、宮城県多賀城研究所長、国立歴史民俗博物館教授・考古研究部長を経て、東北歴史博物館長となる。一九九九年より、国立歴史民俗博物館名誉教授。二〇〇八年まで、学習院大学史学部桜史会会長。専門は、日本歴史考古学。主な著書に、『多賀城』中央公論美術出版一九七七、『古代遺跡の旅　古代史博物館』（共著）講談社一九八一、『古代の都を復元する』（編書）学習研究社二〇〇二、『古代を考える　多賀城と古代東北』（共著）吉川弘文館二〇〇六など、著書・論文多数。

佐藤 信（さとう まこと）

東京大学文学部国史学科卒業。東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。奈良国立文化財研究所（平城宮跡発掘調査部）研究員、文化庁文化財調査官、聖心女子大学文学部助教授、東京大学文学部助教授を経て、一九九六年より東京大学大学院人文社会系研究科教授。専門は、日本古代史。文学博士。主な著書に、『日本古代の宮都と木簡』吉川弘文館一九九七、『古代の遺跡と文字資料』名著刊行会一九九九、『出土史料の古代史』東京大学出版会二〇〇七、『古代の地方官衙と社会』山川出版社二〇〇七など、著書・論文多数。

濱田 耕策（はまだ こうさく）

北海道大学文学部史学科卒業。学習院大学大学院人文科学研究科博士課程修了。学習院大学助手を経て、現在、九州大学大学院人文科学研究院教授。専門は、朝鮮古代史。博士（史学）。主な著書に、『渤海国興亡史』吉川弘文館二〇〇〇、『新羅国史の研究－東アジア史の視点から－』吉川弘文館二〇〇二など、著書・論文多数。

大田 幸博（おおた ゆきひろ）

学習院大学法学部卒業（史学部所属）。県立大津産業高校教諭、鞠智城発掘調査主任（一九八八年～九四年）、熊本県教育庁文化課課長補佐、歴史公園鞠智城・温故創生館長を経て、現在、熊本県立装飾古墳館長。長年、鞠智城跡の調査と整備に携わる。鞠智城跡関係の論文多数。

鞠智城跡の調査と整備

大田幸博

一　概要

熊本県の鞠智城は、大和朝廷によって西日本地方に築造された朝鮮式山城の一つである。しかし、『日本書紀』に「天智四（六六五）年の築城」と明記された北九州の大野城（福岡県）や基肄城（佐賀県）と異なり、築城時期に関する記載が無い。鞠智城の場合は、『続日本紀』の文武二（六九八）年五月の条を待たねばならない。「大宰府をして、大野・基肄・鞠智の三城を修理した」との記事が初見である。その後、鞠智城は一六〇年間の空白期間を経て、『文徳天皇実録』の天安二年（八五八）二月と六月の条に、城内で発生した怪奇現象を伝える三回の記事があり、最後は、『日本三代実録』の元慶三年（八七九）三月の条をもって国の歴史書から姿を消している。従って、文献上で明らかな城の存続期間は一八一

図１　発表中の大田幸博氏

年間である。一方で、大野城と基肄城と同時期に修理されているので、築城時期も、この二城と同じ時期とする見方が有力である。実際、これまでの発掘調査の結果と照合しても妥当な線である。

城の性格は、創建期の7世紀後半と、終末期の九世紀後半とでは、明らかに違いがあろう。実際、前者は、東アジアの国際情勢が極度に緊張した状態での築造であり、国家防衛網の一翼を担うものであった。後者は、それから長い年月が経った後であるが、廃城になっていないので、おのずと性格の変化が考えられる。

鞠智城跡は、県北の山鹿市菊鹿町と菊池市木野堀切に所在しており、楕円形状の丘陵地に築造されている。城域面積は、真の城域が五五haで、外縁地区を含めると一二〇haの広さとなる。真の城域を東京ドームの大きさに換算すると一二基分の広さである。縁部は、土塁線と崖線に囲繞されており、全周すると三・五kmになる。菊池川

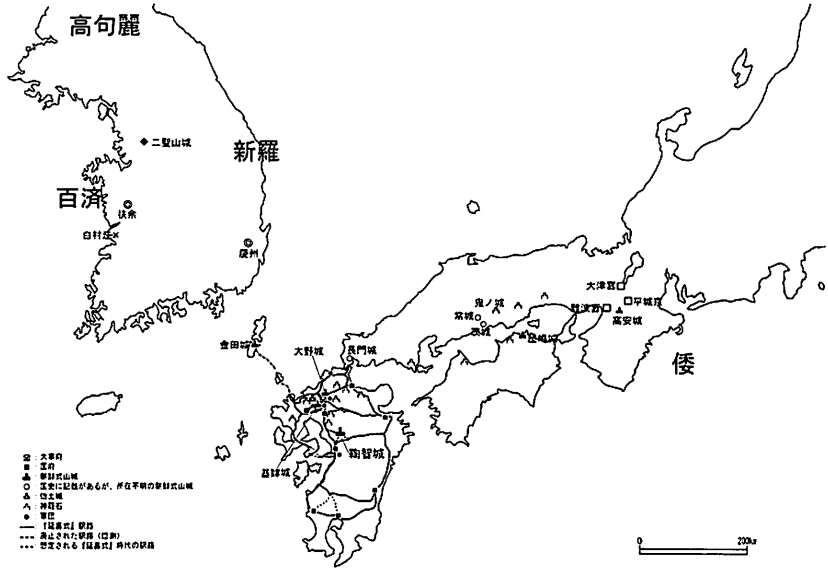


図2　7世紀後半の東アジアと鞠智城

（一級河川）流域の北方丘陵地に位置しており、中心標高一四五m、肥沃な菊池平野とは、一〇〇mの比高差となる。数多くの遺構は、山鹿市菊鹿町の米原台地を中心に展開しており、一部は、菊池市木野の掘切まで広がっている。行政の面積割合は、山鹿市が九割を占め、菊池市は一割に留まる。但し、正門と見なされる堀切門跡の門礎石は、菊池市側に残っているので、鞠智城は、菊池市側の南を向いている事が分かる。これは、当時、大宰府からの官道が菊池市の隈府を通ってからである。

発掘調査は、熊本県が一九六七（昭和四二）年から実施しており、今年度で31次を数える。一方で、一九九四年からは、調査成果を元に整備事業が進み、二〇〇四年二月に国指定史跡になった。

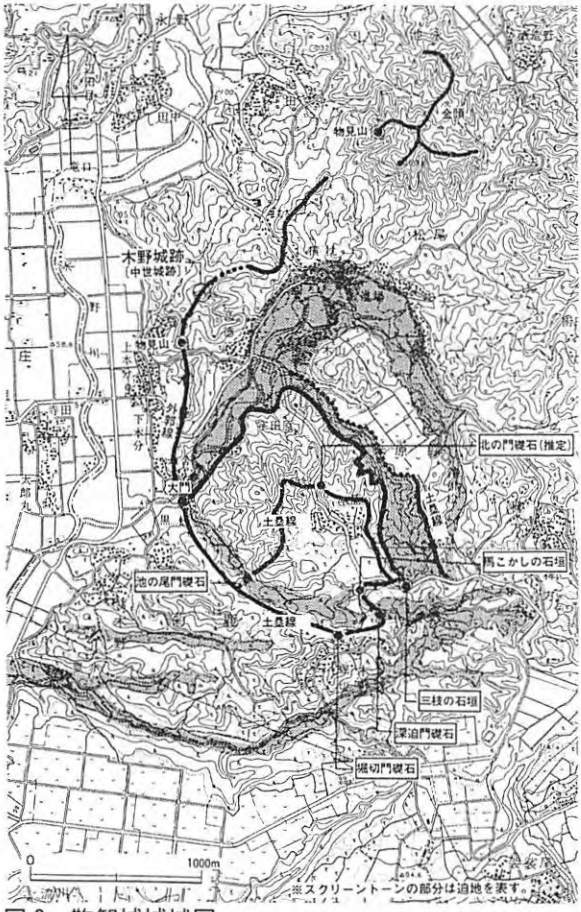


図3　鞠智城城域図

一九九三年四月に開館したガイダンス施設「温故創生館」を軸に、八角形鼓楼・米倉・兵舎・板倉の古代建物が復元され、この八年間で、優に１００万人を越える入館者があった。今日では、古代史を学べる野外学習の場として定着している。県外及び韓国からの見学者も多い。

二　発掘調査の経緯と成果

発掘調査は、一九六七年に始まった。当時、米原台地は、一面の桑畑とさつまいも畑であったが、この年、地元の手によって大がかりな水田化工事が行われた。地下ボーリングによって水源が確保され、一帯が開田された。この際、数多くの大型礎石が発見され、鞠智城の場所は、米原台地に間違い無いとの確証が得られた。同時期、礎石があった長者山の西側地区が地下げされて、牛小屋が建てられる出来事があった。そこで、急遽、熊本県教育委員会を母体として、九州の考古学者を中心とした発掘調査団が組織されて、緊急調査が行われた。一～四次調査のことで、鞠智城調査の草分け時期である。これを契機に、発掘調査は六次調査以降、県教委を調査主体として今日まで継続して行われてきた。なお、五次調査に限っては、旧菊鹿町が発掘調査を実施している。城内を貫く町道の拡幅工事に伴う事前調査で、鞠智城で初めての、百済系軒丸文様瓦が出土した。

一二次調査（一九九〇年）は、佐賀県から吉野ヶ里遺跡が発見された年である。熊本県でも、これまでの文化庁国庫補助事業に加えて、県自主事業として調査費の大幅な上乗せを行った。吉野ヶ里遺跡を意識したものであったが、「鞠智城を最重要遺跡と見なす」県の姿勢が示された事を意味した。その結果、調査面積も大幅に拡大し、一三次調査では、構造の異なる二棟の八角形建物跡を検出するに

至った。国内の古代山城では、初めての発見であった。この時期、韓国の京畿道地方の二聖山城跡からも、類似の八角形建物跡が検出されたとの情報を得て、現地視察のために調査員が渡韓した。調査を行った漢陽大学の教授に面会して、学生の案内で城地を視察した。八角形建物跡の発見は、古代における日本と朝鮮半島との文化交流の証でもあり、鞠智城にとって画期的な年になった。

図4　鞠智城跡

一四次調査では、鞠智城の終末期（九世紀後半）にあたる礎石建物跡を確認した。国の歴史書に記載された平安時代の鞠智城を考古学の立場から実証した事になる。15次調査からは、県自主事業が終了して、再び、文化庁国庫補助事業のみの発掘調査になった。町道から東上の上原地区を調査して、この地区が建物遺構の空白地帯である事を明らかにした。練兵場的な区域ではないかと解釈している。一六次調査では、深迫門跡の谷部から版築土塁を検出した。細層の版築土を何十枚

にも積み上げた本格的な造りであった。

一七～一九次調査（一九九五～一九九七年）では、長者原地区から一七棟分の建物跡（五〇～六六号）を検出した。一方、一九次調査では、長者原地区の谷部から貯水池跡を発見した。総面積五三〇〇㎡に及び、谷部の緩傾斜地を利用したものであった。谷部の貯水池跡から文字の判読出来る木簡や木製の農具も出土した。木簡には、「秦人忍□斗」との墨書があり、鞠智城の近くに渡来人の居住が推定される遺物でもあった。さらに二〇次調査では、貯水池跡の一部が、貯木場にも使用された事が判明した。池跡から数多くの建築材が見つかった。池に備蓄されたもので加工材が多かった。「貯水池跡・貯木場跡・木簡」は、八角形建物跡と同じく、国内の古代山城として初の発見であった。続いて、二二次調査では、貯水池跡の湧水地点から、井戸枠に該当する大型の木組み遺構が発見され

図５　貯水池跡の貯木場跡

た。一方で、堀切門跡からは、門礎石の原位置が確定された。凝灰岩の谷部を加工した登城道の一部からであった。

二三～二五次調査（二〇〇一～二〇〇三年）では、貯水池跡の継続調査に加えて新たに土塁線の調査を行った。二三次調査では、崖線の上に築かれた南側土塁線が、版築土塁である事が分かった。個々の版築土は厚めで、深迫門のそれと違いがあった。長者山の西地区からは、四棟の掘立柱建物跡（六九～七二号）を検出した。牛小屋跡の削平地で、旧地形には、礎石が並んでいた所である。礎石建物跡の下層遺構として注目された。二五次調査では、西側土塁の一部も版築土塁であることが判明した。花崗岩のばい乱土を叩き締めて積み上げたものであった。

二六・二七次調査（二〇〇四～二〇〇五年）では、池ノ門跡から、谷間を仕切る石塁が検出された。全壊に近い状態であったが、基礎部に通水溝と導水溝が残っていた。二八次調査は、深迫門跡を再調査した。一六次調査で、版築土塁が検出された調査区である。二九次調査では、南側土塁線や東端平坦部からも版築土を検出した。さらに、貯水池跡の池尻部では、石積みを伴う堰堤を把握した。三〇次調査（二〇〇八年）では、池岸近くから、百済系菩薩立像が出土する画期的な発見があった。

三　鞠智城の整備

発掘調査では、二〇〇九年で三一次を数える。熊本県では、この鞠智城跡の保存と活用を図るために、一九九四年から四ヵ年計画で城跡地の用地所得を行った。城跡の総面積五五haの内、米原集落・墓地・営農地の上原地区を除いた四三・五haを対象とした。遺構の空白地帯と判明した上原地区

では、県農政部が畑地を施策開田して、地権者に便宜を計る方策を取った。これが、用地購入の決め手になった。

整備事業は、一九九六年から開始した、遺構全体を、一・五～二・〇ｍの客土で覆った後、整地面に四棟の復元建物を建設した。八角形建物跡については、鞠智城跡保存整備検討委員会で多くの議論を重ねたが、最終的に中国や朝鮮半島にルーツを持つ「鼓楼」と推論した。鼓楼については、六国史の『日本文徳天皇実録』に「兵庫の鼓」との記述がある。芯柱の長さ15.3ｍ、使用されたのは、地元産の樹齢一八〇年の檜材であった。宝珠を含んだ総高は一五・三ｍ、三層造りの瓦葺き屋根は、総重量七七ｔにもなる。最上階には、連絡用の太鼓を置いた。この八角形建物跡の復元に際しては、鞠智城跡調査保存整備検討委員会からの強い勧めがあって、遺構保存のために検出場所から、やや北側にずらしている。

二〇号礎石建物跡は、総柱の構造であった事と炭化米が出土した事から、米倉として復元された。高床式で、瓦葺きの校倉造り建物である。屋根瓦の重量は三二ｔ。側柱の長方形・掘立柱建物跡は、兵舎と推定された。板葺き屋根で、つり上げ式の窓が特徴である。内部を縦断する通路を境として、両側に兵士のベッドが並び、収容人員は五〇名程度と推定される。発掘調査では、同じ構造の建物跡が二棟並んで見つかった。鞠智城には、ある時期、少なくとも二棟の兵舎に、一〇〇名程の兵士が駐屯していた事が分かる。総柱の掘立柱建物跡は瓦の出土が無く、兵舎から近距離にあるために、茅葺き屋根の板倉として復元された。武具などを保管したと思われる。周囲に掘立柱建物跡の遺構明示がある。

長者山には、検出遺構を参考にして、木造の休憩所が建設された。宮野礎石建物跡の近くから見つかった寝殿風建物跡（一一号・一二号）をモデルとした施設である。礎石と掘立柱の併用建物で、正方形状の大型礎石建物の周りを、掘立柱の回廊が巡る構造である。なお、復元建物と区別するために、北側を除く三面の壁がガラス張りになっている。

鞠智城は、二〇〇四年二月二七日付けで、国指定史跡になった。前述のように、発掘調査は三一次を数え、整備事業も一六年目に入った。現在も、園路造り等を中心とする整備事業が進行中である。熊本県では、二〇〇六年から国営公園化を目指して、県民一丸となって運動を展開している。

古代山城としての鞠智城

岡田茂弘

一、「城」とは何か

「城」という概念は、民族により、また、同一民族でも時代により変化している。中国文字学の基本的な古典である『説文解字』（後漢の許慎撰）には「城は以って民を盛る也」とあり、『大漢和辞典』（諸橋轍次著）は、「①城壁。都市を囲繞するくるわ。内側のものを城、外側のものを郭とする。②都。国。国都。」とする。つまり中国では「城」は都市を囲む城壁、城壁で護られた都市の意味であり、城市の語もある。市街地が城壁で囲繞されるのは古代オリエントやギリシャの都市国家、中世イスラムでも同様であり、ローマ帝政時代には軍団駐屯地の城塞や国境の長城が構築された。中世ヨーロッパでは領主の邸宅を城壁で囲んだCastle（英）・Chateau（仏）等があり、イスラム都市の影響を受けて城郭都市も出現した。一方、朝鮮半島では三国時代

図1　発表中の岡田茂弘氏

から多数の山城が築造され、戦乱寺の住民の避難・篭城に利用された。

『広辞苑』（新村出編）は、「城」を「敵を防ぐために築いた軍事的構造物」とするが、その使用は軍事のみに限定できぬから、「城とは、政治目的で択ばれた土地に設けられた防禦的構造物」とするべきで、その遺跡を「城跡」と判断する基準は、「防御的構造物＝自由な出入を規制する施設の遺構の存在」にある。

二、日本古代の城

日本の古代―七～九世紀に日本列島の東と西に城が造られた。『日本書紀』によると、日本列島での恒常的な城柵の初見は大化三（六四七）年に越国（新潟県）に造られた渟足柵で、翌年には同じく越に磐舟柵、斎明天皇四（六五八）年七月初見の都岐沙羅柵造と日本海沿岸東北部の柵が続き、蝦夷に備えて柵戸を置いたことが知られている。一方、西日本の古代城は天智天皇二（六六三）年の白村江敗戦直後に唐・新羅軍の侵攻に備えて同三（六六四）年対馬嶋・壱岐嶋・筑紫国等に防人・烽を置き、筑紫国（福岡県）に水城を築いたのが嚆矢で、翌年長門国（山口県）、筑紫国の大野城・基肄（椽）城（福岡・佐賀県）を亡命百済官人の指導で築城し、同六（六六七）年倭国（奈良県）に高安城、讃岐国（香川県）山田郡に屋島城、対馬国に金田城を築城、さらに同九年（六七〇）に長門国に一城、筑紫国に二城が築かれた。また、史書に築城年代の記載を欠くが、この頃に大津京の在った近江国（滋賀県）に三尾城、備後国（広島県）に茨城・常城、大宰府管内に三野城・稲積城等が築かれていたことが知られる。肥後国（熊本県）の鞠智城もその一つである。天武天皇八（六七九）年

には難波京に羅城が設けられた。

八世紀に入ると、西日本では城の修理と停廃が行なわれ、新規築城は神護景雲二（七六八）年完成の筑前国（福岡県）の怡土城の他、大宝二（七〇二）年唱更（＝薩摩）国（鹿児島県）に国司の奏言で建てられた柵があるに過ぎない。これに対して東北日本では、和銅二（七〇九）年初見の出羽柵と天平五（七三三）年移転後の秋田城、養老五（七二一）年前後に陸奥国（宮城県）に相次

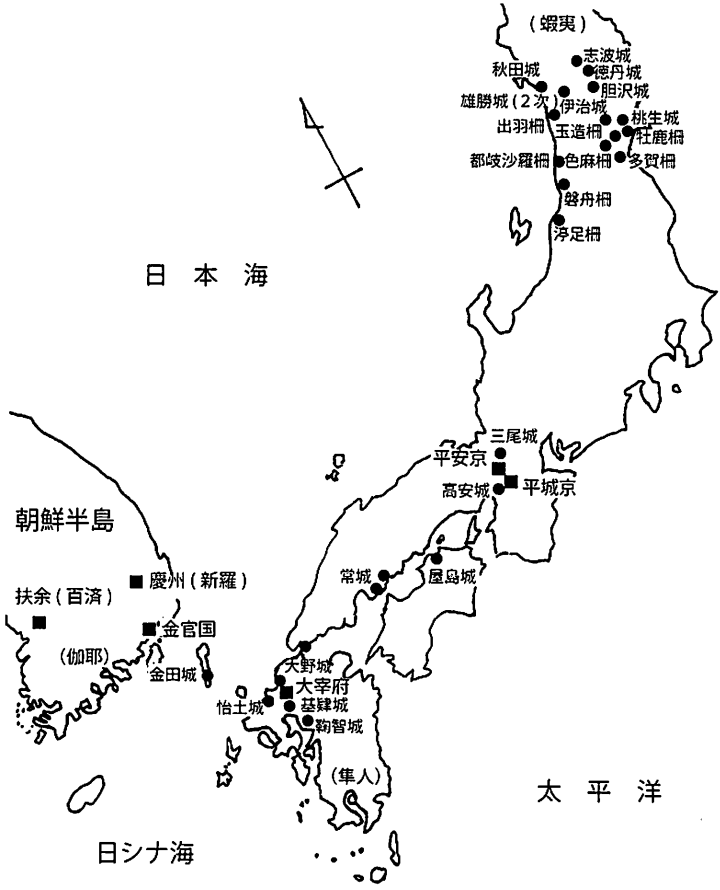


図2　史料に見える日本古代の城

いで建設された多賀柵と玉造柵等五柵、天平宝字三（七五九）年造営の陸奥国（宮城県）の桃生柵（城）、同年出羽国（秋田県）の雄勝柵（城）、神護景雲元（七六七）年の陸奥国の伊治城、宝亀一一（七八〇）年造営の陸奥国覚鰐城が相次いで造営され、九世紀初めには北上川中流域の陸奥国（岩手県）内に胆沢城・志波城、弘仁四（八一三）年頃に志波城を遷して徳丹城が造られた。（第一図）

東北日本の城柵は、七世紀～八世紀中葉には「柵」と書かれ、西日本のそれは「城」と書かれている。それ以降には東西ともに「城」と記されるが、造営の表現では西日本の「城」は例外なく「築城」であり、東北日本の多くは「造城（柵）」あるいは「作城（柵）」であって、「築城」と記載された例は皆無である。また、造営に関する官職名も天平神護元（七六五）年大宰大貳佐伯今毛人が「築怡土城専知官」に任命されたのに対して、延暦二十一（八〇二）年坂上田村麻呂は「造陸奥国胆沢城使」を命じられており、性格の相違を示している。また、東北日本の城柵には七世紀中葉から「柵造」・「柵判官」、八世紀以降の出羽柵・多賀柵・秋田城等で国司、胆沢城での鎮守府官人の常駐が史料から窺えるとともに城柵遺跡の中央部に政庁跡の遺構が存在するが、西日本の城では築城・修理時以外には官人常駐の記事は無く、倉庫の遺構群はあるが政庁跡は確認されておらず、古代城の東西の差違を物語っている（註一）。

三、神籠石系山城と朝鮮式山城

近畿地方から九州地方北半部にかけて分布する古代山城跡は、神籠石系山城と朝鮮式山城とに大別されている。朝鮮式山城とは、史書に城名・築城年代が明記される七世紀後半の山城で、百済の

亡命官人が築城の指導に当ったことが知られ、朝鮮半島の三国時代の山城に形態・構造が類似するものである。大宰府の北と南にある大野城・基肄城がその代表例である。神籠石系山城は、兵庫県以西の瀬戸内海沿岸から九州北部に分布する史書に記載の無い古代山城跡で、明治三十一（一八九八）年に筑後国（福岡県）久留米市の延喜式内大社高良山玉垂神社境内にある「神籠石（こうごいし）」と呼ばれる切石列の存在が学会に報告され、その性格を巡って霊域説と古代山城説が対立、明治末年から大正初年にかけて論争され、類例が各地で報告された。今日では古代山城跡と認識されているが、築造年代では六世紀説から一〇世紀説まで、築造者も大和国家説・地方豪族説・朝鮮半島からの渡来人説等、多様な論が提起された（註二）。

現在では、西日本の各地で史書には記載のない列石・石塁・水門の遺構を有する古代山城跡が発見されており、その発掘調査によって使用年代は七世紀後半から八世紀と認定されるので、朝鮮式山城と年代的に大差は無い。大野城跡・基肄城跡と南北の高い山上に代表的朝鮮式山城がある

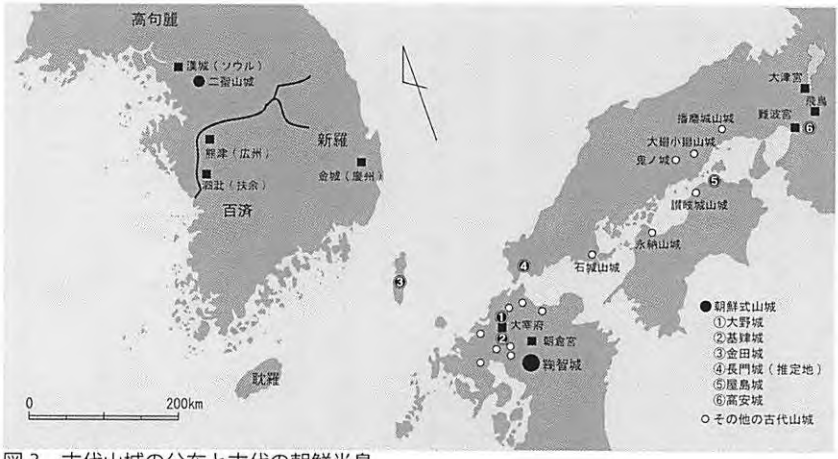


図３　古代山城の分布と古代の朝鮮半島

大宰府地区でも、東方の宮地岳（標高三三九メートル）で近年無名の古代山城跡が発見されている。（第三図）

これらの西日本の古代山城は立地や構造によって様々に分類されているが、大観すると国府・郡家等の古代官衙跡の近くに所在し、朝鮮半島の山城と同様に、その多くは戦乱時に地域の官人・住民が避難する「逃げ込み城」としての機能を想定して築城されたと考えられるものである。

四、古代山城としての鞠智城

鞠智城は、築造年代こそ史書に明記されていないが、文武二（六九八）年の大野城・基肄城とともに繕治されたことが『続日本紀』に見え、発掘調査によって出土遺物の年代等から大野城跡と同年代の築造が推定されているから、朝鮮式山城の一つとすることができる。近年、鞠智城跡の貯水池跡から百済舶載と推定される小仏像が出土したことも、造営への百済亡命官人の関与を暗示すると考えられる。城郭施設については、古代山城跡では山の尾根線上に土塁が築かれ、谷を通過するところでは石垣が築かれて、各所に石垣を伴う城門や城内の水を排出する水門が設備されており、大野城跡では北に開いた谷を閉塞する百間石垣のところに北城門跡があり、南部に大宰府口・坂本口・水城口の三ヶ所の城門跡があって、おのおの山麓の大宰府政庁や水城等に対応している。また、西北部の屯水石垣では水門跡も発見されている（第四図）。基肄城跡でも北門・東北門・東南門・南門の遺構が知られており、南門には石垣を伴う大規模な水門跡がある。鞠智城跡でも顕著な石垣はないものの地山削り出しや部分版築の土塁が巡り、東・西・南の三ヶ所で城門に伴う門礎が知られており、北に大き

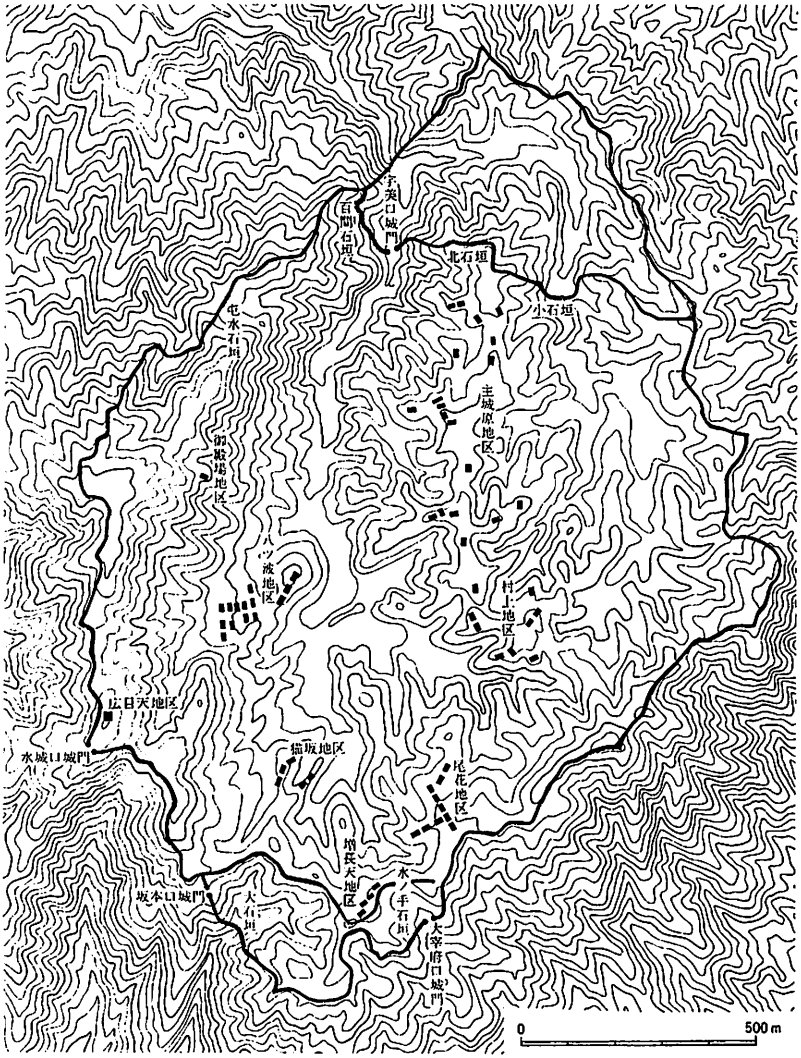


図4　大野城平面図

（石松好雄・桑原吾郎『古代日本を発掘する　4　大宰府と多賀城』1985年　岩波書店　12図）

く開いた谷にも門礎こそ未発見ながら北門跡の存在が推定される。鞠智城の西門にあたる池ノ尾門礎附近では石積を伴う水門跡の遺構が検出されており、大野城・基肄城と同様の構成をもつことが知られる。城内の施設としても、大野城跡では創建期の掘立柱構造の建物跡少数を除き大部分が総柱構造の礎石建物跡であり、倉庫としての使用が推定されている。基肄城跡でも多数の礎石建の倉庫跡群が点在する。鞠智城跡でも長者山を含む長者原地区や上原地区で掘立柱建物や礎石建物の倉庫跡が多数発見されており、炭化米の出土から『文徳実録』天安二（八五八）年五月の条に見える「菊地城の不動倉十一宇火(ひ)く」の記事を裏付けている。このように鞠智城は大野城などの古代山城と基本的に同じ構成を持っていたことがわかる。

一方では、鞠智城跡に他の古代山城跡と異なる点があることも無視できない。①その立地を見ると、神籠石系山城跡を含めて一般の古代山城跡の多くが、玄界灘・瀬戸内海・有明海に面する高い山に立地するに対して、鞠智城跡は海から離れた内陸に位置する。大野城跡・基肄城跡や福岡県朝倉市にある把木(はぎ)神籠石も内陸部に位置するが大宰府との関係、後者は斎明天皇の朝倉宮との関係で内陸に位置したと考えることができる。しかし、鞠智城跡の近くには有力な官衙施設跡が見られない。強いて挙げれば南方約三・五キロにあって肥後国菊池郡家跡と推定されている西寺遺跡があるが、古代国家が直接造営・管理した山城が郡家に付随すると見ることは困難である。②城の選地についても、古代山城の多くは標高三百メートル前後の山上から谷を取り込む下り尾根と急斜面の地形にあるが、鞠智城跡は最高所でも標高一六九メートル、谷口の最低所は一〇〇メートル前後と平均一四〇メートル前後の比較的平坦な台地上に立地している。③城内にある建物遺構については、鞠智城跡では発掘調

査された長者原地区を中心として長者山地区・上原地区を一部含む地域から七二棟の建物跡が発見されており、規模構造が判明している建物のうち、倉と考えられる総柱建の礎石建物跡二二棟（うち二棟は周囲に掘立柱列を有する）に対して掘立柱建の総柱建物跡は一〇棟を数える。大野城跡に較べて掘立柱の総柱建物の数が多い。さらに官庁舎と考えられる側柱だけの掘立柱建物跡が二六棟もある。「屋」に穎稲を貯蔵することは『正倉院文書』にある天平九（七三七）年の和泉監正税帳（いずみのげんしょうぜいちょう）（註三）等にも見えるところであるが、鞠智城跡では棟数が多く、かつ床面積の大きい建物もあって、すべてを穀物を貯蔵する屋や倉の管理棟とすることには無理がある。しかも、中には兵舎かと推定される桁行一〇間×梁行三間の長大な掘立柱建物跡も見られる。さらに、鞠智城跡内の長者原地区と上原地区の境付近では複数の南北棟と東西棟の掘立柱建物跡が「コ」字形に配置されていたと推定される建物群がある。「コ」字形配置の建物群は律令古代の国府・郡家の政庁に見られる建物配置である。そのほか、各二時期の造替ある二棟の八角形平面の掘立柱建物跡は、鞠智城跡以外の古代山城では類例を見ない。城内施設の多様性は鞠智城跡の特色であり、城内に比較的平坦な台地を取り込んでいることとともに、多様な官衙施設を設置するために鞠智城が築造された、乃至は官衙施設を建設するために改修されたことを暗示している。

五、鞠智城と古代官道

ここで想起されるのは東北日本に分布する古代城柵跡である。東北日本の古代城柵跡は、七世紀後半に造営されたことが判明している宮城県仙台市太白区の郡山（こおりやま）遺跡Ⅰ期官衙跡から、八世紀初頭の

郡山遺跡Ⅱ期官衙跡・名生館遺跡Ⅲ期遺構、八世紀前葉造営の多賀城跡・秋田城跡、八世紀中葉の桃生城跡、八世紀後葉の伊治城跡、九世紀初頭の胆沢城跡・志波城跡とこの時期に移転した雄勝城跡と推定される払田柵遺跡、九世紀前葉の徳丹城跡など数多くの城柵跡が発掘調査されて、立地や規模・遺構の状況が判明している。これ等東北日本の古代城柵跡は、平坦地あるいは比高数十メートルの台地上に立地し、高い丘陵地にあっても高さ百メートルを超えることは無い。その外郭施設は材木列塀・築地塀（一部に石塁を含む）・土塁と多様であるが、城内中央部に「コ」ないし「ロ」字形に建物群を配置した平面長方形の政庁域を有する点は共通している。曹司や

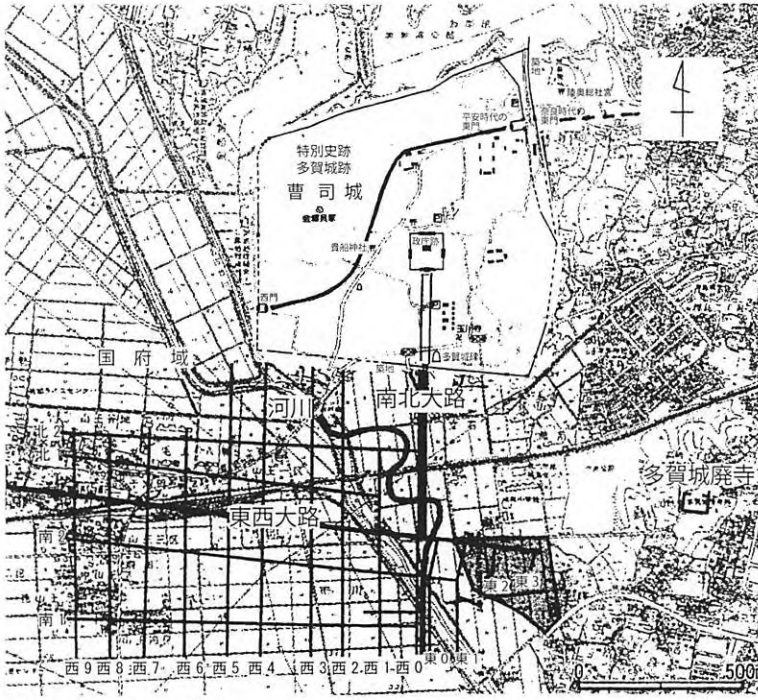


図5　多賀城跡の構成
（青木和夫・岡田茂弘『古代を考える　多賀城と古代日本』2006年
吉川弘文館　25図に加筆）

兵舎と推定される掘立柱建物跡が倉庫跡とともに発見されている（第五図）。郡山遺跡Ⅰ期官衙跡のように初期の城柵には政庁域の近くに倉庫群を配置する例が認められるが、全時代を通じて城内で倉庫群が卓越することは無い（註四）。東北日本の古代城柵は、律令国家の辺境統治に関わる国府自体や鎮守府などの国家的な統治機能をもった施設と考えられている。これらの東北日本の古代城柵に類似する施設を有する鞠智城跡は、西日本に分布する他の古代山城とは異なり、単に戦乱時を想定した避難場所ではなく、より積極的な機能を付与されていたと考えざるをえない。付与された機能とは何であろうか？

鞠智城跡は、古代肥後国府と推定される託麻（たくま）国府（熊本市）と離れている上、延喜式に記載された九州地方の諸駅を結ぶ官道―西海道（註五）からも逸れているため、従来その性格が明らかでなかった。歴史地理学者の木下良は、福岡・佐賀・山口・滋賀の諸県にある「車路（くろまじ）」・「車地（くろまじ）」地名のほとんどが駅路通過地にあることから、「車路」地名が古代官道の遺称であると提唱した。さらに熊本県菊池市大字吉富字車地が延喜式による西海道のルートとは異なり、肥後国府と鞠智城跡を結ぶ近世の菊池街道にあるため、鞠智城への軍用道路と解釈した（註六）。これを受けて鶴嶋俊彦も、「車路」関係地名を調査し、山鹿市大字鍋田字車路・同大字中字車地・菊池市大字出田字車地・南車地・同大字野間田字車町・同大字西寺字車町が存在することから、筑後・肥後の国境にあった大水駅から東行して鞠智城の南方を通過し、肥後国府の北側に位置する蚕養（こかい）駅に至る延喜式に見える西海道ルートより古い駅路の可能性を指摘した（註七）。さらに鶴嶋は肥後国北部の旧山鹿郡・菊池郡・合志郡・山本郡・飽田郡域を精査して、延喜式駅路と異なる駅路を「車路」と呼び、筑後国境から肥後国府に至るに至

る車路西海道本路と、鞠智城南方から分岐して豊後を抜けて日向国に至る車路豊肥支路を「車路」旧地名や発掘された道路遺構・道路と推定される帯状凹地の存在から推定した（註八）。これ等の道路復原が正鵠を射ているなら、鞠智城は南九州の西海道東西両ルートの結節点に位置することとなる。（第六図）

南九州が東の日向・大隅両国と西の薩摩国に分かれることは知られているが、大隅国は和銅六（七一三）年に日向国の四郡を割いて建国されたものであり、薩摩国は

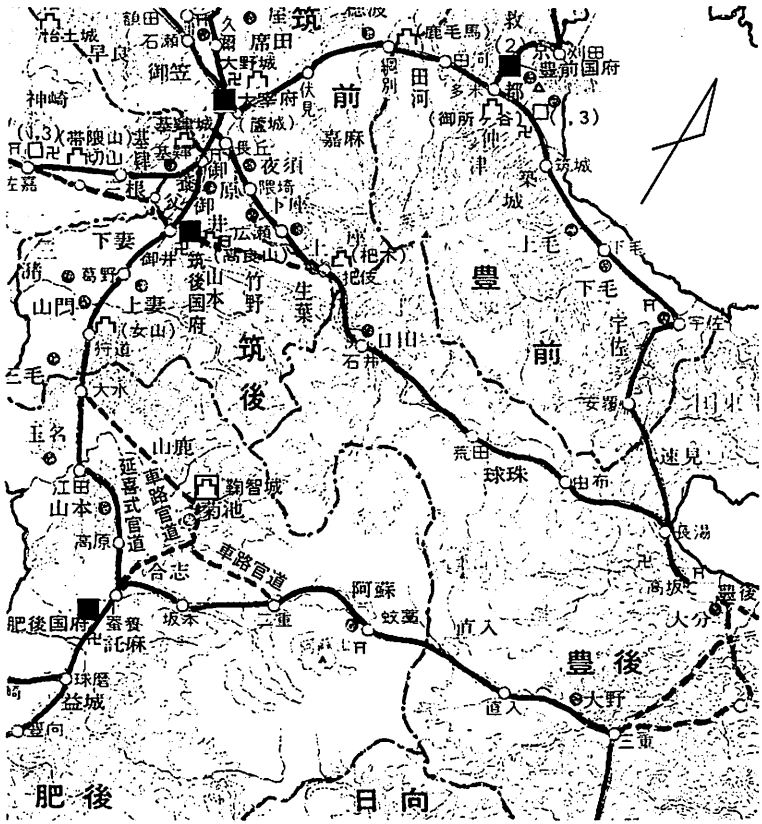


図 6　鞠智城と肥後国内の車路・延喜式官道
（『日本歴史地図（原始・古代編下）』1982 年　柏書房
木下良作成の 19 図に加筆修正）

大宝二（七〇二）年七月の薩摩・多祢征討以降の成立であって、鞠智城築造時はもとより鞠智城の名が史料に初見する文武天皇二（六九八）年にも両国は存在せず、隼人の居住地域であった。「大宰府をして大野・基肄・鞠智の三城を繕治はしむ」と『続日本紀』に記された文武天皇二（六九八）年五月の直前に文忌寸博士・刑部真木ら八人が覓国使として南西諸島に武器を携行して派遣された記事（註九）が見える。翌年七月に南西諸島の多祢・夜久・奄美・度感等の人々が朝貢する成果を挙げ、同一一月に使節は帰朝したが、派遣中に後の薩摩・大隅国に当る地域の隼人の首領等から脅迫されたことが史料に見える（註一〇）から、平和な使節ではなかった。史料に初見する「鞠智城の繕治」は南九州での不測の事態に備えたものと推測できる。すなわち、鞠智城は初期には南九州の統治に関わる大宰府の出先的な機能を有したと考えられる。

註一　青木和夫・岡田茂弘編『古代を考える　多賀城と古代東北』二〇〇六年　吉川弘文館。
註二　小田富士雄編『日本城郭史研究叢書一〇　北九州瀬戸内の古代山城』一九八三年　名著出版。
註三　「和泉監正税帳」竹内理三編『寧楽遺文』上巻　一九四二年　東京堂。
註四　註一に同じ。
註五　『延喜兵部省式』諸国駅傳馬条。
註六　木下良「「車路」考」『歴史地理研究と都市研究』一九七八年　大明堂。
註七　鶴嶋俊彦「古代肥後国の交通路についての考察」『地理学研究』九号　一九七九年　駒澤大学大学院地理学学生研究室。

註八　鶴嶋俊彦「肥後国北部の古代官道」『古代交通研究』七号　一九九七年　古代交通研究会。

註九　『続日本紀』巻第一　文武天皇二年夏四月壬寅条。

註一〇『続日本紀』巻第一　文武天皇四年六月庚辰条。

古代史からみた鞠智城

佐藤　信

はじめに

私は、「古代史からみた鞠智城跡」という大きなテーマで、主には東アジアの七世紀後半の動乱の時代、日本における古代の律令国家の形成の歩みの中で、鞠智城というものをどのように位置付けたらいいか、というような筋でお話しをしたいというふうに思っております。

一　白村江の敗戦と律令国家の形成

まず、白村江の敗戦からお話しを始めようと思います。これについては、もうすでに皆様も御承知でしょうし、今日笹山先生のお話しもありましたので、あまり繰り返す必要はないと思いますが、まあこれが古代の、いわば当時における世界戦争だったということですね。ちょうど唐の大帝国と新羅が結びまして、

図1　発表中の佐藤信氏

六六〇年に百済を滅ぼし、六六八年に高句麗を滅ぼしました。この大きな動乱の過程の間で、百済復興軍と倭の軍勢が結んで、唐と新羅に戦いを挑むわけですが、六六三年、白村江で大敗北を喫しました。これが白村江の戦いです。

六六〇年の百済の滅亡に際して、当時の倭の政権は、斉明天皇の時代でありますけれども、『日本書紀』によりますと、大王である斉明天皇自身と、皇太子というふうに書かれています中大兄皇子だけでなく、大海女皇子ですとか、中臣鎌足内親とかが、そろって九州の地まで行きます。最初は博多湾沿い、後に朝倉宮というところに、筑後川沿いですね、宮を築いて、そこを拠点にして、朝鮮半島における戦争を指導するということを行っております。通常、律令制の下では、天皇と皇太子、天皇さんと皇太子さんがいっしょに都を空けるということは絶対に無いんですね。天皇が行幸する時には、皇太子が都に残って皇太子ゲンコクという体制を取るということが決まっておりました。律令制以前のこの時代に、大王である斉明天皇と皇太子相当である中大兄皇子が、そろって九州、北九州の地に出張っているということで、異例中の異例だったのではないでしょうか。しかも行く途中で、吉備や伊予、瀬戸内や四国などで軍勢動員をしながら北九州まで進んでいるという様子が『日本書紀』や『万葉集』を見れば、出てくるわけであります。白村江の敗戦の時に捕虜になって、唐で拘束されたり、捕虜として拘束されたりしたような人たちが、段々と何年ぶりか、何十年ぶりかに日本に帰ってきたという記事が『日本書紀』や『続日本紀』にございます。これを見ますと、この戦いに参加した軍勢の様子が分かるわけでありますけれども、大体国造軍、国造（くにのみやつこ）の軍勢というふうに私たちは呼んでおります、地方豪族の軍勢の集合体が倭軍として構成されて、白村江に向かい、

白村江の戦いに参加していくというふうに考えております。

その捕虜として苦労した末に、酷い場合は四十年ぐらいぶりに日本に帰ってくる人の記事があるわけですけれども、それらを見ますと、九州地方だけでなくて、日本列島の各地、かなり広範囲な地方豪族がこの戦いには参加していることがわかります。まあ遠い方では、陸奥国の人まで加わっていたようです。その中には当然九州の人もおりまして、筑後の地方豪族ですとか、それから肥後の場合もあります。十八ページの一番上に、「肥後国の皮石郡のひと壬生諸石」という人の記事がありますが、この人は三十三年ぶりに日本に帰ってきたということで、まあ苦労したということで、褒められています。私は、こういった広範囲の地方豪族がこの戦いに参戦したことによって、日本古代の律令国家の形成というものが格段と、その戦後に進んだのではないかというふうに思っております。

二　白村江の敗戦後の防衛対策

そこで、その敗戦後の防衛対策について話しを移したいと思います。『日本書紀』の六六四年の条を見ますと、対馬、壱岐、筑紫国などに防人と烽を置いたという記事があります。また、その翌年には、百済の亡命将軍、亡命貴族である達率という高い位を持つ「答本春初」が長門国の城を築き、達率の「憶礼福留」と達率の「四比福夫」という百済貴族が筑紫の国に遣わされて大野城と基肄城の二つの城を築いたという記事がございます。この記事の中で、派遣して「築かしむ」主体というのはやっぱり、当時の中央政府とみていいと、私は思います。これは当然のことでありますけれども、防人を置いたのもそういうものであると思います。

ただし、この時に鞠智城の記事が無くて、鞠智城が最初にみえる記事は『続日本紀』の文武天皇の二年、六九八年でありまして、これには鞠智城の修理のことが書いてあります。中身は、「大宰府をして大野、基肄、鞠智の三城を繕ろわしむ」と、修理させるということであります。ここでは、中央政府が直接というかたちではなくて、大宰府にその三つの城の修理をさせているというのに一つ気を付ける必要があるかと思います。大野城や基肄城を築城した六六五年から数えて、三十三年年後のことでありまして、三十三年経って大野城や基肄城がようやく修理しなくちゃいけないということで、修理が行われたわけです。おそらくこの鞠智城もですね、大野城、基肄城といっしょに、名前は出てきてもおりませんが、修理が必要になった段階になっていたということを考え合わせて、鞠智城も大野城、基肄城とほぼ同じような時期に、七世紀後半に築かれたとみていいのではないかという根拠に、資料的な根拠になっているというのが一つございます。

その翌年にも、大宰府をして三野城と稲積城という二つの城が修理させているという記事があります。これらの比定地は挙がらないんですけれども、一応これまでの研究で推定されているのでは、三野城については筑前の那珂郡の美野駅家の辺り、稲積城については筑前国の志麻郡、糸島半島の日本海に面した志摩町、今でいうと前原市の稲留という地名の辺り（青木和夫先生がそこに「火山」という山があるので、その辺りではないかということを言われております。）です。後でお話しするように、この志摩の地、嶋郡の郡司（この地域の地方行政区画、郡のトップ）は、これは大領といいますけれども、は肥君猪手であることが、七〇二年の戸籍に記されています。肥君というのは肥前国、肥後国の肥であり、熊本の地方豪族の出身者が嶋郡の郡司の大領として七〇二年の戸籍に名前が挙がってい

るわけです。百二十四人の戸籍でありまして、奴婢を三十七人も持っているという有力者であったことが分かります。この方は、正八位上の位階を持つ郡司でありました。熊本の地方豪族出身といいましょうか、その一族の人が、七〇二年の戸籍で郡司ということは、仮に六九九年の稲積城が志麻の城でありましたら、その修理にも関係する場合があるかなと思います。まあ、そういう形でちょっと縁のある城がもう一つ、あまり今は確認されてない城として、出てくるということがあります。

またこの時には、六六四年に防人と烽が置かれたということがありました。お城を築くだけでなくて、そのお城を築いても、敵がどちらの方からどうやって来るのかということは、常に摂行してなくちゃいけないわけですよね。それを確認するために六六四年に対馬、壱岐、筑紫国に烽が置かれたということでありました。この烽というのが笹山先生のお話しにあったように、昼間だと煙を、烽を上げて、夜だったら火を灯して、隣の烽まで飛ばすという、十数キロメートル離れた隣の烽までやって、それは最終的には九州であれば大宰府まで情報が行かなくてはいけないということになると思います。これはもうネットワークですね。『肥前国風土記』や『豊後国風土記』には、各郡に置かれた烽のことが記載してありまして、肥前の松浦郡なんかは一郡内に八箇所もあるということが記されています。また、豊後国にもあるということは、この烽のネットワークが必ずしも博多湾の北部、北九州の北部海岸だけでなくて、私は西側に入った海岸、あるいは東側に入った海岸も組まれているということを示していると思っております。これは、律令制の下では、大宝律令によって八世紀に確立する律令制の下では、軍防令の中に規定がありまして、これは烽は軍事施設なんですね。で、中央でいえば、兵部省の管轄です。大宰府の範囲では、大宰帥という大宰府の長官の職掌に烽があります。諸

国、肥後国でいえば肥後国司に烽や摂行が職掌として掲げられています。

七四〇年の藤原広嗣の乱の際には、藤原広嗣が筑前国の遠賀郡の郡家、郡役所に軍営を張りまして、そこから烽を掲げて国内の兵を徴発したという記事が『続日本紀』に書かれております。九州の場合、烽を上げて軍団の兵士を徴発するということは、外敵が攻めてきたということを基本的には意味すると私は思いますので、この烽があったら諸国では国司が軍団を徴発して、すぐに対応しなくては危険であるというような態勢になろうとかと推測しております。

広嗣の戦いの時には、広嗣軍は三つの道から、今で言う、今の北九州市ですよね、あの山口県に近いところに進軍していくわけです。広嗣自身は、大隅、薩摩、筑前、豊後の軍勢、計五千人を率いて、鞍手道から進んだということであります。それに対して、広嗣の弟の綱手は、筑後と肥前の軍勢五千人を率いて、東側の豊後国から今の北九州市の方を目指すと、あの門司の方を、関門海峡の方を目指すということであります。三軍のもうひとつの軍は、多胡古麻呂という豪族に率いさせるわけですが、これは田河道、今の、福岡県に田川市ってありますけれども、その田河道から進軍しなさいということなんですが、残念ながら率いる軍の数が『続日本紀』に漏れております。先ほど言った大隅、薩摩からも軍勢を率いているんだから、肥後があってもいいんですけれども、筑前、筑後、肥前、豊後があって、肥後も豊前も無いわけであります。ただ残る軍勢の中に肥後国の軍団の兵士が勘定されているとすれば、先ほどちょっと笹山先生のところでお話しのあったように、九世紀の初めまでは四千人、四軍団、四千人の軍勢を肥後国は持っとりましたので、それが動員されたということになるかもしれないということがあります。九世紀の史料の中に、鞠智城には兵倉（つわものぐら、へいこ）、武器

を収めている兵倉がずっと維持されていたことが記されています。そういう際には、鞠智城にあった、当然置かれていた武器なども動員される場合があり得たかなと、これは推測でありますけれども、想像されます。

こういった律令軍団制や烽の制度というのは、八世紀後半に東アジアの情勢が安定するということもありますし、国内的に民衆の階層分解が進んで、軍団を維持するというのが三人に付き一人という、民戸から一人ずつ徴兵するという制度が実効的でなくなってしまったということで、相次いで停廃されます。ただし、七九二年に軍団制が廃止されても、陸奥・出羽・佐渡と大宰府管内諸国は除かれております。それから、烽も七九九年に停廃される、止められるんですが、大宰府管内は元のまま設置せよということが書かれております。やはり大宰府管内というのは、軍団制あるいは烽の制度の中でも、軍事的な制度の中でも、特に気を遣われており、八世紀の最末期にでも気を遣われ、九世紀にもその体制が延長上で延びていくということがあろうか思います。

三　鞠智城の立地の歴史的意義

そうした九州の中における鞠智城の立地ということでもあるんですが、その鞠智城の立地の背景としましては、これまで笹山先生、岡田先生、あるいは大田先生のお話しにもありましたけれども、有明海と国際関係が係わっていると考えられます、遡ると筑紫国造の磐井の戦いというのが六世紀の初めにありますけれども、これは、高句麗や百済や新羅や伽耶の外交使節が、それまでは畿内の大王の所に行っていたのが、筑紫君磐井の所に来るように、遮ってしまったことに端を発しました。まあ、

この外交権を奪われるということは、最先端の文明知識、技術、そういったものを自分が入手して、他の地方豪族に分けてやるという体制が大王から磐井の方に移行してしまうということになりますから、これは大変な、大和の倭の王権にとっては大変な事態になったということであります。この磐井の本拠地が、八女古墳群の岩戸山古墳が磐井の墓だということになりますけれども、筑後国でありま す。肥後国にとっては、すぐお隣、すぐ北側の地です。この磐井の考古学的あるいは文化的なテリトリーは、『日本書紀』にも筑紫国と肥国と豊国を勢力範囲として、行動を起こしたことが書いてありますように、ちょうど六世紀の前半、この石人石馬が分布する筑紫と肥国と豊国であり、石人石馬の文化圏であります。かつ石人石馬の石が阿蘇山の阿蘇凝灰岩というのでしょうか、阿蘇石と言われている石で作られる、見事に磐井の戦いの後、石人石馬の文化が無くなっちゃうということでありますけれども、そういう文化圏からいくと、筑紫君磐井と肥国の地方豪族との間もかなり密接な関係があったとみていいと思います。その肥国の地方豪族でいうと、江田船山古墳の出土した鉄刀銘に、「獲加多支鹵大王」と肥国の地方豪族との関係が象徴的に銘文として残されているということが、私はいえると思います。そう意味では、肥国の地方豪族もですね、中央政府との動き、あるいは磐井の行動と関係があります。また、磐井の行動の背景には、朝鮮半島の高句麗・百済・新羅・伽耶との交流というものが背景にあるということですから、東アジアの動きの中で、この肥国の地方豪族たちも大きくその関与していたということが言えるだろうと思います。その象徴がこれまでもお話しに出た、火葦北国造阿利斯登という人が大伴氏、まあ大伴金村の命で、朝鮮半島に出張っていったという伝承であります。その息子の日羅という人は、百済国に存在して、その日羅を対外外交の顧問として倭の大王

が召し出したというような記事が『日本書紀』の中に、敏達天皇の記事に残っています。つまり火葦北国造がやはり半島との関係の中で、外交関係の中で大いに活躍して、その息子は百済の政権の中にも位置付けられているというようなことがあったということであります。私は有明海に面した肥後国の地域というのが有明海、私は大陸・半島とわりと密接に繋がるような交流の中で歴史を刻んできた地域だというふうにみて良いのではないかというふうに思っております。

その肥国の豪族の一部が筑前国の嶋郡の大領、郡司にまでなっているという話しは先ほど申し上げました。また、薩摩国の正税帳をみますと、薩摩国の出水郡だとか薩摩郡の大領も肥君が任命されております。当然倭の政権、あるいは律令国家が薩摩国に伸長していく、勢力を拡大していく過程で肥後国の地方豪族が大きく進出していくということは当然あっておかしくないと思っております。その有明海は、笹山先生のお話しにあったように、九世紀の末でも新羅の海賊が肥後国に、を襲ってきたという記事があるぐらいですから、そういう意味で決して大陸・半島との関係が粗であるというような土地柄では、私はないのではないのかなと思っております。

あと菊池川の有力な生産地を鞠智城の場所というのは、後からまあそれを押さえるような場所ではないのかなと思っております。先ほどの岡田先生のお話しでは、「車路」という歴史地理学で確認される古い時代の古道が大宰府から鞠智城近くに至った後、そこを一つのクロスロードの場所として薩摩に向かう道と、豊後経由で日向に向かって大隅に進んでいく道があったということであります。まあ三叉路でしょうか、その交点に鞠智城が位置するというお話しがあったわけであります。これも私たち、かつては延喜式に書かれている十世紀代の駅路のコースがやっぱり研究の出発点で、古代交

通の出発点であったんですが、それ以前の八世紀とか七世紀の交通路というものを考えると、今の「車路」のような道をやはり優先的に考える必要があるのではないかというふうに思っております。

先ほどの筑後と肥後との密接な関係というのは、八世紀の初めの筑後の国司である筑後守の道君首名という有名な人物がいるんですが、彼は、肥後国守も兼任しているんですね。従って八世紀初めの段階で筑後守が肥後守も兼任して、この人は有能な人で筑後国の陂・池も、この人が造って、その池のお陰で地元の民衆が潤っているという記事が『続日本紀』にも記載されているわけであります。そういう意味で大宰府から筑後経由、筑後・肥後というかたちの道も太いパイプが、私はあったのではないかと思います。

鞠智城の築城、造営、経営体制というものを考えますと、先ほど言ったように、その際には大宰府が修理するということであります。そこで、築城の時の技術を問題にしたいんですけれども、大田先生のスライドの報告でもあったのですが、古代のまず朝鮮式山城であり、百済系の技術をおそらく使っているはずですので、その百済系の技術が版築ですとか、石垣ですとか、水門などに、それがどういうふうに現れているか、ということを考古学的にぜひ伺いたいと思います。また、八角形の建物などは、ソウルのすぐ近郊の河南市にある二聖山城にも八角形だとか、九角形とか、十二角形とか、十三角形もあったと思いますけれども、私も調べにいったことがあるんですが、そういった意味で百済の山城との構造がどういうふうに同じで違うかというようなことも今後さらに極めていただきたいと思います。また掘切門だとか、池ノ尾門などの礎石、門の扉を置いたものすごく大きな花崗岩製の礎石が、軸受けの孔が空いているのがありますが、そういった石の構造、城門の構造などもぜひ城門

構造がよく分かっている大野城や岡山県の鬼ノ城とぜひ比較していただきたいなあというふうに思っております。

まあ、そういう百済系の技術を使ったというのが形の上で見える場合が幾つかあるかなと思います。一つは、百済系の軒丸瓦、文様の軒丸瓦が見つかるとかですね。それから遺物の面では、先ほども写真で見せていただいた、百済系の菩薩立像、小金銅仏が出土しています。それから八角形の建物の二聖山城との共通性、貯水池・貯木場の共通性みたいなものもあります。ただし、二聖山城の場所は古くは百済の故地ですが、二聖山城が最終的に機能しているのは新羅時代だと思うので、百済の技術なのか、新羅の技術なのかというのは、まだもうちょっと検討が必要かなと思います。

八世紀のこの鞠智城の経営につきましては、大宰府が担当する面と肥後国が担当する面と地元である菊池郡がどのように関与したかという面の三つの相がありますが、その他に中央政府との関係ですね、があるんだろうと思っております。

大宰府の場合は、大宰府が直接修理したという記事があり、そしてそういう場合にはおそらく「鞠智城司」のような役所が置かれるんだろうなというふうに思います。また、国司、肥後国が管轄するようになりましたら、国司の下で、例えば軍団との関係でこの笹山先生のお話しにあったように、軍団の兵士がこの城を防備するというような体制になるんだろうと思います。一番最初は、大宰府が関与していれば、防人がここに来ても良いかなと私も考えております。それと同時に、所在郡である菊池郡も当然関係するということがあると思います。ここで出土した「蔡人忍□五斗」と読まれている荷札があるんですけれども、これは、郡名、国名を書いてないで、名前だけ、人名だけ書いてある荷

札であります。おそらくこういうものは一郡内で機能する場合でありまして、関連するものとしては、これは話すと長くなるんですけれども、長野県の屋代遺跡群あるいは島根県の青木遺跡で出土した人名から書き始めた荷札木簡があり、これは郡役所のレベルの範囲、郡の範囲内で機能しているという例であります。まあ場所は書いてないけれども、菊池郡内に秦人忍という人がいて、その段階の荷札が外されているという可能性があるかなというふうに考えております。

国の場合は、この鞠智城の北西に「シャカンドン」と呼ばれている地名があるというので、これが「佐官どん」だとすると、国府の「佐官」ですよね、まあ大宰府の佐官ということもあり得なくはないんですけれども、何かこの城を担当すると、別当として担当することも可能性は考えられなくはないかなと現地に伺った時に思いました。

あと、灰塚という展望のものすごく良い所に行くと、あれが「日の岡」ですというふうに教えていただいたんですけれども、おそらく烽が最後の、鞠智城に接続する最後の烽の位置が、北側の烽の位置がすごくよく分かるのであります。これは、一つ分かってくるとネットワークが芋蔓的に分かってくると思うので、「車路」とは別にですね、ぜひ烽のネットワークも究明していただけるとありがたいと思っております。

この鞠智城は、お話しがあったように、九世紀の半ばにも、菊池城院の兵庫の鼓が自然に鳴ったとかですね、菊池城の不動倉が焼けてしまったとかいう記事があったり、八七五年には烏が菊池郡の倉庫の草葺きの草を抜いてしまったという記事があったり、八七九年には肥後国菊池城院の兵庫の鼓が鳴ったり、とかいう記事があります。九世紀だとおそらく肥後国菊池城院と書いてあるので、この

時代は大宰府の鞠智城というよりは、肥後国の鞠智城だと思います。その中では稲穀の倉ですよね、米倉と兵倉、それが存在する場所として、九世紀代には大きく機能していただろうと思います。

おわりに

で、古代の朝鮮式山城もですね、あの城郭だけではなくて、必ず大野城でも基肄城でも米倉があります。それはそこに籠もって防衛戦を戦うための倉庫群が必要です。それから、兵倉も必要ですよね。そういった機能の、特に兵倉、米倉としての機能としてはですね、大宰府から出土した、発掘調査で出土した木簡に「為班給筑前筑後肥等国遣基肄城稲殻随　大監正六位上田中朝」（筑前筑後肥等国に基肄城の稲殻を分かつために、大宰府の役人である大監の正六位上田中の朝臣という人が派遣されている）という、これは天平期、八世紀の半ばの木簡だとされておりますけれども、そのことを窺わせてくれます。八世紀半ばに鞠智城と同じように朝鮮式山城の中に米倉があって、そこに米がたくさん蓄積されていた基肄城は、大宰府の管轄下にあって、そこにある米倉にある米を筑前・筑後や肥等の国ですから、肥前・肥後が入ると思うんですけれども、肥前・肥後に配るために基肄城に大宰府の役人が派遣されています。八世紀の半ばの段階で基肄城の管轄というのはやはり大宰府であって、そこにある米も大宰府が利用する権限を持っていたということを示しているようです。基肄城は一部肥前ですね、筑前と肥前に跨る山城でありますけれども、私は、八世紀代の鞠智城を考える時には、もう少し大宰府との関係、肥後国司との関係を重層的に検討する必要があるのではないかと思っております。

ということで、あの東アジアとの関係、あるいは日本の古代の律令国家の形成過程の中で、鞠智城というものをもういっぺん歴史的に位置付けていくということがなおまだ課題が少しあるのではないかというふうにも思っております。一方で、百済や朝鮮半島の古代山城との比較研究とかですね、あるいはこれまでの発掘調査成果、すごい成果が私、今日も伺って、上がっていると思うんですが、それがあまりに研究の世界で知られていないということがあります。そういった発掘調査成果の、何といいましょうか、報告、発信というものをお願いしたいなあと思っております。

以上ちょっと時間が私もオーバーしてしまいましたけれども、短時間で駆け足になっていまいましたが、後で機会があれば補いたいと思います。どうもありがとうございました。

朝鮮古代史からみた鞠智城
――白村江の敗戦から隼人・南島と新羅海賊の対策へ――

濱田耕策

はじめに

六六三年の白村江における古代日本の敗戦は執権層に深刻な危機意識をもたらしたに違いない。王族や官人をはじめ百済人が盛んに亡命してきたことと相俟って、唐・新羅の連合軍が倭の派遣軍を追撃して列島を襲い来るやも知れない危機感から、大宰府の守備を中心とした防衛施設網を西日本に構築することになる。

ここでは、鞠智城が七世紀後半に朝鮮半島の戦争動向に備えて築城されて以来、九世紀半ばにも鞠智城は半島情勢に危機感を高めて大宰府との連絡を密にするに至るこの三世紀に亙る鞠智城の歴史を朝鮮半島の政治と社会の動向から考察する。

一　鞠智城の造営

図1　発表中の濱田耕策氏

白村江敗戦の翌六六四年五月には百済の故地を占領統治する唐の鎮将の劉仁願が郭務悰を倭国に送ってきた。郭務悰は十二月まで倭国に滞在した。郭はこの間に倭国の軍事を探ったに違いない。たたゞ、郭は唐から半島へ、半島から北部九州、そして瀬戸内の長い航海をどのように記憶し、またこれを劉仁願に復命したであろうか。郭は唐が倭国に派兵することは倭国軍が白村江の海戦で敗北した轍を踏む危惧を抱いたのかも知れない。その実では北の高句麗戦に進むべく、派兵を匂わせて倭国を威圧する外交を行ったに違

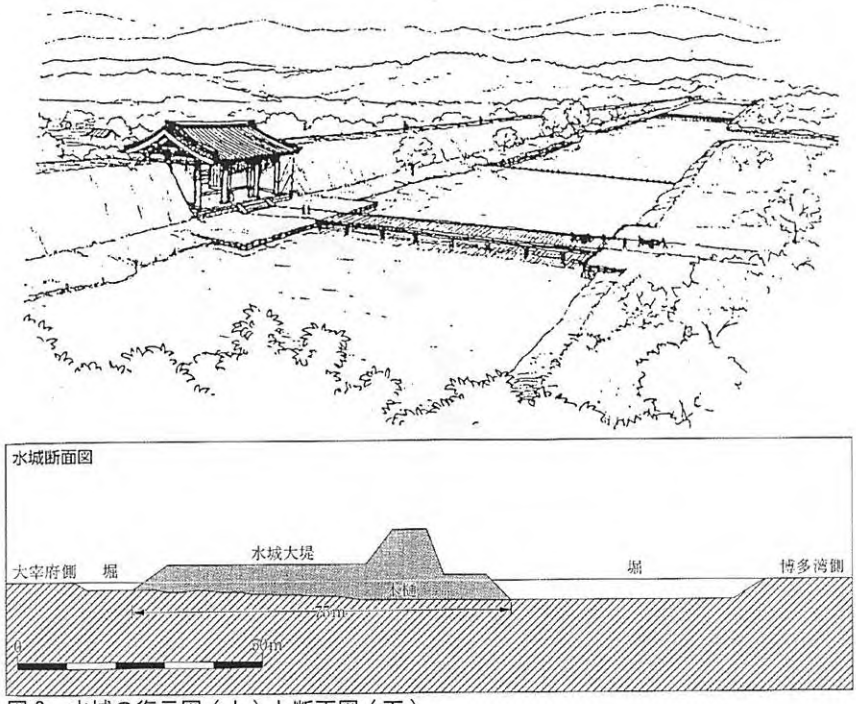


図２　水城の復元図（上）と断面図（下）
（復元図：九州歴史資料館 1988『発掘が語る遠の朝廷　大宰府』、
断面図：岡田茂弘監修 2002『復元するシリーズ② 古代の都を
復元する』学習研究社　より転載）

いない。

大和王権では半島情勢に向けた危機感は極まるのである。その対策が大宰府と大和の防衛網の構築である。『日本書紀』巻第二十七・天智天皇三年（六六四）の「是歳」条には、「対馬島・壱岐島・筑紫国等に、防〔さきもり〕と烽〔すすみ・のろし〕をおく。また筑紫に大堤を築き水を貯う。名づけて水城と言う」とある。大宰府の西北には博多湾が控えており、府の近くにも水の防御を配置した。郭務悰が伝えた百済故地に駐留する唐の将軍劉仁願の外交と半島情勢に倭国は反応したのである。

また、翌年の天智天皇四年（六六五）「秋八月」条には「遣達率答・火十本・春初（だつそちたふほんしゅんそ）を遣わし、城を長門国に築かしむ。達率憶禮福留（だちそちおくらいふくる）と達率四比福夫（だつそちしひふくぶ）とを遣りて筑紫国に大野及び椽（き）城を築かしむ」とある。水城とこれに東西で連なる山城とによる大宰府防衛の第一歩が築かれた。

この憶禮福留は六六三年九月に百済から倭国に逃げ来っていたから、大野と椽（き）城の築城に

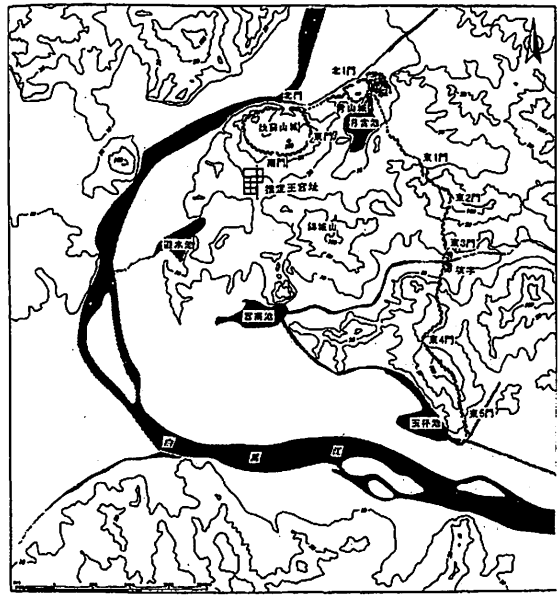


図3　百済の都城（泗沘）
朴　淳発 2004「泗沘都城」『東アジアの都市形態と文明史』国際日本文化研究センター　より

は白村江の敗戦を前後する頃に亡命してきた百済人の知識と技術が働いている。この大宰府防御のプランニングには森公章氏や亀田修一氏らが示唆するように（一）、百済の都城防衛網が参考にされていよう。百済初期の都の漢城（ソウル特別市松坡区の風納洞土城と夢村土城）はその西北に流れる漢江の流れと東北から東南部に山城を構えている。また、四七五年に百済は高句麗に逐われて南の忠清南道の熊津城（公州市）に遷都し、さらに六十三年後の五三八年には熊津城から錦江を下った泗沘（扶餘邑）に遷都したが、この二都も錦江の流れを西北の護りとして、都の四方には山城を配置していた。百済の三都を守備する水流と山城の防御網の知識は、兵法に熟達していたと

図4　保存整備が進む国史跡の鞠智城跡

伝わる達率の答・火十本・春初や憶禮福留らの亡命百済官人によって倭国に導入され活かされたと考えられる。

さて、鞠智城が大宰府防衛網に組まれるのは次ぎの段階である。憶禮福留らが大野と椽城を築いた翌九月に唐の劉徳高ら二五四人が対馬を経てやって来た。このなかにはかの郭務悰もいた。劉らは十二月に引き上げたが、今回の郭の来日は前回とは使命を違っていよう。劉徳高は先の六五三年に遣唐使に随行して入唐していた学問僧の定恵を伴っていた。定恵は内大臣の中臣鎌足の子であるが、劉徳高ら唐本国の使者と百済故地の動向に詳しい郭務悰等の一行の盛大さは、倭国を圧しつつ安定した関係を勧める使命であることを考えさせる。同年八月には熊津の就利山で鎮将の劉仁願の下で新羅の文武王と百済王族の扶餘隆と会盟して百済の遺衆の抵抗はひとまず終結したから、百済故地を統治する劉仁願ら占領軍は倭国との関係を安定させることで半島南部を固めて、対高句麗戦に向かおうとする

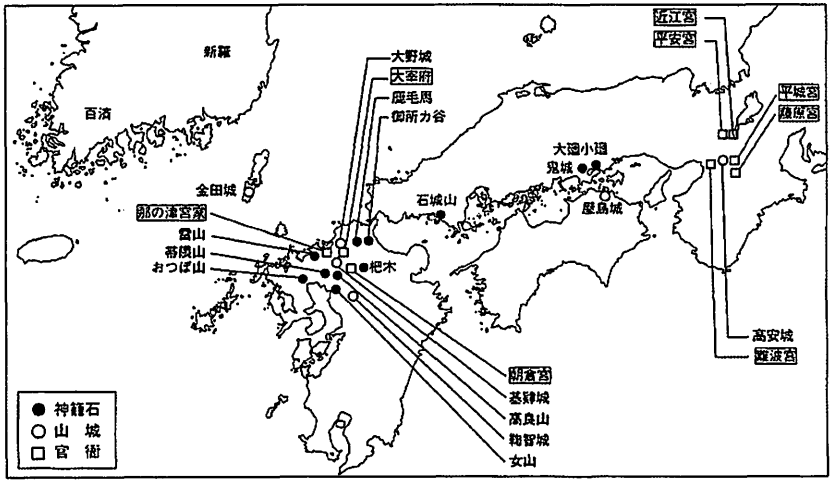


図5　古代山城（神籠石系山城・朝鮮式山城）の分布

ことが唐本国の戦略であると思われる。

この間にも、半島と列島に挟まる耽羅は、憶禮福留らが築城した六六五年八月と郭や劉が十二月に倭国を離れたその翌年の六六六年正月、さらに六六七年七月にも倭国に使節を送ってきた。六六六年正月と十月には高句麗の使節も倭国に来たっていた。倭国には白村江の敗北感のうえに新たな半島情勢の緊張感が加わってきた。六六七年十一月にはかの百済鎮劉仁願は司馬法聡をして六六五年十二月に唐の使者の劉徳高らの帰

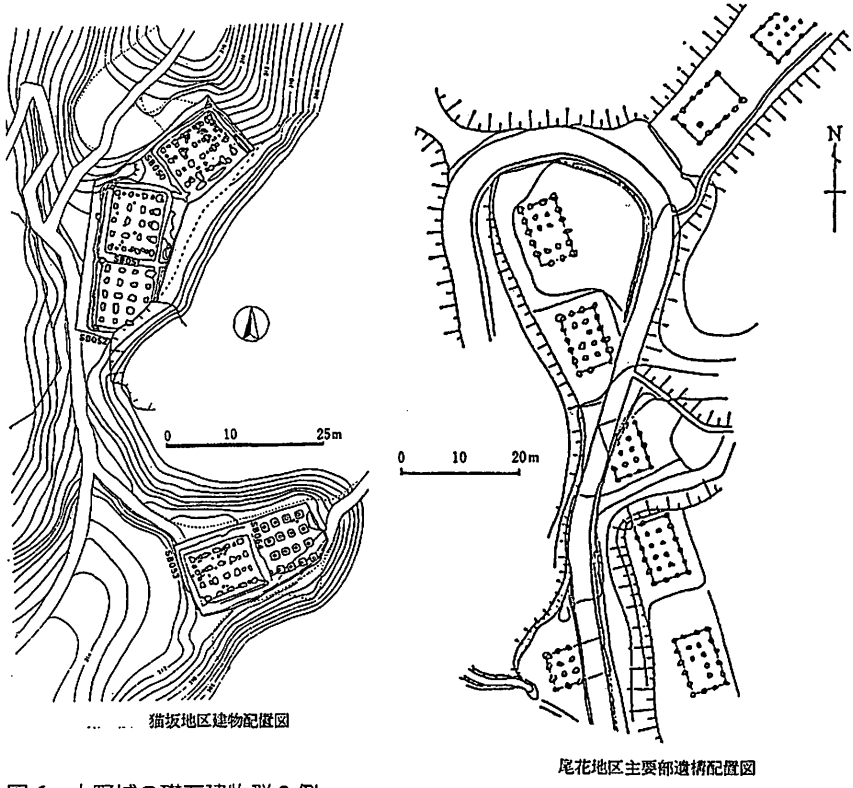


図6　大野城の礎石建物群2例
横田義章 1983「大野城の建物」『九州歴史資料館開館十周年記念　大宰府古文化論叢　上巻』吉川弘文館　より転載

国を送った遣唐使の境部連石積らを大宰府に送ってきたが、ここにも唐は倭国との安定な関係を勧めて、高句麗戦に進むのである。

そこで、倭国は境部連石積や法聡から唐や半島で進行する高句麗戦等の半島情勢を得たであろう。同月には高安城（奈良県生駒郡と大阪府八尾市の境）、讃吉（さぬき）国の山田郡の屋嶋城（香川県高松市）、対馬国の金田城（対馬市美津島）を

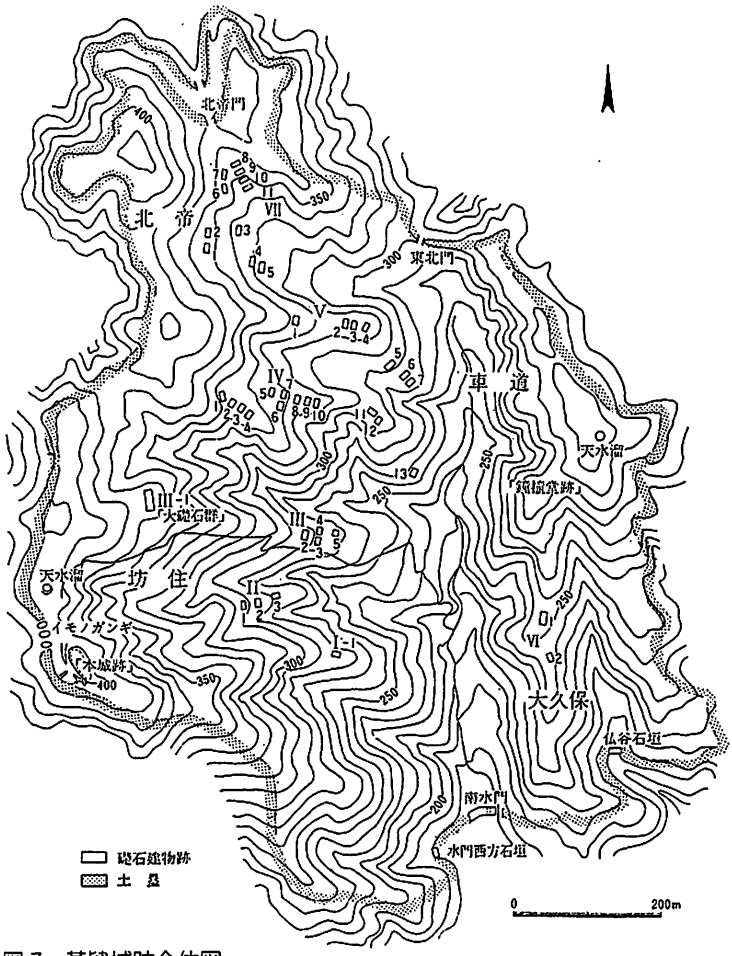


図7　基肄城跡全体図
田平徳栄 1983「基肄城考」『九州歴史資料館開館十周年記念　大宰府古文化論叢　上巻』吉川弘文館　より転載

築かせている（『日本書紀』巻第二十七・天智天皇六年）。唐の本国軍と百済占領軍、それに新羅軍による高句麗戦という半島戦争による混乱という不慮に備えた対策である。

ところで、鞠智城についてはその築城がいつなのか記録がない。古代の山城では築城記録があるほうが希である。『続日本紀』巻第一・文武天皇二年（六九八）「五月甲申（二十五日）条に「大宰府に大野・基肄・鞠智（くくち）の三城を繕治せしむ」とあることから、鞠智城は大野・基肄城と連携し、かつ大宰府に統轄される軍事の施設と見られるから、その築城は大野・基肄城の二城が築かれた「六六五年秋八月」かと理解されるが、また大宰府と大和を護る金田城や高安城が築かれた第二期の山城築城時であるこの六六七年十一月に築かれたかとも見られる。

白村江敗戦直後には倭国は唐の百済占領軍と新羅の動向に警戒して対馬から大宰府に至る防人と烽火台、水城を築いたが、敗戦後に倭国は唐軍からの使節を三度迎えると唐軍などの対高句麗戦の戦況の変転に備えて、大宰府と大和を防衛する山城網の強化を図ったものと考えられる。

六六八年には高句麗王権が唐と新羅の連合軍の前に滅亡して、唐は高句麗の故地に安東都護府をおいてここをも間接統治を始めたから、唐の政治軍事圧力のさらなる浸透を防ぐべく、新羅は唐軍の撤退を求める抵抗戦を進めた。やがて、唐は西の吐蕃などに備えて東の新羅と妥協したから、六七五年には新羅と唐の和平が成立した。

この和平は盛んに来日した新羅使から知らされたに違いないから、その後に行われた「六九八年五月二十五日」の「大宰府に大野・基肄・鞠智の三城を繕治せしむ」とはその事情をどう理解されるであろうか。半島情勢は安定に向かうから、この三城の「繕治」にはほかの要因があろう。そのことは

「3．八世紀の鞠智」で述べよう。

さて、鞠智城の地が大宰府防衛網の拠点の一つに選定されたのは、朝鮮半島西部から有明海に至る半島からの文物渡来の歴史がこの地域にも前史として確かにあったからであろうと考えられる。弥生時代には朝鮮半島の無文土器や中国系の銅銭が渡来しており、古墳時代には著名な江田船山古墳に副葬された朝鮮系の文物、また五八三年には火葦北国造の阿利斯登の子であり、百済の官僚として倭国との政治交流の任務を務め、百済第二位の官位である達率を帯びた日羅の事例（『日本書紀』巻二十・敏達天皇十二年）が想起されるように、有明海と朝鮮半島西南部を往来する海上ルートの交流史は今日からの想像以上のものであろう。

二　鞠智城の築城者

鞠智城は前記した『続日本紀』に文武天皇二年（六九八）五月二十五日に「大宰府に大野・基肄（きい）・鞠智（くくち）の三城を繕治せしむ」とあることが記録の最古である。この記録からは鞠智城が三十三年前に築かれた大野・椽（基肄）城と連携する山城であること、またこの三城を「繕治」したことは大宰府を中心とする連携を強化する施策であったことが知らされる。その「繕治」とは城壁の補修と強化のほか城内の施設を充実することでもあったに違いない。その連携強化を内外の諸事情から考察する前に、鞠智城を築城した人々について考察しよう。

鞠智城の築城時期は白村江敗戦後の間もない六六四年に、対馬島・壱岐島等に、防（さきもり）と烽（すすみ／のろし）を置き、また筑紫に水城の大堤を築き、また翌六六五年秋八月には遣達の率答・

火十本・春初に長門国の城を、達率の憶禮福留と達率の四比福夫には筑紫国の大野と椽（き）の二城を築かせて、水と山城とによる大宰府防衛の第一歩が構築された頃かとも考えられる。しかし、また、倭国には白村江の敗北感に加えて、唐の百済占領軍を中心として高句麗を攻撃しようとする新たな半島情勢の緊張感が漂い、六六七年十一月に大和に入る高安城や讃吉国山田郡の屋嶋城、また対馬に金田城を築いて半島情勢に備えたが、この頃に鞠智城は築かれたかとも考えられてよい。

そこで、鞠智城を「きく」「ち」ではなく「くくち」と読む『日本書紀』の古訓を糸口にこの山城の築城者層について考察して見たい。「鞠」「智」

図8　温故創生之碑の百済高級貴族像
鞠智城の築城を指導したと想定する「達率憶礼福留」が何事かを指し示している。

は今日の韓国語音では「厩」（K ŭ）「走」（C ŏ）である。一五二七年に崔世珍が編纂した漢字の字訓辞典である『訓蒙字會』でも「鞠」「智」はやはり「厩」（「K ŭ）「走」（C ŏ）である。これを今日流に仮名表記すれば「くくち」となる。鞠智城の「鞠智」が「くくち」と訓（よ）まれたのは百済の音に由来するのではなかろうかと、思われる。

また、「智」或いは「知」は新羅の貴人の人名末尾によく表れる漢字表記である。百済人の例では六六〇年十月に佐平の鬼室福信が百済の十六等の官位のなかでは第一位である「佐平の貴智」を倭国に派遣して、唐人の捕虜百余人を献じたことがある（『日本書紀』巻二十六・斉明六年）。また、六六二年六月には百済の「達率の萬智」が来日している（同巻二十七・天智天皇元年）。

そこで、六六五年に長門国に城を築いた百済官人の「達率答・火十本・春初」や筑紫国に大野城と椽（き）城を築いた「達率憶禮福留と達率四比福夫」の例を見れば、筑紫の二つの山城と連携するこの鞠智城の「鞠智」とは百済では上位の官位である佐平や達率を帯びた百済からの亡命官人の名前ではなかったかと、考えられる。この「鞠智」が築城に際してその土地の選定に始まる築城のプランナーとして城名に名を残す程の貢献をなしたものかと考えられるのである。

この「鞠智が築いた城」と言う「鞠智城」は後述のように九世紀では「菊池城院」として現れる。二世紀にも近いその間に、築城プランナーの百済人に由来するかと考えられた「鞠智」（K ŭ C ŏ・くくち）は「鞠」（K ŭ・きく）あるいはその旁の「匊」（K ŭ・きく）の漢字音に従って、「菊」（K ŭ）へと変わり、「智」も同音の「池」へ交替して、「菊池」（K ŭ C ŏ）という美字をもって和語化したのであろう。

『三国志』魏書・烏丸鮮卑東夷伝の倭人条（『魏志倭人伝』）には「狗奴国」があり、「其の官には狗古智卑狗あり」とある。この「狗奴国」を熊本県北部に比定して、「狗古智」を「くこち」と読んで、これを「菊池」の語源と見る理解もあるが、この理解は邪馬台国の所在論とも関係して、「狗奴国」の所在も東日本にも比定される説も盛んであり（二）、三世紀半ばの「狗古智」を七世紀末の「鞠智」や九世紀末の「菊池」の淵由とすることには躊躇を覚える。

三　八世紀の鞠智城

白村江敗戦直後の危機感と唐の百済占領軍と新羅軍による高句麗戦という朝鮮半島の動向に備えて築かれた鞠智城をはじめとした西日本の朝鮮式山城は、高句麗が滅び、唐と新羅の和平が産まれて半島情勢が安定に向かった七世紀末からはその存在意義は変化したものと考えられる（三）。

その変化は半島情勢の安定とともに倭国の体制の整備にも由来する。まず、朝鮮半島では六六八年に北の高句麗が滅亡した後、唐は平壌に安東都護府をおいて、また扶餘においた熊津都督府とともに将軍の薛仁貴や劉仁願等を頂点とした半島支配を始めた。六七一年十一月には対馬から大宰府に郭務悰が二千人の百済人を四十七隻の船に載せて倭国に向かっていることを知らせてきた。亡命百済人は近江の蒲生等の地に安置されたが、他の安置先にはかの百済官人が築いた山城の付近の地もあったのではないか。山城と渡来人系の遺跡・遺物との関係に関心が及んで来る。

さて、新羅は六七二年より、高句麗の故地で唐軍に抵抗する勢力に加勢して、唐軍の撤退を迫る運動を始めた。そこで六七四年には唐軍は新羅に進軍し、新羅王を文武王に替えて唐に宿衛していた文

武王の弟の金仁問を据えようとさえした。両軍の戦いは六七五年二月まで続いたが、新羅がこれまでの反唐行動を唐に「謝罪」したから、朝鮮半島は安定に向かうことになった。この唐と新羅両国の和平の背景には、唐が西の吐蕃との対立に重点を移すという広い範囲の国際関係があった。

新羅は高句麗が亡んだ六六八年九月以降にも、また唐軍と対立していた時期にもそうであったが、半島に安定が到来した以後も盛んに倭国に使節を派遣して来た。また、遣新羅使もこの間の七〇〇年まで十度送られている。新羅との外交が盛んに進められた時代である。

倭国が律令を体制の中核に置いた日本国を形成する過程の外交は新羅ばかりでなく、九州南部と南島勢力へは慰撫策として進行することになる。

六九八年の四月十三日には、「文忌寸博士（ふみのいみきはかせ）ら八人を南嶋に遣り、国を覓（もとめ）しむ。因りて戎器を給う」（『続日本紀』巻一・文武天皇二年）ことがあった。大宰府が大野、基肄、鞠智の三城を繕治したのは、この翌月の「五月二十五日」のことであった。

この大宰府に連なる三城のなかで、鞠智城はその南方に位置する立地から判断すれば、この城が奄美等の南島勢力に向けられた倭国政権の慰撫策にも対応することが読みとれる。半島情勢が安定に向かうこの時期に大宰府に連なる三城を繕治したことは、大宰府に至る交通路の要所に立地する山城とその城内の施設を整備し、新羅使のみならず隼人や南島の使節に迎接の初期の儀礼ばかりでなく、山城の防衛施設をも通じて倭国の威を各使節に感得させることではなかろうか。新羅の王京の金城（慶州）には南に南山新城、東に明活山城、西に西兄山城、北に北兄山城を配置していた。日本との外交摩擦が頻発した八世紀の二十年代では、まず七二二年に日本からの侵攻を恐れて、金城に南から入る

経路に関門の長城とその東に萬里城を築くに至っている。

「国覓使（くにまぎのつかい）」を南島に派遣して、また三城を繕治した翌年の文武天皇三年（六九九）「秋七月辛未（十九日）」には、「多禰・夜久・奄美・度感（たね・やく・あまみ・とく〔徳之島〕）等の人、朝宰に従いて来り、方物を貢ぐ。位を授け、物を賜うこと」があり、「度感嶋の中国に通うこと、是より始る」こととなった（同巻一・文武天皇三年）。大宰府では西から新羅使を盛んに迎え、また遣新羅使を盛んに派遣するばかりでなく、ここに至って南からは度感嶋の使者等を迎えることになったのである。

律令制を布いた倭国は新羅使とともに度感嶋をはじめとした南島勢力の使者を迎えて、「中国」たる威容をまず九州の地で外来の使節に感得させる装置が求められるが、そのひとつとして大宰府に連なる山城の強化など「繕治」という整備がなされたものと思われる。その契機は遣新羅使が新羅の金

図9　古代の薩南諸島

城に至る路程や金城に在京中に眺望した山城と其の威にあったのではなかろうか。築城して三十三年ほどを経て大宰府の東西に座る大野、椽城、そして南の鞠智城を「繕治」した外交と政治の背景のひとつがここにあろう。同年の八月二十日に、かの六六七年に築城していた「高安城を修理」したのも、その一環であろう（同巻一・文武天皇二年）。

ただ、翌年「十二月甲申（四日）に、大宰府に三野（日向国児湯郡三納郷）・稲積（大隅国桑原郡稲積郷）の二城を修（つく）らしめ」（『続日本紀』文武天皇三年）たという新たな築城は隼人勢力への対策であろう。（四）

隼人や南島の勢力を慰撫・懐柔する策は、その策に接するまず隼人の勢力から抵抗を受けることがある。隼人と南島との間にある利害関係の変動、或いは隼人は遠交近攻策の対象となるやも知れない危機感を覚えるからである。七〇〇年の「六月庚辰（三日）には、薩末比売・久売・波豆、衣評督衣君県、助督衣君弖自美（さつまのひめ・くめ・はつ、えのこほりのかみえのきみあがた、すけえのきみてじみ）と肝衝難波（きもつきのなには）は肥人（くまびと）等を従え、兵を持って覓国使（くにまぎのつかい）の刑部真木（おさかべのまき）等を脅かす」という抵抗を起している（『続日本紀』巻一・文武天皇四年）。

隼人の叛乱は七〇二年、七一三年と七二〇年と続いている。七〇二年の叛乱は薩摩と多禰（たね）が律令国家による民を戸籍に編成すること、即ち国家からみれば「天皇の徳治に化する」ことに対する反抗であったから、大宰府はこれに「征討」を加え、ついには薩摩と種子島の民を戸籍に付けて支配を強化することになっている。（五）

隼人の抵抗には大宰府を拠点として鎮圧軍が組織されるが、鎮圧の戦力には記録がないからと言って鞠智城の組織が無関係であったのではなかろう。大宰府から南に向かう最大の山城として、鞠智城は隼人の叛乱に向かう基地としても機能したであろう。

薩摩、大隅、日向の三国には徙民策を進めて、隼人の弱体化を図ったから、大隅の国守の陽侯史麻呂が七二〇年の隼人の反乱のなかで殺害されている。これには大伴旅人が征隼人持節大将軍となって一万余の兵を率いて鎮圧にあたったが、一年半近くを費やしている。その間に、隼人一千四百余人が斬首され、七二三年になると大隅、薩摩の隼人六二四人が朝貢する服属が進んでいる。

こうした八世紀初期の九州南部地域において、対外的には「日本」として現れる倭国が律令制を進行させる過程で起こった隼人の叛乱に、鞠智城は無縁ではなく、むしろ機能したであろう。朝鮮半島情勢に対応して築城した七世紀末葉の時期とは異なり、威と武を備えた新たな構造がこの段階の鞠智城には備わってはいないだろうか。

四　九世紀の菊池城院

九世紀半ば以降では、西海上に新羅海賊が出没するという対外的危機が発生する。大宰府を中心にこの危機への対応策が採られるが、鞠智城が菊池城院と改まった時期は不明ではあるが、菊池城院もこの危機対応に無関係ではない。

対外危機の兆しは新羅からの流民の渡来から始まる。八三四年では、それまでの新羅からの流民は遠江、駿河、陸奥など東国に徙民したが、ここに至って流民を放還や追却している。日本内では律令

制が弛緩しており、新羅流民の定住が社会不安が加速することを恐れたのである。（六）

新羅では内陸部では草賊と呼ばれる叛乱が継続し、海上では新羅流民を唐に売る海賊が跳梁していた。この時、渡唐して軍人となっていた張保皐は新羅王の興徳王が寧海軍使という唐から担わされた職約を実行すべく王に海賊の掃討を要請した。張保皐は興徳王から清海大使に任ぜられると、東シナ海から海峡に及ぶ海上の治安維持をなすべく清海鎮（全羅南道莞島）を拠点に制海権を維持して新羅、日本、唐との間の貿易に従事したのである。

ところが、張保皐は経済力を高めると政治力を求めて、わが娘を新羅王室に入室させることを求めるに至って、これが拒否されると、張保皐は王室と対立し、ついには八四一年十一月に暗殺されてしまった。その後、八五一年二月にはその拠点であった清海鎮は廃止されたから、西海上の秩序は壊れて、新羅海賊が再び出没することになったのである。

この間の八四三年八月には対馬島の防人が正月以来、新

図10　８世紀・９世紀の鞠智城とその周辺

羅から毎日鼓声が響き渡って来る、と報告した。張保皐の死去とこれに続く副将の李昌珍の反乱とその平定と言う清海鎮勢力の抵抗に対応する新羅南部の混乱が大宰府に不安を呼んでいる。

また、鎮の廃止後の八五五年四月、新羅は日本に使節を派遣したが、使節のもたらした執事省からの牒の文書が、日本側の不興を買い、新羅使節は帰国させられると言う外交の摩擦があり、新羅への不安は募ることになる。

清海鎮の廃止後、西日本には新羅人の渡来が再び頻発することとなって、新羅に向けられた不安はさらに高まる。八六六年七月には、肥前の基肆郡の大領の山春永（やまのはるなが）は新羅に渡って、兵器の技術を学んで仲間とともに対馬島を奪取しようとした、と大宰府に密告されている。同年には、隠岐の国守であつた越智貞原は新羅人とともに反逆を謀ったとも誣告されていた。このため、同年十一月には能登から大宰府に至る日本海側に海防を強化し、神仏には護国を祈願している。

この対外不安は間もなく現実のものとなった。八六九年五月二十二日夜、新羅の海賊船二艘が博多湾に現れたのである。賊船は豊前から貢納される絹綿を略奪して逃亡した。この件は「往古」にも「前聞」したことのない「国威」を「損辱」した事件として永く日本側に記憶されることになった。

この新羅海賊が大宰府の外港である博多津にまで来たって貢納品を襲ったという行為から見ると、これは漂流船などではなく、組織化された新羅海賊の初例である。

同年十二月には新羅の賊船や大宰府の庁舎や門楼と兵庫に大鳥が烏合した怪異にも新羅からの「兵寇」を危惧して、神仏への祈願は高まり、また博多湾の警備を強くした。

翌八七〇年二月には、新羅に捕捉されていた対馬島の乙屎麻呂が逃げ帰り、新羅では材木を切り出

して大船を建造し、また、兵士の訓練を行っていたが、それは対馬島を討ち取るためと言う新羅の風聞を伝えてきた。

この伝聞は新羅への警戒心をさらに高めた。新羅の貿易商人であったの潤清ら三十人は、前年に豊前の絹綿を略奪した新羅の賊船の仲間であると疑われ、また大宰府管内に寄寓する新羅人も新羅が侵入して来れば、これに内通するであろうと疑われて、ともに拘束されて、九月には武蔵、上総、陸奥に配置された。同年十一月には、大宰少弐の藤原元利万呂は新羅王と内通しているとの疑いもかけられた程、大宰府における不安と動揺である。

さらに、八七三年三月には、正体不明の二艘の船が薩摩の甑島に漂着した。大宰府では、乗船する六〇人の「頭首」である崔宗佐と大陳潤は渤海国人であり、徐州平定の祝賀の為に唐に派遣されたが、海難に遭って甑島に漂着したことを把握した。だが、薩摩の国司は二人が今日のパスポートとも言える「公験」を持参せず、「年紀」も正しく書かぬことから、渤海国の使者であると言う二人の自供に不審を抱いた。二人は渤海人を騙った新羅人が日本の沿海を探るものと、疑ったのである（以上『日本三代実録』巻十三～二十三）。

入唐僧の円仁は『入唐求法巡礼行記』のなかの八三九年八月十三日の記録に、渤海の貿易船が山東半島の先端にある青山浦に停泊していたことを記録していたが、渤海の貿易船の範囲は東シナ海から拡大しつつあったのである。さらに、張保皐の死去後、九世紀後半には東シナ海を舞台とする貿易には、出身国や公私を問わない現実的な集団が形成され始めていたのである。甑島に漂着したと言う船は、貿易の寄港地を西南九州にも求めた新しいタイプの貿易船かと考えられる。（七）

このように、西日本において新羅と新羅人への警戒心が高まる中で、八九三年五月には、新羅の海賊は肥前の松浦郡を、翌閏五月には肥後の飽田郡を襲って逃亡した。翌八九四年には、新羅海賊が二・三・四・九月と頻繁に対馬島などを襲っている（『日本紀略』前篇）。この内、九月の新羅海賊は四十五艘で対馬島を襲撃したが、文室善友らが善戦して賊の三〇二人を殺害し、多数の兵器を獲得している。

この戦いで捕虜となった新羅人の賢春は、新羅では不作から飢饉が発生したから、国家財政を補充するために王の命令を受けて対馬島を襲ったと告白したが、その規模は実に船百艘と二五〇〇人であったとも言う（『扶桑略記』二十二）。確かに、これより先の八八九年、新羅では慢性的に窮乏する国家財政の補充のために賦税の取り立てを厳しくしたから、各地に反乱の起ったことが『三国史記』新羅本紀には記録されている。新羅の王命による海賊行為であったと言う賢春の告白は、捕虜の命乞いのために発した虚言ではないように思われる。

大宰府管内では新羅の流民と海賊の出没に不安感を興している。天安二年（八五八）閏二月二十四日に、肥後国では「菊池城院の兵庫、自ら鳴」り、また翌二十五日にも「又、鳴る」ことがあった（『日本文徳天皇実録』巻十）。かの鞠智城が二百年近くを経て、菊池城院として記録に現れている。この変化の背景には、百済滅亡後の対外危機に備えて築城された「武」の性格と、また隼人や南島勢力に対応する「武」とともに「威」を備えた「繕治」のこの山城の意義が、ここに来て、再び対外危機に対応する「武」の意義を強めることになる。

この年の六月二十日にも、大宰府に「肥後国の菊池城院の兵庫の鼓、自ら鳴り、同城の不動倉十一宇、火（も）ゆ」との報告があった（『日本文徳天皇実録』巻十）。兵庫の変異の報告は翌貞観元年（八五九）

正月二十一日にも「筑前国志摩郡の兵庫の鼓、自ら鳴る。庫中の弓矢に声有り外に聞こゆ」とのことが大宰府に届いた（『日本紀略』前篇十七・清和天皇）。「兵庫の鼓が自ら鳴る」とは兵士の召集であり、菊池城院と志摩郡の兵庫がともに警戒する対象とは西海に跳梁する新羅海賊の襲来のことであろう。菊池城院が大宰府に連なる軍事的施設でもあり、ここが外敵の前面になることも危惧されたのである。

貞観十七年（八七五）六月には、「大鳥、肥後国玉名郡の倉に集い、西を向きて鳴く。また、数百の鳥群、菊池郡の倉を葺く葦草を噛み抜く」ことがあった（『日本三代実録』巻二七・清和天皇）。また、元慶二年（八七八）九月七日にも「大鳥、肥後国八代郡の倉の上に集う。宇土郡の蒲智比咩神社の前の河水、赤く変すること血の如し」と言う怪異が続いた。陰陽寮はこれらの怪異は、肥後国の風水火の気が整わないものと占ったが、この肥後国の菊池城院と四郡に現れた怪異、なかでも大鳥が玉名郡倉から西を向いて鳴くことは何を予兆しているのであろうか。

元慶二年（八七八）十二月十一日には、大宰少貳の嶋田朝臣忠臣らは「新羅賊船、我国に向かう。宜しくこれに備うべし」との香椎宮の託宣を得て、刑部大輔の弘道王が伊勢神宮に冥助を祈願し、民部大輔の藤原朝臣房雄や兵部少輔の平朝臣季長が大宰府に出掛けて、香椎宮に幣を奉じている。「新羅凶賊が我隙を窺わんとす」る不安は、先の「肥後国に、大鳥集い、また河水、赤く変」した怪異に結び付けられて解釈されることになる（『日本三代実録』巻三十四・陽成天皇）。

不安な予兆は続く。元慶三年（八七九）三月十六日にも豊前国の八幡大菩薩宮にある神功皇后の前に備えた甑が九十片に破裂したことがあり、破裂する時の鳴き声は犢の細い声のようであった。また

肥後国の菊池郡城院の兵庫が自ら鳴ることがあった（『日本三代実録』巻三五・陽成天皇）。菊池郡城院の兵庫が自ら鳴ることは四度目である。

この不安の予兆は、寛平五年（八九三）閏五月には現実のものとなった。新羅の賊が肥後国飽田郡を襲って七人の宅を焼き、肥前国の松浦郡に逃げ去ることが起こったのである（『日本紀略』前篇二〇・宇多天皇）。

菊池城院の兵庫に現れた怪異（八五八年に三度、八七九年）は大宰府の西海に出没する新羅海賊の跳梁に連なる予兆として理解されたが、それは菊池城院が鞠智城の築城以来、朝鮮半島の情勢を警戒してこれに対応する「武」の性格と機能をその施設とともに継承していたからであろう。菊池城院の性格と機能のこの一面は鞠智城と菊池城院の施設構成にどのように見て取れるのであろうか。

おわりに

ここまで論者は日本古代史に精通しないながらも、朝鮮古代の政治と社会の動向に注目して、七世紀から八世紀の鞠智城、そして九世紀の菊池城院の性格を考察してきた。大宰府に連なる鞠智城は朝鮮半島の動向に対応して築城されて以来、その機能を充実してきた。七世紀末葉に半島情勢が安定すると、鞠智城は九州南部を律令体制内に編制する施策にも関係して、大宰府の軍事と外交に連なる要衝として「繕治」されたと考えられる。八世紀を経るなかで、鞠智城は軍事と外交という二つの機能を保持しながら、菊池城院となる。「城」と「院」の二つの機能をひとつの所に備えた菊池城院は大宰府が大野城と基肄城を府の東西に備えて「府」と「城」を分離していたこととは対照的である。山

城のなかに兵制とともにこれとは異なる性格の施設を備えたことから「城院」と改称されたのではなかろうか。その時代は八世紀中のことと見られるが、それは、換言すれば鞠智城が朝鮮式山城の構造と機能からなかば脱却したことを意味しよう。この「城院」の構造は発掘情報からどのように読み取れるであろうか。

【参考文献】

（一）森　公章『「白村江」以後―国家危機と東アジア外交―』（講談社選書、一九九八年六月）、亀田　修一「日韓　古代山城の比較」（『古代武器研究』第九号、古代武器研究会、二〇〇八年一月）

（二）西谷　正『魏志倭人伝の考古学』（学生社、二〇〇九年四月）

（三）小田富士雄「西日本の古代山城跡」（『九州古代文化の形成〈下巻〉歴史時代・韓国篇』学生社、一九八五年一月）、大田幸博「肥後・鞠智城」（『古代文化』第四十七巻第十一号、一九九五年十一月）、高正龍「韓国古代山城」（『古代文化』第四十七巻第十二号、一九九五年十二月）

（四）（五）永山修一『隼人と古代日本』（同成社、二〇〇九年十月）

（六）佐伯有清「九世紀の日本と朝鮮」（『日本古代の政治と社会』吉川弘文館、一九七〇年五月）

（七）拙　稿「第四章　王権と海上勢力―特に張保皐の清海鎮と海賊に関連して―」（『新羅国史の研究―東アジア史の視点から―』吉川弘文館、二〇〇二年二月）

シンポジウム　第Ⅲ部　パネルディスカッション

コーディネーター

大田　幸博（熊本県立装飾古墳館長）

パネラー

岡田　茂弘（国立歴史民俗博物館名誉館長）

佐藤　信（東京大学大学院教授）

濱田　耕策（九州大学大学院教授）

司会　お待たせいたしました。それでは、準備が整いましたので、シンポジウムに移らせていただきます。ここからは装飾古墳館　大田幸博館長に進行をバトンタッチいたします。

大田　先生方から御熱心な発表がございました。とても示唆深い内容でしたが、時間の都合上、限られた時間内で非常に無理をなさったものと恐縮したしております。そこで、言いたりなかった先生方もいらっしゃると思いますので、5分程度、追加がございましたら、お話しをいただきたいと思います。

先ずは岡田先生。先生からは、九州南部を統括していた鞠智城の役割がメインのお話しでしたが、その他に興味深い話題として「車路」の問題も取り上げていただきました。全体的に話し足りなかったところもあろうかと思いますが、特に「車路」について補足していただければ助かります。先生よろしくお願いいたします。

岡田　今、「車路」について補足を、というお話しがありましたが、その前に一つ、申し上げたいことがあります。それは、なぜ文武天皇二年、六九八年に鞠智城が、大野城、基肄城といっしょに繕い収めたのか、ということです。実は、濱田先生のお話しにも関連することで、先生からもそのお話しがありましたが、鞠智城の役割を考えるう

図1　コーディネーターの大田幸博氏

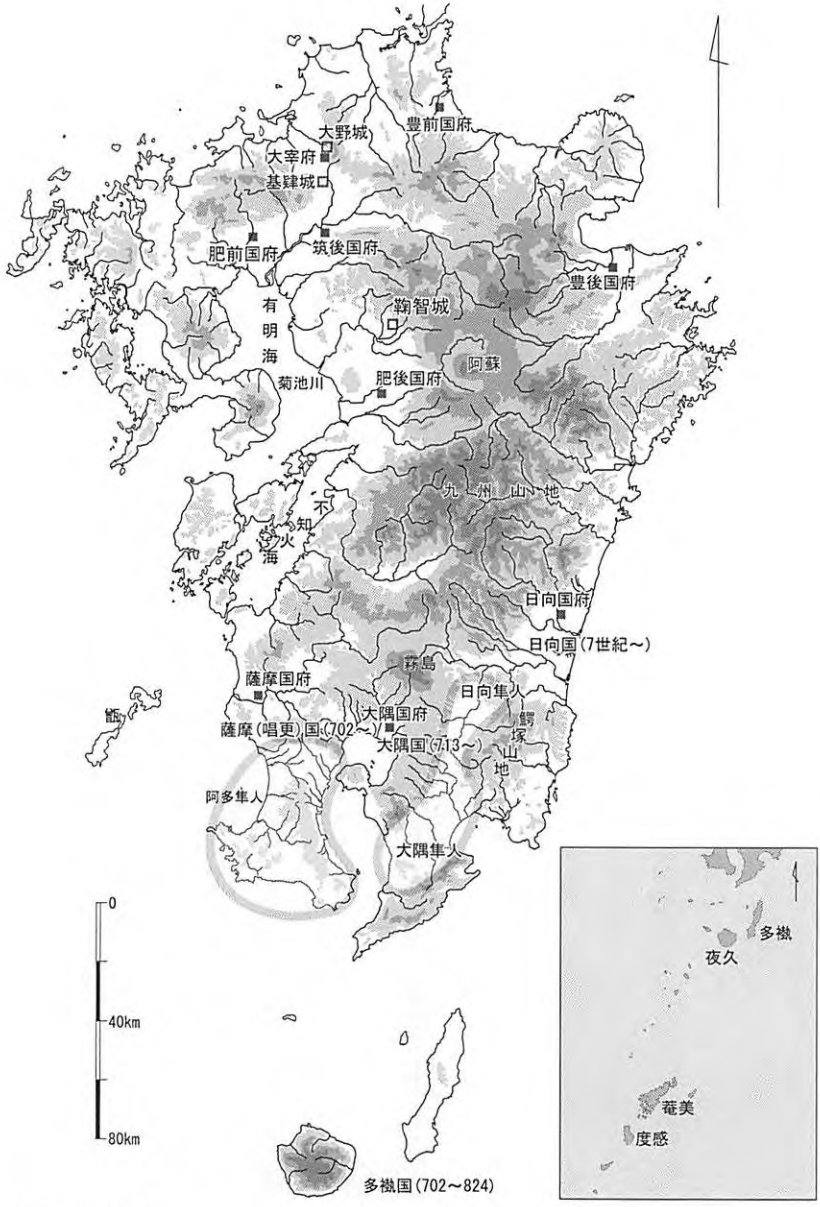

豊前国府
大野城
大宰府
基肄城
肥前国府
筑後国府
豊後国府
鞠智城
有明海
菊池川
肥後国府
阿蘇
九州山地
不知火海
日向国府
日向国(7世紀～)
薩摩国府
種子島
日向隼人
大隅国府
薩摩(唱更)国(702～)
大隅国(713～)
鰐塚山地
阿多隼人
大隅隼人
0
40km
80km
多褹国(702～824)
多褹
夜久
奄美
度感

図2　古代の西海道

えで重要な問題でもありますので、私のほうからも少し補足をさせていただきます。

鞠智城が繕治されたのは、五月二十五日のことでした。補足したい話題は、その直前、四月十三日の記録と、その二年後の文武天皇四年、七〇〇年の記録でございます。

文武天皇二年、六九八年、四月十三日に、大和朝廷は、務広弐文忌寸博士等八人を南島に派遣いたしました。これが覓国使と呼ばれる人たちです。その目的は、南島、つまり種子島や屋久島を大和朝廷に従属させるためでした。ところが、文武天皇四年、七〇〇年、六月三日、その覓国使が薩摩で妨害されるという事件が起きました。非常に興味深いのが鞠智城の修理

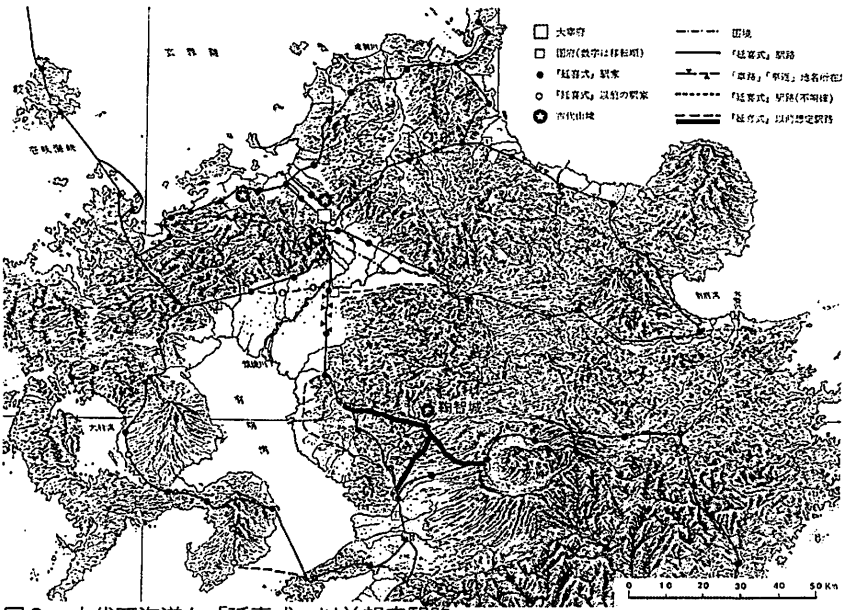


図3　古代西海道と「延喜式」以前想定駅路
（木下良 1983「西海道の古代官道について」『九州歴史資料館開館十周年記念 大宰府古文化論叢　上巻』吉川弘文館　の挿図に加筆）

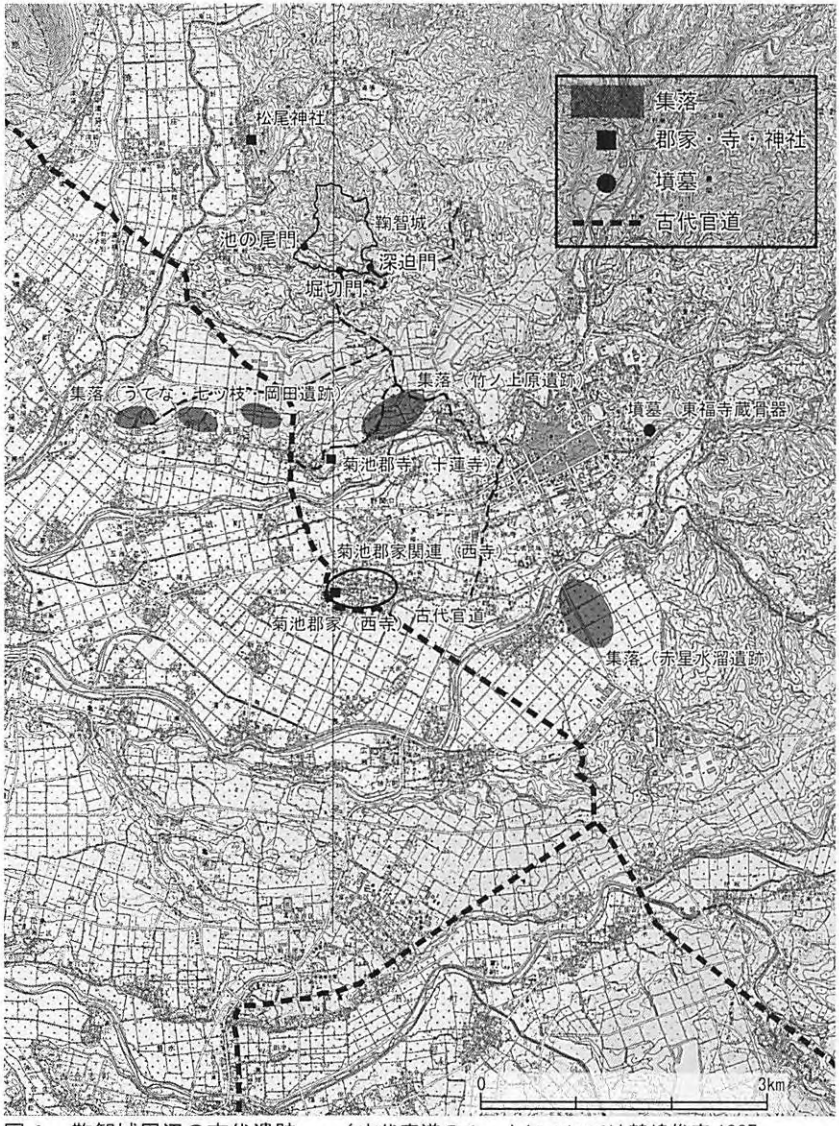


図４　鞠智城周辺の古代遺跡　　（古代官道のルートについては鶴嶋俊彦 1997「肥後国北部の古代官道」『古代交通研究』第７号　による）

が、覓国使の南島への派遣とそれが妨害された事件とほぼ同時に行われた、ということです。つまり、鞠智城の七世紀の末頃の性格を表しているという記録ではないか、というふうに考えられるわけです。これは、濱田先生もそういった趣旨のことを述べられておりますので、まさにその通りだろうと思います。

次に、笹山先生の御講演の中でもすでに触れられていたことですが、西海道の問題です。すでに皆さん御承知のことと思いますが、この西海道は、九州全体を回っていた官道でありました。延喜式には、その関係で各地の駅家が記されています。現在、この駅家を結ぶルートが西海道だ、というふうに考えられておりまして、それがどこを通っているのかという研究が歴史地理を中心として行われております。また、考古学でもたまたまそのルートに沿う遺跡で道路の痕跡が発見され、西海道との関連が取り沙汰されております。

図5　堀切門跡発掘調査状況　軸くずり孔が穿たれている門礎石が見える

ところが、肥後国では、西海道とは違う道路が地名として点々と出てくる地域があります。それが山鹿郡内や菊池郡内です。「車路」という地名ですね。読み名では、「クルマジ（車路・車地）」とか「クルマジ」が訛っての「クルマジ→クルマヂ→クルママチ（車町）」というものです。日本の古代には、もともと人間が乗る車はございませんでした。そうは言いましても、「車路」と呼んでいますから、当時、何らかの車を使っていたと考えざるを得ないわけです。ですから、当時としますと、都を走っていた牛車であるとか、荷車ということになります。この「車路」という地名を追っていきますと、それが何と鞠智城に至るわけです。それも鞠智城の南、南門に当たる鞠智城の掘切門に至っていたと考えられます。つまり、鞠智城は南を向いていたわけですね。

そこで、この「車路」の行く先をみてみたいと思います。この「車路」は、鞠智城の付近で二手に分かれていたことがすでに分かっています。一つは、南に方角を変えて、肥後国府に行く道ですね。現在の熊本市へ行く道です。もう一つは東の方に分かれて、豊後国の南部、つまり今の大分県の南部を通って日向国に至る道です。

この鞠智城が築かれ、そして繕治された頃、大隅は、まだ日向国に属していました。また、薩摩国は、当初は唱更国、ハヤヒトコクと私は読んでいるのですけれども、この唱更国とされていました。この唱更国が置かれるのは大宝二年、七〇二年のことでしたので、当然まだ無かったわけですね。そういう地域ですから、九州の南の方は、隼人の地であり、まだ倭の国に入っていないという段階だったのではないでしょうか。その段階に鞠智城が築かれ、繕治されたわけです。しかも鞠智城は、南を向いています。鞠智城と九州南部との間に何か関連を窺わせてくれて、興

味深いものがあります。そんなことで、私は、鞠智城の南にある、車路、官道との関連で考えてみたわけです。以上です。

大田　今の岡田先生のお話しでございますが、鞠智城がなぜ南を向いているか、と従来から問題点が提起されておりました。白村江の戦いでの敗戦を受けての守りのためですと、当然北を向いていなければいけない、というような話しになります。その関係上ですね、車路との関係をここ十数年来取り出されておりますけれども、いろんな新資料が出ておりまして、先生の方から、そういった方面でのお話しを伺いました。

次に、佐藤先生にお願いしたいと思います。佐藤先生は、西海岸を含めた、九州の烽のネットワーク、あるいは八世紀、あるいは九世紀の鞠智城の性格について、非常に詳しくお話しいただきました。特に八世紀の大宰府との関係、肥後国司との関係、菊池郡との関係などのお話しをしていただきました。補足がございましたら、お願いいたします。

佐藤　他の先生方のお話しも含めて考えますと、鞠智城の役割というのは、大陸・半島との関係、つまり対外的な関係、あるいは南九州に向けての関係、あるいは南島に

図6　パネラーの佐藤信氏

向けての関係と多岐に亘っていることが想定されています。それと同時に、私がお話ししましたように、律令国家の中央政府との関係ですとか、あるいは大宰府との関係ですとか、あるいは肥後国府との、国司との関係ですとか、あるいは菊池郡の郡司など、地元との関係ですとかがあったのだろうと想定できます。つまり私が言いたいのは、その鞠智城の果たした機能が単質ではなくて、時代によって重層的といいますか、複合的といいますか、幅広い機能が展開していたことがあり得るのかな、ということです。それぞれの時代で、いろんな交流関係の中で、鞠智城の歴史が展開していたのではないかということをこれから考えなくちゃいけないと強く感じております。

そこでお願いしたいのは、鞠智城の建物の変遷を具体的に整理していただきたい

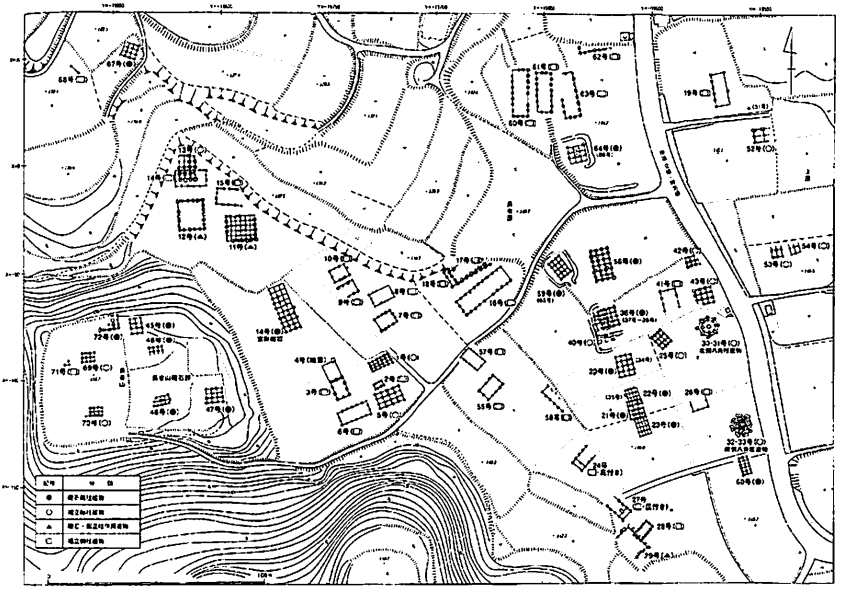


図7　長者原地区の建物検出状況

ということです。発掘調査の成果として、例えば倉庫群を大田先生は、四期に分けて考えられておられました。小形の掘立柱建物の時代から大形の掘立柱建物の時代になり、次に小形の礎石建物の時代から大形の礎石建物の時代になるというような変遷だったかと思います。つまり礎石建ちでもっとも立派な鞠智城の姿になるのは、具体的にいつの時代になってからかということです。また、最初の時期は、建物が小振りだったということになりますが、百済の技術をどういうふうに使ったのか、鞠智城の技術と百済の技術がどういう関係になるのかということです。このことは考えなくてはいけない、と強く実感しております。おそらく最初に、一番立派な鞠智城だったというイメージでは、ないのでしょうね。今日のお話しによれば、むしろ段々と立派になっていく、ということがいえるようですね。

私たちが持っている鞠智城自体のイメージと、私たちが持っている日本古代史のイメージ、あるいは律令国家のイメージというのが、当然リンクしていくと思うのですが、そのことに関して、鞠智城がどういう研究成果、調査成果を発信できるかが問題になっていくのかなあ、と感じております。

大田　今、佐藤先生から御質問等がございましたので、建物の建て替えについて簡単にお答えします。鞠智城では七十二棟の建物跡が出ておりますが、たまたまある一つの調査区で、大形掘立柱建物、それから小形の掘立柱建物、それから小形の礎石建物、そして最後に大形の礎石建物という変遷を捉えることができました。この変遷ですが、最後の大形の礎石建物は、大きな礎石でありますが、地業が非常に雑で、礎石自体が傾くとか、あるいは火災にあっているとか、あまりしっかりした

ものではなさそうです。しかも、これはあくまでもたまたまの切り合い関係でございまして、それを鞠智城全体に当てはめることはできないと考えてもおります。この他、鞠智城の七十二棟の建物後を精査しますと、もっとしっかりした大形礎石建物があります。ですから、一概に四時期がそのまま鞠智城の変遷に当てはまらないのかもしれません。

また、冒頭説明をいたしましたが、建物が建っていた所が昭和四十二年の開田事業によって地山まで削られておりました。またそこが田圃や畑として利用されておりましたので、なかなか遺構の前後関係が掴めないところもありました。なかなか難しいところもありますが、佐藤先生からそういった御質問等がございましたので、もう少し私どもの方で調べたいと思います。

さらに、佐藤先生からは、非常にりっぱな成果が出ているわけですが、情報発信ができていないというご指摘もいただきました。これまた私たちの怠慢でもございます。とにかく今一生懸命、

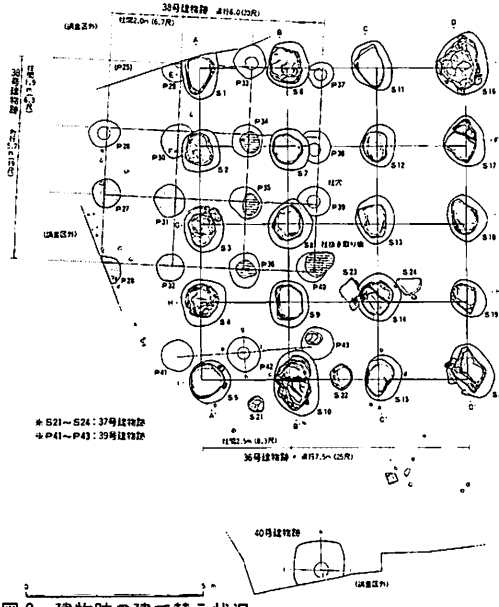


図8　建物跡の建て替え状況
36号～40号の建物跡が切り合っている。その変遷は、40号→39号→38号→37号→36号。

PRに努めたいと考えております。

それでは、濱田先生、お願いします。

濱田　先ほどの岡田先生のお話しに関連しまして、補足をさせていただきます。例えば、覓国の使者、あるいは「其度感嶋通中国、於是始矣（その度感嶋の中国に通うこと是より始まる）」という、記録にあるような大和政権に通う南島からの使節がいます。例えば、彼らの通行路にこの鞠智城が含まれていたり、あるいは肥後国の国衙や官道が彼らの通行路に当たっていたりするとすれば、それぞれの使節が都に上がって行くまでの間、日本の国の様子を見たりします。そこで彼らは、律令体制が整っていることを感じたりするかと思います。その反面、律令国家の威容といいますか、威風といいますか、そういった雰囲気を相手側に感知させるという機能が期待しているかとも思います。実は、鞠智城の豊かな建造物等々にも、そのことが言えるのかどうか、それが気になるところです。

と申しますのも、八世紀、日本から新羅国に遣わされた遣新羅使のことが思い浮かびます。当時、彼らがなかなか渡海したがらないケースがあったようです。それは、新羅が自国中心姿勢であったし、大和政権の方も自国中心主義であっ

図9　パネラーの濱田耕策氏

たということと関係しております。お互いに自国中心主義を持っている者が出会った時に、それが障害となって、外交がうまくいかないケースがあったようなのです。

遣新羅使が新羅の都に行くルートには、今の蔚山から入りまして、蔚山広域市北区の泉谷洞と慶州市外東邑毛火里の境に関門城という長城があります。この関門城は、七二二年、統一新羅が日本の侵攻に備えて築いた、万里の長城のような石城です。新羅の都、金城の二十キロほど南の地点に、東西十二キロほどの城壁が残っています。また、その石城の東側の山の上に新斗里城という大きな円形の山城があります。遣新羅使はその

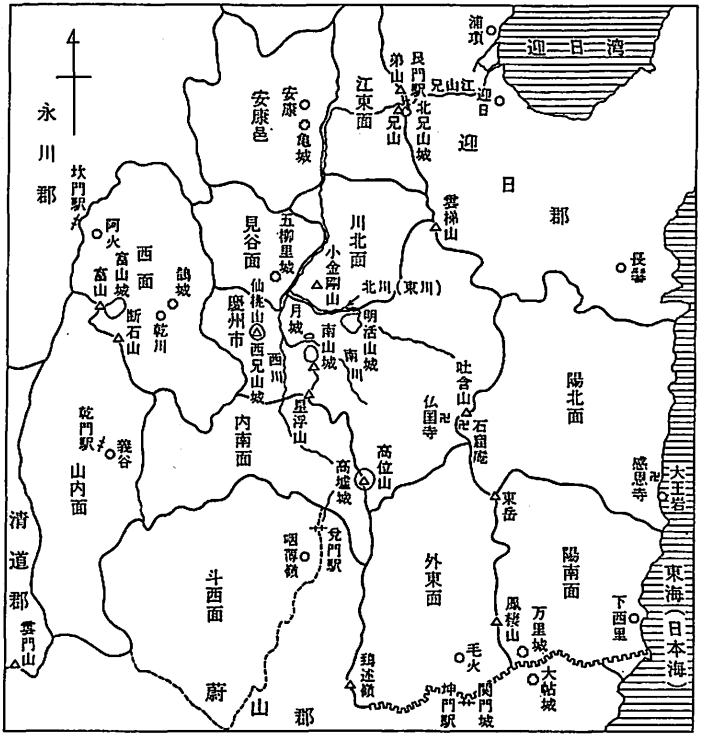


図10　新羅王都（金城）周辺の山城配置状況
（井上秀雄 1981「遺跡分布からみた新羅の城郭」『新羅と日本古代文化』吉川弘文館　第4図を転載）

関門で入国手続きを取り、そして新羅の都に入るわけです。その都に入りますと、北側に北兄山城、西側に富山城と西兄山城、東側に明活山城、南側に南山新城と、都を取り囲むように石造りの山城、石城が聳えていることが分かります。まさにそこが中国（中華）であるかのような感じを受けさせるわけです。

このように、覓国の使者、あるいは南島勢力を威武するという側面で、鞠智城の構築のあり様というのが考えられないのかですね。それがちょっと気になるところです。

もう一つは、今福岡に住んでいながら、福岡に帰ると叱られそうですが、大宰府中心に考えるということを時々止めてみても良いのではないのかな、ということです。地方中心で考えてみて、また大宰府中心に戻る、ということも大事じゃないかと、鞠智城を考えながら思った次第です。

（奈良国立文化財研究所・朝日新聞社「平城京展」所収）

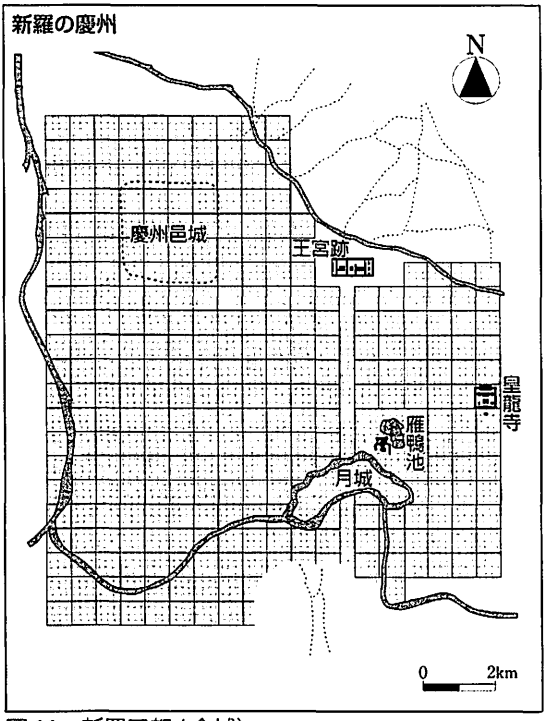


図11　新羅王都（金城）
（岡田茂弘監修 2002『復元するシリーズ② 古代の都を復元する』学習研究社　より転載）

大田　先生方とは、シンポジウムの前にいろいろと打ち合わせをしました。その中で、鞠智城は、大原則は古代山城でありますが、それが九世紀の後半まで残っていくということが話題になりました。やはり多面的な要素を時代的な変遷の中で考えなければ、説明がつかないのではないか、ということになりました。

これまで、先生方のお話しを伺ってきたわけでございます。そこで、時間が無く恐縮です、先生方に質問が来ております。

【質問一】

鞠智城は、大野城等との後方支援基地（武器・食料）としての山城なのか、それとも有明海を意識した城　なのでしょうか。肥後国府は有明海を意識して変遷したと聞いています。というものです。この件につきまして、岡田先生、いかがでしょうか。

岡田　今の御質問の中の前段の方ですね。皆さんは、大野城の性格をご存じだと思って言わなかったのですが、大野城というのは、基本的には朝鮮の山城と同じものです。つまり、敵に攻撃された時に逃げ込む所なのです。この逃げ込み城という考え方は李進熙さんが書いておられます。要するに、戦時下、敵に集落を攻撃されますと、一家を挙げてみんな山へ逃

図12　パネラーの岡田茂弘氏

げ込むわけですね。その逃げ込む所が城だという性格を持っているわけです。

大宰府の周辺には、背後に大野城があったり、南に基肄城があったり、東に宮地嶽があったりします。ところで、この宮地嶽は、新しく発見された山城でして、文献には全く出てきませんから、定義からいうと神籠石になるのでしょうか。大宰府周辺の人々は、いざ有事の際には、この三つの城に分かれて多分逃げ込んでいたのではないかと考えられます。朝鮮式山城というものは、当然、そういう性格ですから、それらの支援のために鞠智城があるということは、ちょっと考えられないのではないでしょうか。ただし、大宰府のために鞠智城が存在するということは考えられると思いますよ。

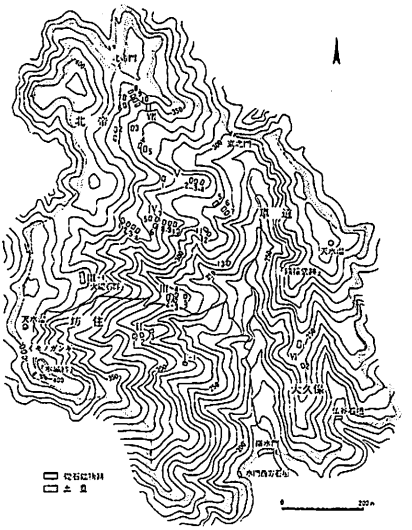
もう一つは、大野城、基肄城などでは武器倉や米倉があることは分かっているのですが、行政的な施設があったというのは今のところ分かっていません。これは調査が行き届かないから分からないという面も確かにあるとは思いますが、その一方で、そうではないという面もあるのではないかと考えております。先ほど鞠智城を紹介したＤＶＤで皆さん御覧になられたと思います。それを観ますと、実に広々とした平坦面が鞠智城にあることがお分かりになったと思います。実は、あれに匹敵するような平坦面が大野城にも基肄城にもございません。非常に深い谷が中を通っているわけで、その出口のところに水門や城壁があるわけです。ですから山の斜面に狭い平坦面をこしらえて、そこに倉が並んでいる、というのが大野城や基肄城の内部構造なのです。

これに対して鞠智城では、広々とした所に役所的な掘立柱建物が並んでいるわけです。これは一体何のためだ、と申しますと、私は考古学者ですから、関連する他の遺跡から考えることにし

ています。まあそれで考えようとしますが、残念ながら九州の古代山城の中には、類例がありません。そこで、その類例を敢えて求めたのが東北の古代城柵だったわけです。そういう発想から始めたわけです。

東北の古代城柵について、時間の関係で説明を外しましたので、ここで少し説明をさせていただきたいと思います。例えば多賀城というの

鞠智城は、大野城や基肄城とは異なって中央部に広い平坦地（長者原）がある。この平坦地一帯から72棟の建物跡が検出されている。



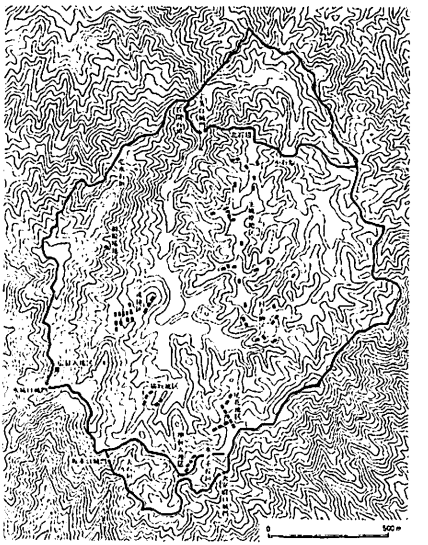


図13　鞠智城（上）・基肄城（下左）・大野城（下右）

が宮城県にあります。これは陸奥国の国府の所在地です。それから九世紀になりますが、胆沢城というのが岩手県にあります。ここは、坂上田村麻呂が築いた城で、これは鎮守府が入っていた城です。つまり、両方とも行政機関が入る城です。この特徴は、秋田城も同じでありまして、秋田城もある時期には、出羽国の国府が入っていました。東北では、こういう行政機関の入る城が築かれていたのです。

ところで、九州の古代山城の中では、鞠智城がどうも行政機関的な施設があるらしいのです。まだ半分しか掘っていませんので、分からないのですが、おそらく全部掘ればこのことを実証できると思います。ただし、後の半分は農地の中に入っていますし、ど真ん中を道路が通っ

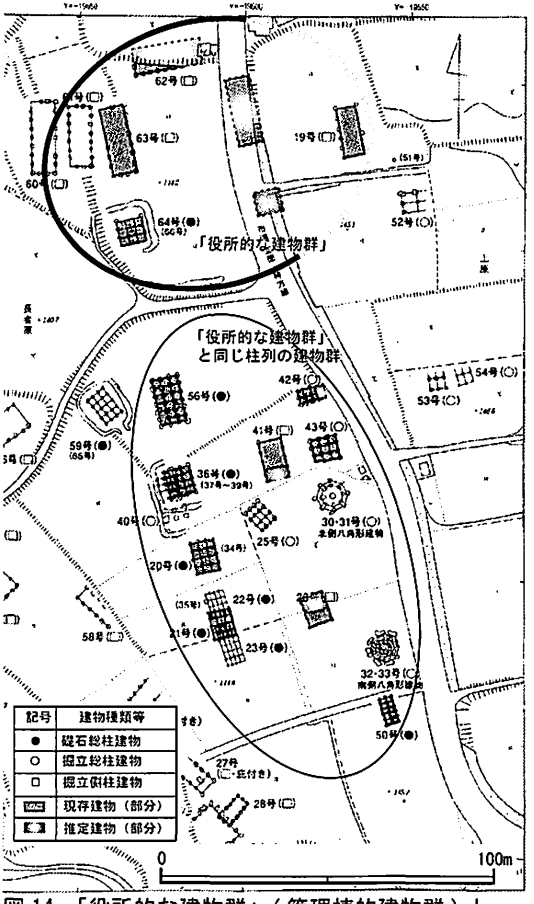


図 14 「役所的な建物群」（管理棟的建物群）とその周辺の建物群

ていますので、残念ながらちょっと掘りようがないらしいのですが。

このようなことから考えますと、やっぱり九州の古代山城の中だけで鞠智城の役割を考えたのでは、解決のできない問題があるのではないか、と思うわけです。

そこで、「鞠智城に行政機関的な施設が入っていたのは、何のためだ」というのが問題になるわけです。それを解決するものに、幾つかの検討課題がございます。一つは文武天皇二年の、先ほど申し上げたような南島との関係がございます。またもう一つは南島との間に実は隼人がいまして、覓国使が南島に行くのを妨害している隼人との関係がございます。大宝律令ができた直後に薩摩で反乱がおこりました。大和朝廷はそれを制圧するなかで、後の薩摩国である唱更国を設置しました。その時、九州南部の、政治的な、律令国家の施策の拠点になったのが鞠智城だったのではないだろうか、と考えているわけです。

東北では、多賀城の北側に胆沢城が築かれますと、それまで多賀城にあった鎮守府が胆沢城に移されました。なぜ移されたかと申しますと、それまで蝦夷の土地であった所を本格的に開発し、律令国家体制に組み入れるためです。律令国家体制に組み入れるための行政的な中枢機関が胆沢城に移された訳ですね。

それと同じようなことが九州でもあったのではないでしょうか。九州南部を行政的に治めるのは、おそらく大宰府が中心だったはずですが、その出先機関である鞠智城が役割の大きな部分を担っていたのではないか、と考えているわけです。

大田　ありがとうございました。考古学的な立場からの岡田先生のお話しでした。

濱田先生、朝鮮古代史の御専門の立場で、この件に関していかがでしょうか。

濱田　私は、鞠智城の役割を考える場合、まず朝鮮式山城の機能を考える必要があると考えています。私も若い頃はそう思っていたのですが、日本では、朝鮮式山城は逃げ城とよく言われます。しかし、それだけでは物足りないところがあります。最近、私は、敵を引き付け攻撃する、要は敵を引き付けるための山城というふうに考えるようになりました。もちろん一旦逃げるのは逃げますが、敵がやってきた後に有利な立場で戦況を展開するために、上がってきた敵に対して攻撃を仕掛けるのではないかと考えております。例えば、城壁の石を上から落としたのではなかろうか、と思うくらいです。敵を引き付けて、そして反撃する、そういう性格だろうと思っています。ただし、鞠智城は、それには全く当てはまらないようですね。

岡田先生のお話は、さすが多賀城に長く勤められて、東北の城柵の知識といいましょうか、現場を踏まれた上での見解で、「なるほどな」と思いながら、先生のご説明を聞いておりました。

大田　それでは、佐藤先生、七世紀の大和政権と地域首長との関係について質問が来ております。

【質問二】

大和政権は、九州・関東などの地方首長に対して、海外出兵を指令していたのか、それとも地方首長の協力を得るというスタンスだったのか。

というものです。佐藤先生、いかがでしょうか。

佐藤　六世紀には、地方豪族は国造というかたちで掌握されていました。もともと倭の大王と地方豪族との間には、同盟的な関係があったと考えられます。それがしだいに支配・従属の関係に

なっていき、最終的には律令制の下で官僚制的な上下関係で統合された、と考えられます。このご質問に答えるためには、そういう変遷の中のどの段階に白村江の戦いが位置付けられるか、ということが問題になります。

例えば東国の地方豪族というのは、伝統的に大王と結び付いて、大王の軍事的な基盤を形成した勢力だったといわれております。ですから、東国の地方豪族の場合、動員を受けて参加するということもあったと思います。

一方、白村江の戦いの前の状況を記す数少ない史料の一つに、『三善清行意見封事十二箇条』があります。これは、延喜十四年、九一四年に、従四位上行式部大輔臣三善清行が、醍醐天皇に提出した政治意見書です。その中に備中国の風土記を引き合いに出して、斉明天皇が今の岡山県、備中の下道郡にしばらく滞在したことが記されています。そこでは、「天皇詔を下して試みに此郷の軍士を徴す。即ち勝兵、二万人を得たり。天

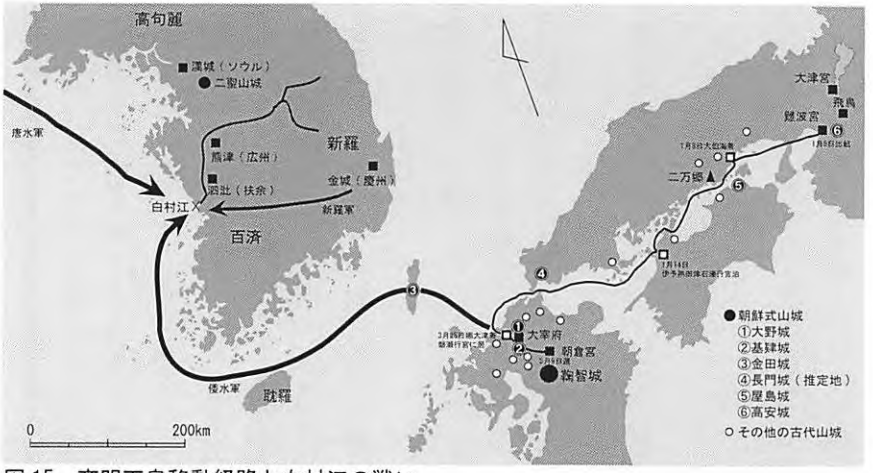


図15　斉明天皇移動経路と白村江の戦い

皇大いに悦び、此の邑を名づけて二万郷といふ。」というように、近辺の兵士を動員するということをやっていたようで、一つの村から二万人の兵士が動員できたので、「二万（邇麻）郷」という郷の名前ができたということが記されています。

その後、伊予国の、今の道後温泉付近と考えられます、熟田津に三ヶ月か四ヶ月か滞在しています。私は、おそらくその間に伊予の地方豪族を初めとした、四国の地方豪族を動員したのだろうと思われます。実際、伊予国の風速郡の物部薬という豪族が参加した記録が『日本書紀』にあります。それから慶雲四年、七〇七年に讃岐国の那賀郡の錦部刀良が抑留先の唐から四十四年ぶりに帰還した、という記録が『続日本紀』にありますように、讃岐の地方豪族も参戦したことが分かります。

おそらくその参戦の仕方については、筑紫国

図16　パネルディスカッションの一場面

の上陽咩郡の大伴部博麻の記録からある程度類推ができます。その中に筑紫君薩夜麻という、君という姓を持つ、筑紫君磐井の末裔に当たる有力な地方豪族の名前が見られます。そんな有力な地方豪族の配下で大伴部博麻のような人たちが参戦していることが窺えるのです。つまり、百済復興に向けて参戦した倭の軍勢は、実体としては地方の豪族の軍を束ねたものだったということが言えそうなのです。

要するに、大王との従属的な関係で参戦した場合もあったでしょうし、動員されて参戦した場合も多かったのではないのかなと思います。

実は、これが倭の敗北の一因だったのかもしれません。唐の軍勢は、律令軍制の下で整然と秩序付けられていました。今風にいえば、師団の下に連隊があって、大隊があって、中

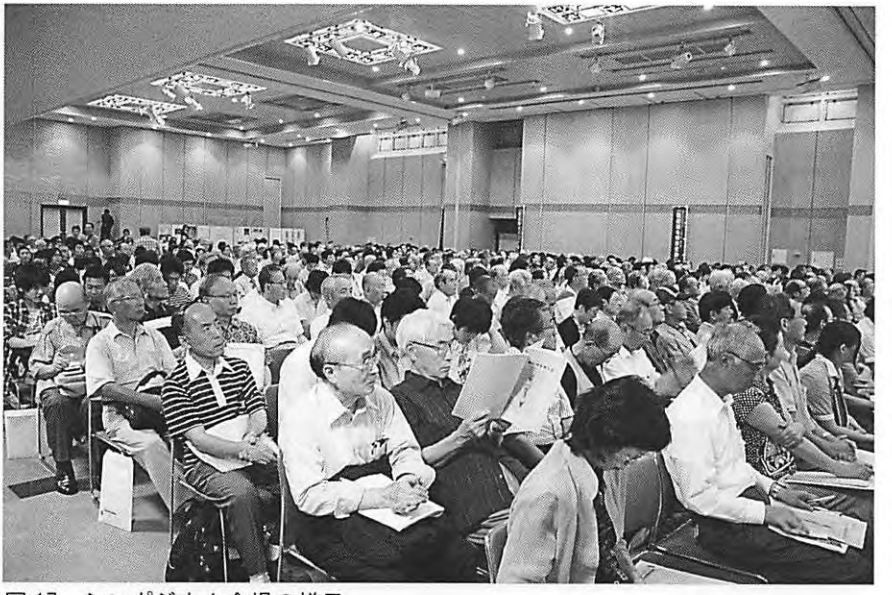


図17　シンポジウム会場の様子

隊があって、小隊があるというような、指揮命令系統がはっきりした組織でした。こうした整然とした軍勢に、「我先に進んでいけばどうにかなるだろう」みたいに猪突猛進で突っ走った寄せ集め軍隊では、最初から敗北がみえていたのではないか、という気がしなくもありません。

白村江の戦いの敗戦から日本列島の各地に戻ってきた、そんな地方豪族は、そのことを身にしみて分かったのかもしれません。そんな彼らの体験が、中央集権的な国家体制を築く上で活きてきたのではないでしょうか。律令制的な官僚制を日本列島で実現するに当たって、白村江の戦いから帰還した地方豪族は、大きな影響を与えただろうと考えております。

大田　ありがとうございました。白村江の戦いから戻ってきてからの地方豪族の働きが中央集権的な国家体制の成り立ちに繋がっていったのではないか、という非常に興味あるお話しでございました。もっともっと先生方にお話しを伺いたいのですが、時間ももうあと残り僅かとなりました。最後に、先生方から鞠智城の魅力と申しますか、少しアピールをしていただきたいと思います。岡田先生、よろしくお願いいたします。

岡田　すでに私の発表の中でお話しをしたわけですが、すぐ直前に濱田先生から朝鮮の山城というのは、逃げ込みだけではないといったお話しがありました。早々と修正をしなければいけないかもしれませんね。

大野城も基肄城も、どちらも国の特別史跡になっております。今までは鞠智城は、すでに特別史跡になっている大野城や基肄城と同じだ、同じだということを盛んに言ってきました。しかし考えてみますと、同じでない部分があるわけです。同じでない部分こそ、この鞠智城の特性だと

いうふうに、私は今日いろいろと申し上げたわけです。特性の一つは南を向いているということであります。南を向くための、つまり大宰府が南を経営するための拠点として、鞠智城が造られたと考えられるわけです。しかも、二百年の間、城が維持されています。

最初は、大宰府防衛のためだったかもしれません。それが七世紀の末には、違った意味を持ってきたのではないかと思われます。文武二年、南島の経営が必要な時に、鞠智城が修理されたということは、もうすでに変質していたからだろうと考えられます。さらに大隅国や、後の薩摩国である唱更国が作られる段階では、さらに変わった可能性があります。大伴旅人が大隅の隼人の反乱を制圧した時の記録には、残念ながら鞠智城はまったく出てきませんが、おそらく鞠智城を経由していたと私は考えているわけです。そういう点で、単なる逃げ込み城とは違う要素を鞠智城は持っていた、と考えたわけです。今こそ、その研究をすべきだろうと思います。

と同時に、「車路」といわれている道路跡の発掘は、熊本県では全く行われていないですね。やはり鞠智城の中だけ掘っているだけでは分からないわけです。鞠智城に至る道路の痕跡がいつまであったのか、いつ頃に無くなったのか、というようなことが、道路跡を発掘すれば分かってきます。鞠智城の性格を考える上では、これが一つの大きな要素になるだろう、と思います。また、鞠智城を経由する道路を考えますと、後の延喜式の官道、南北に走る官道はまだ無かったはずです。ですから、肥後国府から大宰府に行くためには、鞠智城を経由しなければなりません。そういうことも考えて、熊本県内の古代をぜひ研究していただきたいと思います。その手掛かりが実は鞠智城にあるということ、これが魅力だと申し上げたいと思います。

大田　ありがとうございました。大野城や基肄城と同じでないところが鞠智城の特性であるということでした。また、「車路」を調査しなさい、という先輩としての厳しい命令がございました。頑張ります。

大田　佐藤先生、お願いいたします。

佐藤　今の岡田先生と同じようなことになってしまうかもしれませんが、コメントさせていただきたいと思います。

鞠智城の性格、あるいは構造自身もおそらく性格の違いとともに変わっていった面があるのだろうと思います。鞠智城の対外的な関係、あるいは南九州との関係を初めとして、鞠智城が果たした機能というものが重層的、複合的にあったと思えます。その中のどれが一番重要な機能になったかということになるわけですが、それは時代と共に変遷した可能性があります。このことが推定されるというのも、私自身としては面白いと思いました。それは、鞠智城が果たした機能の重層性、複合性が、単に鞠智城だけの歴史ではなくて、日本列島の歴史全体と密接に係わっている、と思えるからです。また、律令国家の形成の歴史やその後の歴史とも密接に結び付いているということが、鞠智城の機能の重層性や複合性の研究が進めば、さらに明らかになってくるだろう、と思えるからです。

私は先ほどちょっと間違えて、「小形の掘立柱建物の時代から大形の掘立柱建物の時代になって、小形の礎石建物の時代から大形の礎石建物の時代になる」というようなことを申しました。これは間違いで、最初に一番大きな掘立柱建物で、その次が小さな掘立柱建物で、そして小さな礎石

建ての建物の時期から大きな礎石建ての建物という変遷が正しいということですね。その中で大田先生からは、ただ大きいからといって、構造的に立派であるとは限らない、というお話しがありました。

そこで知りたいことがあります。例えば、白村江の戦いの敗戦直後ぐらいに造られて、六九八年に大宰府をして修理させたのは、どの時期の建物跡に当たるのか、ということです。また、「不動倉十一宇火。」という、不動倉が十一棟焼けたという八五八年の記事が『日本文徳天皇実録』にありますね。その焼けたのは、どの時期の建物なのか、ということも知りたいですね。それぞれの数少ない文献で分かる時期と、考古学的な成果を付き合わせていけば、今先ほど私が面白いと思った鞠智城の変遷の中に、建物の変遷が具体的に位置付けられるだろう、と思います。そうしますと、さらにその歴史像というものが明らかになっていくのではないのかな、と思います。

図18　鞠智城跡で採集される炭化米

それから、私ども日本史、古代史だけではなくて、考古学の先生もおられますし、朝鮮史の先生もおられます。それから今日お話しのあった歴史地理学の、古代道路の研究の方もいらっしゃいます。金銅仏が、菩薩立像が出てくれば、美術史の研究対象でもあります。ということで、総

合的な研究対象として鞠智城を位置づけられるのではないでしょうか。私がおそらく地元の人間であったならば、「鞠智城」学というような言葉で表現するかもしれません。そんな鞠智城は総合的な研究対象に相応しい古代山城である、と私は言えるのではないかと思っております。

大田　佐藤先生、ちょっと言葉足らずで申し訳ございました。ただ大きいからといって、構造的に立派であるとは限らない、と申しましたのは、最後の大形礎石建物を引き合いに出したものでした。第Ⅰ期の大形掘立柱建物っていうのは、しっかりした建物だというふうに認識をしております。すみませんでした。

佐藤　はいはい。

大田　私は、『続日本紀』に初めて出てきま

図19　百済系菩薩立像の出土状況

す修理が非常に大規模な改築である、という認識をずっと持っておりました。けれども、それがどうも修理ということじゃないのではないか、というふうなことも、発掘の資料整理の中では出てきております。本当に佐藤先生には、いろいろ今後の課題もたくさん頂きましたので、頑張りたいと思います。

それから、最後に濱田先生、笹山先生もお書きになっています、九世紀の新羅との関係とか、海賊関係とかありましたね。それを含めて、先生の鞠智城に対する思いというのをお願いいたします。

濱田　確かに、鞠智城は、大野城、金田城、基肄城に比べても、まだ特別史跡になってないというのはちょっと不思議に思います。基肄城は、ほとんど調査は進んでいないと思います。それに比べると、鞠智城の調査の意義ははるかに大きいと思います。

佐藤先生、岡田先生と重なりますが、鞠智城の始まりはやはり百済の白村江の戦い以後の防衛体制だったと思います。この点は、大野城、金田城、基肄城と同じだろうと思います。そして、他の城と決定的に違うのは、二百年間も活用されてきた、という点だろうと思います。生まれは百済式、百済人による大宰府防衛網の中の一環として造られたわけですが、やはり南方勢力のこともあり、あるいは九州の官道との関係もあって律令体制下の地方組織として朝鮮式山城が変化しつつ活用されたのではないでしょうか。鞠智城が二百年間の歴史を持っているというのは、他のものと引けを取らないというか、それ以上のものだということを教えてくれているように感じます。

最後に、私が以前お話しした話題を、ここで披露させていただきたいと思います。「鞠智」というのは、初出の『続日本紀』の古訓では「くくち」と訓でいますが、百済語音では、おそらく韓国語音では「Kukchi」（クックチ）ですが、百済人の名に由来する名ではないか、と思っております。これを聞いていた韓国の方が「クックチ」というのは「国の地」、「我らの土地」だと、そういう意味だと提案しました。亡命者たちがここへやってきて、そしてここに安住の地を設けたのではないか、ということです。「国の地」、これも発音は、「クックチ」なのです。しかし、古代において、そういう表現はしないだろうと思います。「智」は新羅や百済では人名の末尾に付ける文字です。この件は「クックチ」の由来としてもう少し追求してみたいと考えております。

大田　時間が参りました。笹山先生、岡田先生、

図20　閉会

佐藤先生、濱田先生、ありがとうございました。また、今日はたくさん多くの方に御来場いただきましてありがとうございました。これで、鞠智城の知名度も上がったかと思います。今後ともよろしくお願いいたします。

関係資料集

一　古代山城関係史料

二　鞠智城関係年表

三　鞠智城関連図表集

古代山城関係史料・鞠智城関係年表凡例

古代山城関係史料

（一）古代山城に関する主要な文献史料を年代順に載せ、番号を付した。

（二）各項目にはその趣旨を示す綱文と、史料の原点とを載せた。

（三）史料の原文は、『日本書紀』については日本古典文学大系（岩波書店）、『続日本紀』については新日本古典文学大系（同）、『日本文徳天皇実録』『日本三代実録』『類聚三代格』については新訂増補国史大系（吉川弘文館）にそれぞれ拠った。

（四）細字・細字双行の箇所は＾　＞で示した。

（五）句読点・返り点は編者の判断によって付した。

鞠智城関係年表

（一）本年表は六世紀から十世紀初頭まで、鞠智城など古代山城に関する事項を中心に、古代西海道の軍事や東アジアの情勢に関する事項について作製した。

（二）史料名については略称を用いた。主な史料の略称は、以下の通りである。

紀（日本書紀）　続紀（続日本紀）　後紀（日本後紀）　続後紀（続日本後紀）　文実（日本文徳天皇実録）　三実（日本三代実録）　類史（類聚国史）　紀略（日本紀略）　三代格（類聚三代格）　東征伝（唐大和上東征伝）

一　古代山城関係史料

一　対馬・壱岐・筑紫などに防人と烽を置き、筑紫に水城を築く。

（日本書紀天智三（六六四）年条）「是歳。於対馬嶋・壱岐嶋・筑紫国等、置防與烽。又於筑紫築大堤貯水。名水城。」

二　長門に城を築かせ、筑紫に大野城・基肄城を築かせる。

（日本書紀天智天皇四（六六四）年条）「秋八月。遣達率答㶱・火十本・春初於長門国、遣達率憶禮福留・達率四比福夫於筑紫国、築大野及椽二城。」

三　倭国に高安城、讃岐に屋島城、対馬に金田城を築く。

（日本書紀天智六（六六七）年十一月条）「是月。築倭国高安城・讃吉国山田郡屋嶋城・對馬国金田城。」

四　高安城を修理し、田税を収める。

（日本書紀天智八（六六九）年八月条）「己酉（三日）。天皇登高安嶺。議欲修城。仍恤民疲、止而不作。時人感而歎曰。寔乃仁愛之徳、不亦寛乎云々。」

（同是冬条）「是冬。修高安城、収畿内之田税。」

五　壬申の乱。筑紫大宰栗隈王、近江朝廷の発兵命令を拒否。

（日本書紀天武元（六七二）年六月条）「（上略）（佐伯連）男、至筑紫。時栗隈王、承符対曰。筑紫国者、元戍辺賊之難也。其峻城深隍、臨海守者、豈爲内賊耶。今畏命而発軍、即国空矣。若不意之外、有倉卒之事、傾社稷傾之。然後雖百殺臣、何益焉。豈敢背徳耶。輒不動兵者。其是縁也。」

六　壬申の乱。高安城をめぐる攻防。

（日本書紀天武元（六七二）年七月条）「是日。坂本臣財等、次于平石野。時聞近江軍在高安城而登之。乃近江軍、知財等来。以悉焚秋税倉、皆散亡。仍宿城中。会明。臨見西方、自大津・丹比両道、軍衆多至。顕見旗幟。有人曰。近江將壱伎史韓國之師也。財等自高安城降以渡衛我河、与韓国戰于河西。財等衆少不能距。先是、遣紀臣大音、令守懼坂道。於是。財等退懼坂、而居大音之營。（下略）」

七　天武天皇、高安城に行幸。

（日本書紀天武四（六七五）年二月条）「丁酉（二十三日）。天皇幸於高安城。」

八　石上麻呂らに筑紫の新城を監察させる。

（日本書紀持統三（六八九）年九月条）「己丑（十日）。遣直広参石上朝臣麻呂・直広肆石川朝臣虫

名等於筑紫、給送位記、且監新城。」

九　持統天皇、高安城に行幸。

（日本書紀持統三（六八九）年十月条）「庚申（十一日）。天皇幸高安城。」

一〇　大宰府に大野・基肄・鞠智の三城を修理させる。

（続日本紀文武二（六九八）年五月条）「甲申（二十五日）。令大宰府繕治大野・基肄・鞠智三城。」

一一　高安城を修理させる。

（続日本紀文武二（六九八）年八月条）「丁未（二十日）。修理高安城。〈天智天皇五年築城也。〉

一二　高安城を修理させる。

（続日本紀文武三（六九九）年九月条）「丙寅（十五日）。修理高安城。」

一三　大宰府に三野城・稲積城を修理させる。

（続日本紀文武三（六九九）年十二月条）「甲申（四日）。令大宰府修三野・稲積二城。」

一四　高安城を廃止する。

（続日本紀大宝元（七〇一）年八月条）丙寅（二十六日）。廃高安城。其舎屋・雑儲物移貯于大倭・河内二国。」

一五　河内国高安烽を廃し、同国高見烽・大倭国春日烽を置く。

（続日本紀和銅五（七一二）年正月条）壬辰（二十三日）。廃河内国高安烽、始置高見烽。及大倭国春日烽。以通平城也。

一六　元明天皇、高安城に行幸。

（続日本紀和銅五（七一二）年八月条）「庚申（二十三日）。行幸高安城。」

一七　備後国の茨城・常城を停める。

（続日本紀養老三（七一九）年十二月条）「戊戌（十五日）。停備後国安那郡茨城、葦田郡常城。」

一八　大宰大弐吉備真備に怡土城を築かせる。

（続日本紀天平勝宝八（七五六）年六月条）「甲辰（二十二日）。始築怡土城。令大宰大弐吉備朝臣真備専当其事焉。」

一九　大宰府管内の防人を築城に使役することを認める。

（続日本紀天平宝字三（七五九）年三月条）「庚寅（二十四）。大宰府言。府官所見、方有不安者四。（中略）管内防人、一停作城、勤赴武芸、習其戦陳。而大弐吉備朝臣真備論曰。且耕且戦、古人称善。乞五十日教習而十日役于築城。所請雖可行、府僚或不同。不安三也。（中略）勅。（中略）管内防人十日役者、依真備之議（下略）。」

二〇　怡土城築造・水城修理の専知官を置く。

（続日本紀天平神護元（七六四）年三月条）「辛丑（十日）。（中略）大宰大弐従四位下佐伯今毛人為築怡土城専知官、少弐従五位下采女朝臣浄庭為修理水城専知官。」

二一　筑前国怡土城成る。

（続日本紀神護景雲二（七六八）年二月条）「癸卯（二十八日）。筑前国怡土城成。」

二二　大宰府管内の兵士を廃して選士一七二〇人・衛卒二〇〇人を置き、兵士に代えて衛卒を大野城の修理に当たらせる。

（類聚三代格巻十八天長三（八二六）年十一月三日太政官符）

「太政官

応廃兵士置選士衛卒事

選士一千七百廿人〈分為四番。番別役卅日。年役惣九十日。〉

府四百人
九国二嶋一千三百廿人
（中略）
衛卒二百人
右同前奏状偁。此府者九国二嶋之所輻輳。夷民往来、盗賊無時。追捕拷涼、可有其備。加以兵馬廿疋飼丁・草丁、貢上染物所・作紙所・大野城修理等、旧例皆以兵士充。今商量。置此二百人充件雑役、以年相替、免調庸、及給粮塩・仕丁、一同仕丁。
以前正二位行中納言兼右近衛大将春宮大夫良岑朝臣安世宣。奉　勅。依奏廃置（中略）。
天長三年十一月三日」

二三　肥後国菊池城院の兵庫の鼓鳴動。不動倉に火災。
（日本文徳天皇実録天安二（八五八）年閏二月条）「丙辰（二十四日）。肥後国言。菊池城院兵庫自鳴。丁巳（二十五日）。又鳴。」
（同六月条）「己酉（二十日）。（中略）大宰府言。去五月一日。大風暴雨。官舎悉破、青苗朽失。九国二嶋尽被損傷。又肥後國菊池城院兵庫鼓自鳴。同城不動倉十一宇火。」

二四　大野城の器仗を大宰府府庫の器仗に準じて検定させる。
（類聚三代格巻十八貞観十二（八七〇）年五月二日太政官符）

「太政官
応交替検定府庫器仗事
右参議従四位上行大弐藤原朝臣冬緒起請偁。府庫器仗、依延暦年中官符旨、永為不動。尓後雖年料修理頗有其数、而年代久遠、損壊不少。加以、甲冑等時有盗失。既為不動、未得輒開。因、啻加検封、不得計知。望請。使権少弐従五位上坂上大宿禰瀧守殊為朝使、依旧検定、修理損物者。乃検太政官延暦十八年十月二日符応交替分付条云。件器仗、宜割元日威儀料、安置別倉、毎年充用。自余兵為不動。但破損者、須修理。宜一任之内、四度料置一少倉、限内修了。返納之事、申官待報符。不得寄言不動、致有破損者。右大臣宣。奉勅、元日威儀料安置別倉、毎年充用、自余兵為不動事、一依先符。但雖不動、理須附領。故先符云。不得寄言不動、致有破損者。而時有盗失、未得輒開。啻加検封、無由計知。可謂先任吏等不熱符旨之所致也。宜前後之司交替検定、破損之物随即修理。又修理年料須前司修理之物。後司交替之次、便即検納。新司応修之料、細選無損之物、同以下充。立為恒例、不労言上。大野器仗、亦宜准此。
貞観十二年五月二日」

二五　烏、肥後国菊池郡倉舎の葺草を噉み抜く。
（日本三代実録貞観十七（八七五）年六月条）「二十日辛未。大宰府言。大鳥二集肥後国玉名郡倉上。向西鳴。群烏数百。噉抜菊池郡倉舎葺草。」

二六　筑前国大野城衛卒四十人の粮米を城庫に納めさせる。

（類聚三代格巻十八貞観十八（八七六）年三月十三日太政官符）

「太政官

応大野城衛卒粮米依旧納城庫事

右参議権帥従三位在原朝臣行平起請偁。被太政官貞観十二年二月廿三日符偁。参議従四位上行大弐藤原朝臣冬緒起請偁。除五使料之外、庸米并雑米総納税庫、毎月下行。若非有判行輒以下用、監当之官準法科罪者。官符之旨固有冝然。但至干件城、城辺人居、或屋舎頽毀、或人跡断絶。仍問城司等、申云。此城衛卒卌人、粮米毎月廿四斛。元来納城庫。尒時城庫辺百姓等、逐往還之使、求売買之利。従納税庫以来、人衆無到。売買失術、百姓逃散、惣而由此者。夫守城在人、聚人在食。望請。件粮米特納城庫者。右大臣宣。奉　勅依請。

貞観十八年三月十三日」

二七　肥後国菊池郡城院の兵庫の戸、鳴動。

（日本三代実録元慶三（八七九）年三月条）「十六日丙午。（中略）又肥後国菊池郡城院兵庫戸、自鳴。」

二　鞠智城関係年表

年	代	出来事
五二七	継体二一	磐井の乱が起きる。筑紫国造磐井、新羅と通じ、任那に赴こうとする近江毛野臣の軍を筑・火・豊三国に拠って阻止する（紀）。
五二八	二二	磐井の乱が鎮圧される。磐井の子葛子、糟屋屯倉を朝廷に献る（紀）。
五三五	安閑　二	五月　諸国に屯倉を置く。火国に春日部屯倉を設置（紀）。
五三六	宣化　元	五月　官家を那津に建て、筑紫・肥・豊三国の屯倉の稲穀を集める（紀）。
五五六	欽明一七	百済王子恵の帰国にあたり、筑紫国の軍船に護衛させる。筑紫火君に勇士千人を率いて弥氏に送らせる（紀）。
五八三	敏達一二	葦北国造の子日羅、任那復興のため百済より帰国。後に百済使に暗殺される（紀）。
五八七	用明　二	七月　蘇我馬子ら、物部守屋を滅ぼす（紀）。
五九一	崇峻　四	十一月　紀男麻呂らを大将軍とし、二万余の軍を筑紫に進める（紀）。
六〇〇	推古　八	境部臣を大将軍とし、万余の兵を率い新羅を撃たせる（紀）。
六〇二	一〇	二月　来目皇子を将軍とし、二万五千の軍を率い新羅を撃たせる。六月　皇子の病により征討を果たさず（紀）。
六〇三	一一	当麻皇子を将軍として新羅を打たせるも、妻の死により目的を果たさず（紀）。
六〇七	一五	七月　小野妹子らを隋に遣わす（紀）。
六〇八	一六	四月　妹子、隋使裴世清とともに帰国（紀）。
六〇九	一七	四月　百済僧道欣ら八五人、肥後国葦北津に漂着（紀）。
六一八	二六	隋滅び、唐起こる。

年	代	出来事
六三〇	舒明 二	八月　犬上御田鍬らを唐に遣わす（紀）。
六三二	四	八月　犬上御田鍬ら帰朝。唐使高表仁来日（紀・新唐書）。
六四五	皇極 四	六月　中大兄皇子・中臣鎌足ら、蘇我蝦夷・入鹿を倒し政権を握る（紀）。
六四六	大化 二	正月、改新の詔を発する（紀）。
六五三	白雉 四	五月　吉士長丹・高田根麻呂らを唐に遣わす（紀）。
六五四	五	二月　高向玄理らを唐に遣わす（紀）。
六六〇	斉明 六	七月　唐、百済を滅ぼす（三国史記）。十月　朝廷、百済遺臣の救援を決定（紀）。
六六一	七	正月　天皇、難波を発つ（紀）。三月　娜大津（博多）に着く（紀）。七月　天皇、朝倉宮に没（紀）。
六六二	天智 元	五月　大将軍安曇比羅夫ら、船師百七〇余隻を率い渡海（紀）。
六六三	天智 二	三月　将軍上毛野稚子ら、兵二万七千人を率い新羅を撃つ（紀）。八月　倭軍白村江で唐軍と戦い、大敗（紀・唐書・新唐書・三国史記）。九月　倭軍本国に退く（紀）。対馬・壱岐・筑紫等に防人と烽を置き、筑紫に水城を築く（紀）。
六六四	天智 三	八月　百済人の答ホン（火＋本）春初を遣わして長門に城を築かせ、憶礼福留・四比福夫を筑紫に遣わして大野城・基肄城を築かせる（紀）。
六六五	天智 四	三月　近江の大津に遷都（紀）。
六六七	天智 六	十一月　倭国に高安城、讃吉（讃岐）に屋嶋城、対馬に金田城を築く（紀）。
六六八	天智 七	九月　唐、高句麗を滅ぼす（紀・唐書・新唐書・三国史記）。
六六九	天智 八	この冬　高安城を修理し、田税を収める（紀）。

年	代	出来事
六七一	天智一〇	十一月　唐の使人郭務悰、二千人を船四七隻に乗せ、対馬に到る（紀）。
六七二	天武　元	五月　郭務悰帰国（紀）。六月　壬申の乱。大海人皇子（天武）、吉野に蜂起。筑紫大宰栗隈王、近江朝廷の発兵命令を拒否（紀）。七月　近江朝廷滅ぶ（紀）。
六七三	天武　二	二月　天皇、飛鳥浄御原宮に即位（紀）。
六七五	天武　四	二月　天皇、高安城に行幸（紀）。
六七九	天武　八	十一月　難波に羅城を築く（紀）。
六八一	天武一〇	八月　使人、多禰国の図を貢上（紀）。
六八二	天武一一	七月　大隅・阿多の隼人、来朝し方物を貢上。多禰・掖玖・阿麻弥の人に禄を賜う（紀）。
		十二月　海中で衣服を失った防人のために衣四五八端を筑紫に送る（紀）
六八五	天武一四	九月　天武天皇没。大隅・阿多の隼人、殯宮に誄を奉る（紀）。
六八六	朱鳥　元	二月　期に満ちた筑紫の防人を交替させる（紀）。九月　石上麻呂らを筑紫に遣わし、新城を監察させる（紀）。十月　天皇、高安城に行幸（紀）。
六八九	持統　三	十二月　藤原京に遷都（紀）。
六九四	持統　八	三月　文博勢らに多禰を視察させる（紀）。
六九五	持統　九	四月　文博士らに南島を探索させる（続紀）。五月　大宰府に大野・基肄・鞠智の三城を修理させる（続紀）。八月　高安城を修理させる（続紀）。
六九八	文武　二	七月　多☒・夜久・菴美・度感等の人来朝（紀）。九月　高安城を修理させる（続紀）。
六九九	三	十二月　大宰府に三野城・稲積城を修理させる（続紀）。

年代		出来事
七〇〇	文武 四	六月　覓国使を脅迫した薩摩・大隅の隼人の指導者を処罰（続紀）。
七〇一	大宝 元	三月　大宝律令を制定（続紀）。八月　高安城を廃止（同）。
七〇二	大宝 二	六月　遣唐使粟田真人ら、唐に渡る（続紀）。八月　薩摩・多☒を征討（続紀）。十月　唱更国（薩摩国）内に柵を置き兵に守らせる（続紀）。
七〇七	慶雲 四	七月　南島の人に叙位・賜物（続紀）。
七〇九	和銅 二	十月　薩摩の隼人入朝。騎兵を徴発し威儀に備える（続紀）。
七一〇	和銅 三	正月　日向国に采女、薩摩国に舎人を貢上させる（続紀）。日向隼人曽細麻呂に叙位（同）。 三月　平城京に遷都（同）。
七一二	和銅 五	正月　河内国高安烽を廃し、同国高見烽・大和国春日烽を置く（続紀）。八月　高安城に行幸（続紀）。
七一三	和銅 六	四月　大隅国を置く（続紀）。五月　諸国に風土記の撰進を命じる（同）。七月　隼人を征討した将軍・士卒に授勲（同）。
七一四	和銅 七	三月　豊前国の民二百戸を移し隼人を教導させる（続紀）。十二月　南島の奄美・信覚・球美などの人来着（同）。
七一六	霊亀 二	五月　薩摩国・大隅国貢上の隼人を六年ごとの交替とする（続紀）
七一七	養老 元	十月　遣唐使、唐に朝貢（冊府元亀）。
七一八	養老 二	四月　道首名没。和銅末年に筑後守となり、肥後守を兼任。味生池を築く（続紀）。
七一九	養老 三	十二月　備後国の茨城・常城を停める（続紀）。

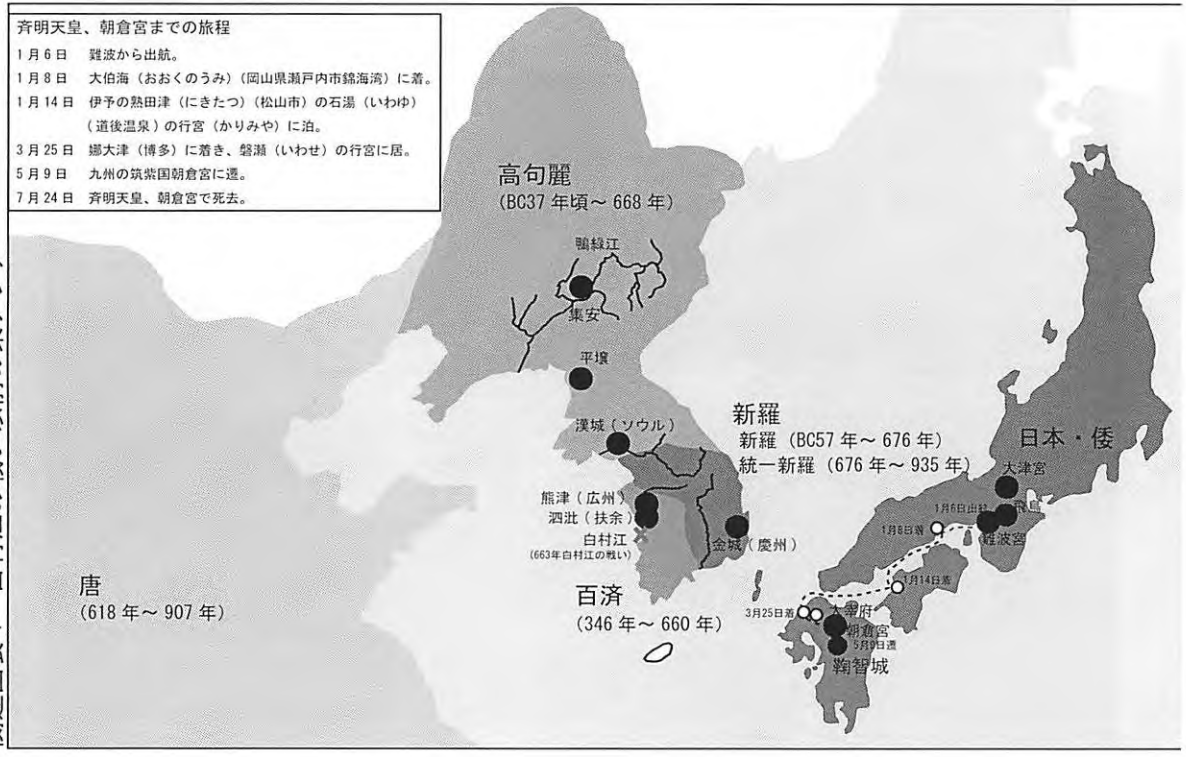
年	代	出来事
七二〇	養老 四	二月　隼人反乱、大隅国守陽侯麻呂を殺す（続紀）。三月　大伴旅人を征隼人持節大将軍に任命（同）。八月　大伴旅人を帰京させる（同）。藤原不比等没（同）。十一月　南島の人二三二人に授位（同）。
七二一	養老 五	七月　征隼人副将軍ら帰還し戦果を報告（続紀）。
七二三	養老 七	五月　大隅・薩摩二国の隼人ら六二四人が朝貢（続紀）。
七二七	神亀 四	八月　渤海使出羽国に来着（続紀）。十一月　南島の人一三二人来朝（同）。
七二九	天平 元	二月　長屋王の変（続紀）。
七三〇	天平 二	三月　大隅・薩摩国の班田を行わず、墾田のままとする（続紀）。九月　諸国の防人を停める（同）。
七三一	天平 三	四月　日本国の兵船三百艘、新羅の東辺を襲う（三国史記）。十一月　畿内に惣管、諸道に鎮撫使を置く（続紀）。
七三二	天平 四	八月　諸道に節度使を置き防備を強化（続紀）。この年　渤海、唐の登州を襲う（唐書）。
七三三	天平 五	四月　遣唐使、難波を発つ（続紀）。
七三五	天平 七	二月　国号を王城国と改めるにより、新羅使を帰国させる（続紀）。八月　大宰府管内に疫病流行（同）。
七三七	天平 九	二月　遣新羅使、新羅の無礼を報告。官人に意見を問う（続紀）。九月　筑紫の防人を停め、筑紫の人に壱岐・対馬を守らせる（同）。この年　疫病により死者多数（同）。
七三九	天平一一	五月　諸国の兵の徴集を停める（三代格）。

年代		出来事
七四〇	天平一二	九月　藤原広嗣の乱起こる。東海・東山・山陰・山陽・南海五道の兵一万七千人を徴発し九州に赴かせる（続紀）。十月　板櫃川の戦。広嗣敗走し斬殺される（同）。
七四一	天平一三	二月　国分寺造営の詔を発する（続紀）
八一一	弘仁　二	閏十二月　新羅船二十余艘、対馬を窺う（紀略）。
八一三	弘仁　四	三月　新羅人一一〇人、肥前国値賀島に来着し交戦（後紀）。八月　筑前・筑後・豊前・豊後・肥前・肥後六国の兵士を一万七〇〇〇人から九〇〇〇人に減定。肥後国は軍団四、兵士は四千人から二千人に（三代格）。
八一五	弘仁　六	八月　新羅西辺の州郡に大飢饉。盗賊蜂起（三国史記）。
八一六	弘仁　七	この年　新羅の飢民、唐の浙東に至り食を求める（唐会要）。
八二六	天長　三	十一月　大宰府管内の兵士を廃し、選士一七二〇人・衛卒二〇〇人を置く（三代格）。
八二八	天長　五	四月　新羅、張弓福（張保皐・張宝高）を清海鎮大使とする（三国史記・新唐書）。
八三九	承和　六	八月　新羅、張弓福を鎮海将軍とする（三国史記）。
八四〇	承和　七	十二月　新羅の張玉高（張弓福）の使者、大宰府に来たり方物を献じる（続後紀）
八四一	承和　八	十一月　張弓福、殺害される（新唐書・三国史記）。
八四九	嘉祥　二	八月　唐商五十三人、貨物とともに大宰府に着く（続後紀）。
八五一	仁寿　元	二月　新羅、清海鎮を廃する（三国史記）。
八五八	天安　二	閏二月　二十四日　肥後国菊池城院の兵庫の鼓、おのずから鳴る（文実）。二十五日また鳴る（同）。五月　菊池城の不動倉十一宇に火（同）。
八五九	貞観　元	五月　肥後国合志郡を割き、山本郡を置く（三実）。

年代		出来事
八五九	貞観　元	七月　唐商李延孝ら四三人、大宰府に来着（三実）。
八六二	貞観　四	十一月　肥後国大宅牧を停める（三実）。
八六四	貞観　六	五月　新羅海賊博多に来襲、豊前国の貢納物を奪う（三実）。七月　肥後国に大風雨（同）。
八六九	貞観一一	六月　筑前などの諸国の警備を強化させる（三実）。
八七〇	貞観一二	七月　渤海使、肥後国天草郡に漂着（三実）。
八七三	貞観一五	六月　烏数百羽、菊池郡倉舎の萱草を噬み抜く（三実）。
八七五	貞観一七	三月　大野城衛卒の粮米を城庫に納めさせる（三代格）。
八七六	貞観一八	三月　肥後国菊池郡城院の兵庫の戸、おのずから鳴る（三実）。
八七九	元慶　三	十一月　唐、黄巣反乱し長安城を陥れる。僖宗、難を成都に避ける（唐書）。
八八〇	元慶　四	五月　黄巣、朱全忠らの軍に敗れる（唐書）。
八八四	元慶　八	四月　新羅国の徐善行・高興善ら四八人、肥後国天草郡に来着（三実）。
八八五	仁和　元	五月　新羅の賊、肥前国松浦郡に襲来（紀略）。閏五月　同、肥後国飽田郡を襲い民家を焼く（紀略）。
八九三	寛平　五	四月　新羅の賊、対馬島を襲う（紀略）。八月　対馬島に防人を再置（三代格）。九月　新羅の賊四五艘、対馬に襲来。島守文室善友嶋人をひきい防戦、二百余人を殺し撃退（略記・紀略）。出雲・隠岐等の国に烽燧を再置（三代格）。菅原道真の建言により遣唐使を停止（紀略・菅家文草）。
八九四	寛平　六	三月　博多警固所に夷俘五〇人を加置し一〇〇人とする（三代格）
八九五	寛平　七	四月　肥後国の史生一員を停め弩師を置く（三代格）。
八九九	昌泰　二	

年代	出来事
九〇四　延喜　四	八月　朱全忠、昭宗を殺す（唐書）。
九〇七　延喜　七	朱全忠、哀帝から禅譲を受け後梁を建国。唐滅亡（唐書）。
九一八　延喜一八	六月　王建即位し、国を高麗と号する（高麗史）。

関連図表１　白村江の戦い以前の東アジア



関連図表 2　鞠智城全景

関連図表 3　長者原地区の建物跡群

↑完掘状況（撮影：平成 9 年度）　↓第 10 次（昭和 63 年度）～第 12 次（平成 2 年度）

関連図表 4　八角形建物跡

↑南側の八角形建物跡　　↓北側の八角形建物跡

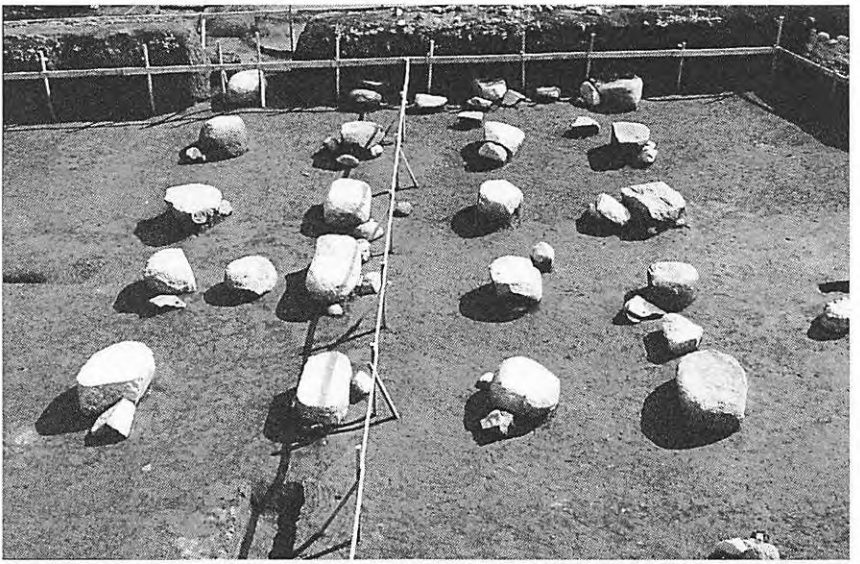
関連図表 5　宮野礎石

↑発掘調査時（昭和 55 年度）　　↓整備状況（実物展示）

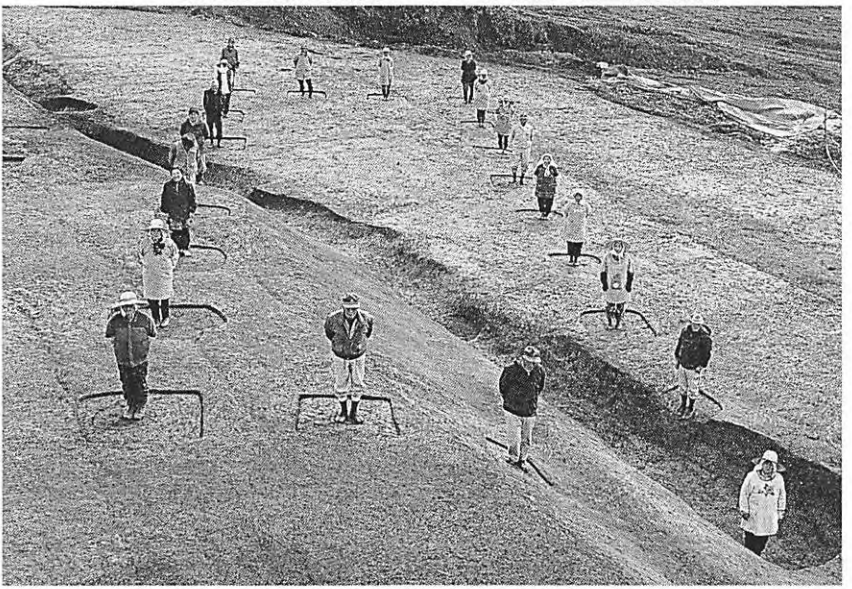
関連図表 6　56 号建物跡（礎石建物跡）

↑桁行 6 間　　↓梁行 3 間

関連図表 7　礎石建物跡・掘立柱建物跡



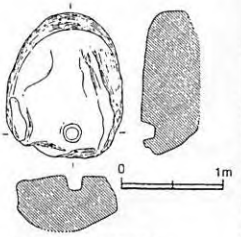
↑20 号建物跡（礎石建物跡）　↓60 号建物跡（掘立柱建物跡）



関連図表８　池の尾門跡

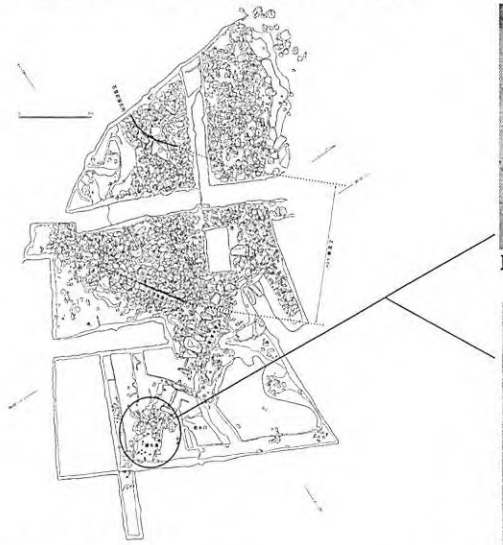
東側から

垂直方向



池の尾門跡門礎石

関連図表 9　池の尾門跡の通水施設

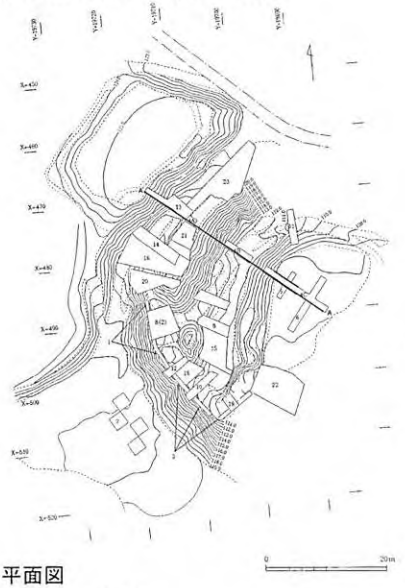


取水口

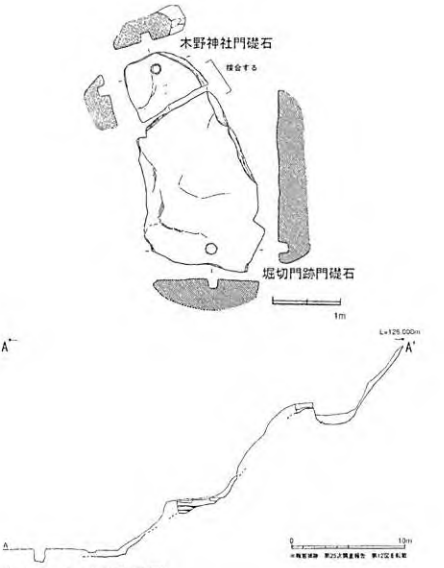
取水口と導水溝

通水溝（蓋石の列）

関連図表 10　堀切門跡



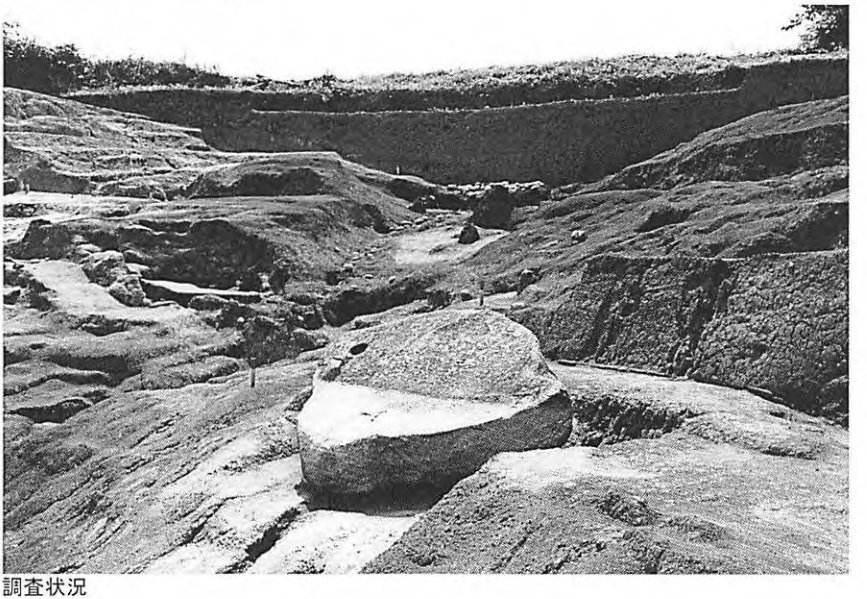
平面図



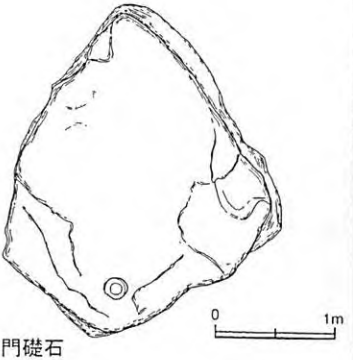
4 トレンチ断面図

堀切門の道路跡

関連図表 11　深迫門跡



調査状況



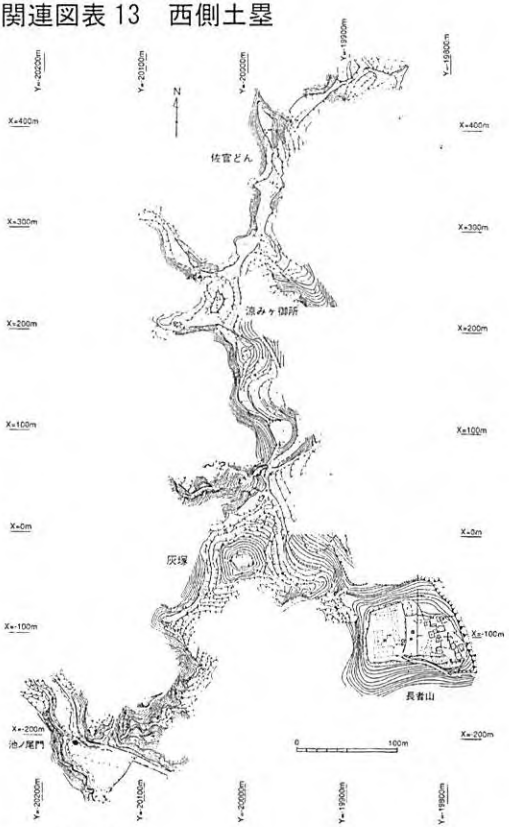
門礎石

深迫門全域

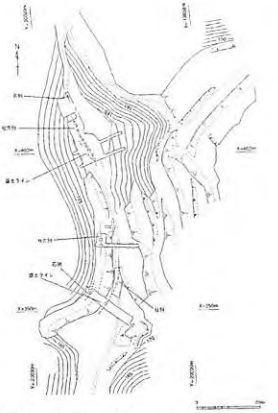
関連図表 12　鞠智城の外郭線・西側土塁線

西側土塁線

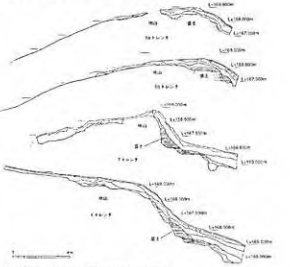
関連図表 13　西側土塁



土塁線の全体図



北端部土塁平面図



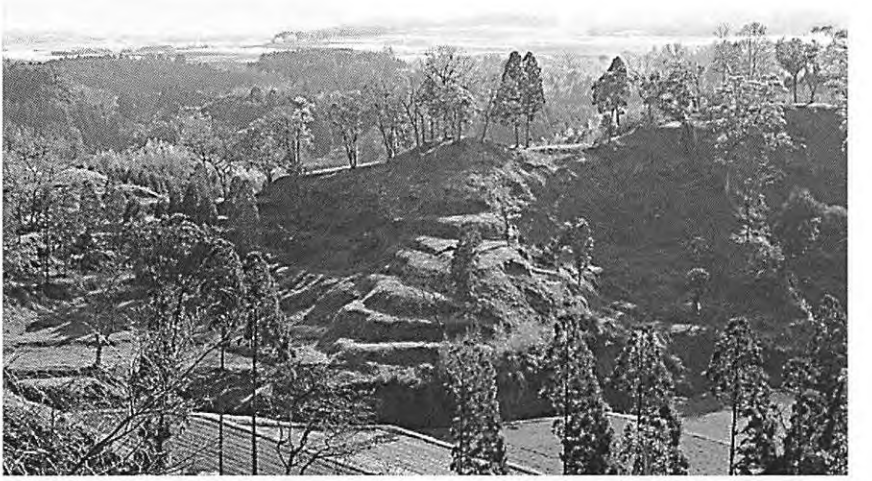
北端部土塁断面図

7 トレンチ盛土
版築状況

6 トレンチ盛土状況

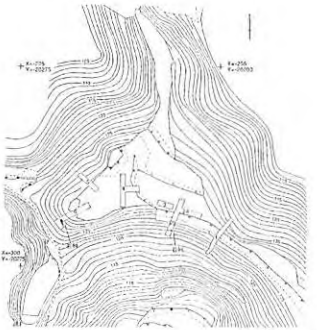
7 トレンチ土塁裾
の柱列

関連図表 14　南側土塁線

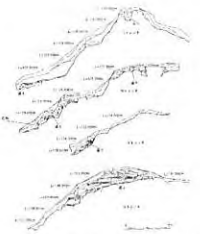


↓南側土塁線の版築状況

関連図表 15　南側土塁

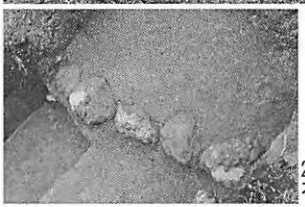


西端部平面図



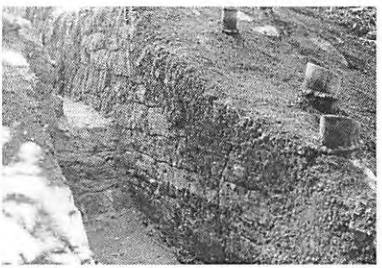
西端部土塁断面図

南側土塁線 B 地点



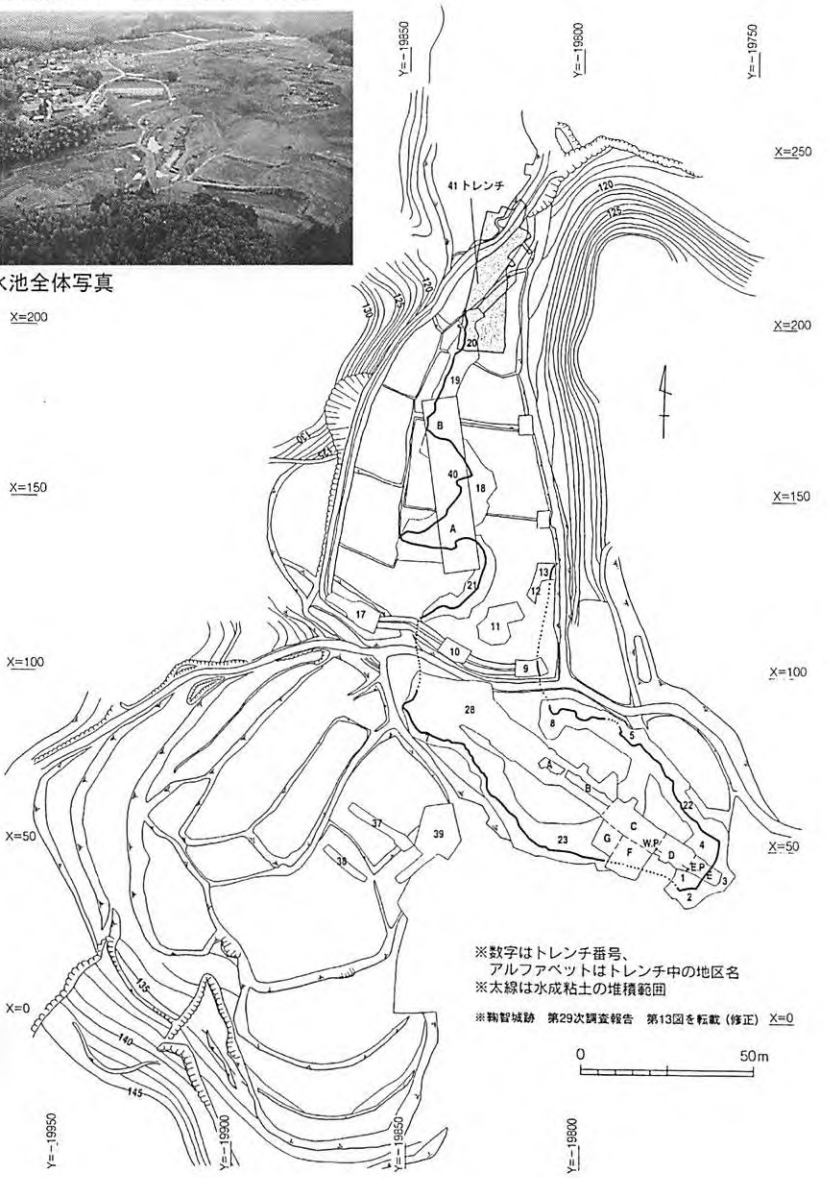
2 トレンチ
石列

版築検出状況



関連図表 16　貯水池跡平面図

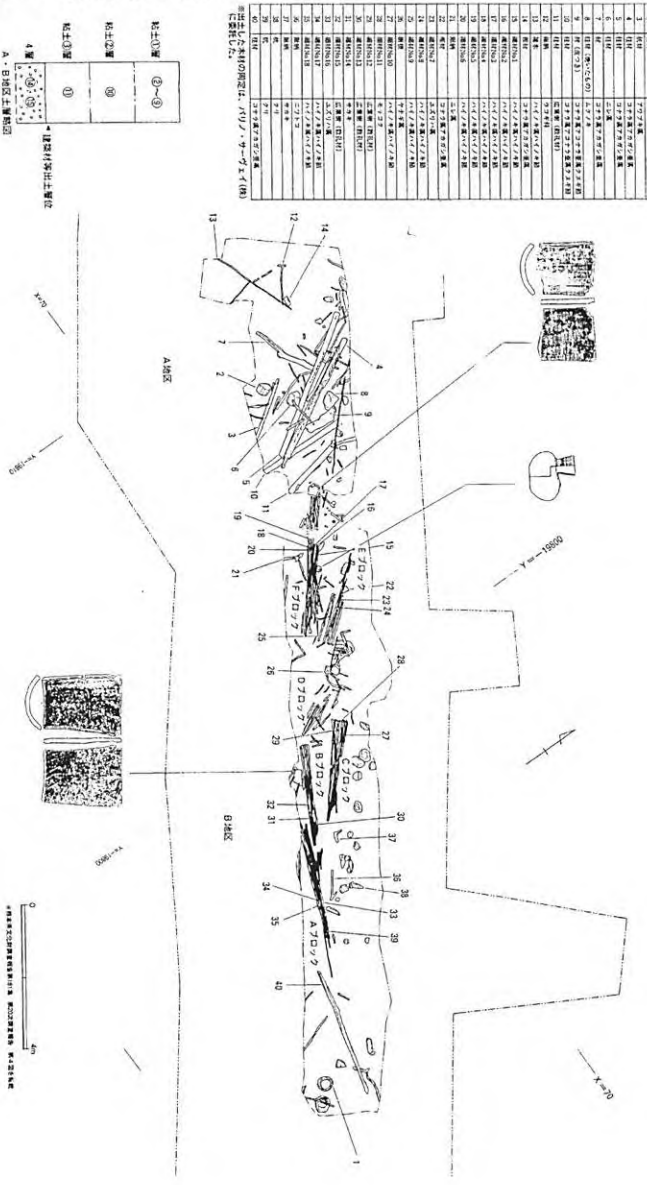
貯水池全体写真



関連図表 17　貯水池跡・貯木場

↑貯木場検出状況　　↓小舞・平瓶出土状況

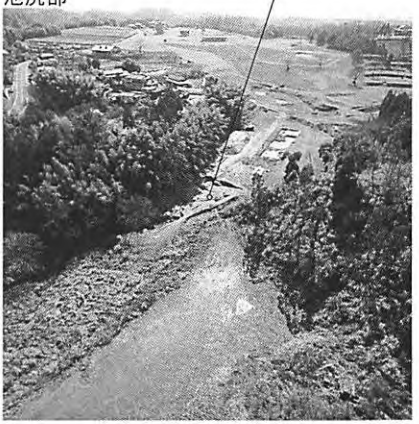
関連図表 18　貯木場平面図

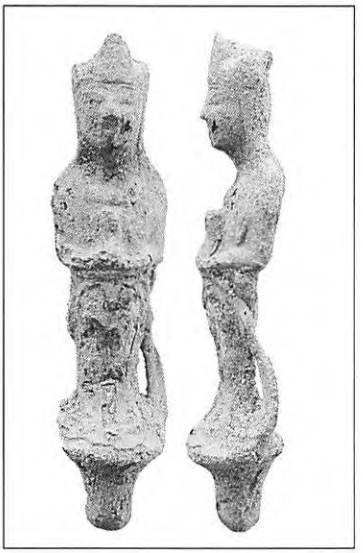


関連図表 19　貯水池跡池尻部出土の百済系菩薩立像

百済系菩薩立像出土状況

池尻部





この電子書籍は、古代山城鞠智城を考える 鞠智城シンポジウム成果報告 2009 を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、古代山城がある市町村教育委員会、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：古代山城鞠智城を考える 鞠智城東京シンポジウム報告書
鞠智城シンポジウム成果報告 2009
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話： 096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：西暦 2022 年 7 月 21 日